
Muv-Luv Alternative for Answer

マーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v A l t e r n a t i v e f o r A n s w e r

【Nコード】

N 7 9 6 8 S

【作者名】

マーズ

【あらすじ】

M u v - L u v の世界に一人のリンクスが……。

平行世界で彼がたどり着く“答え”とは……そして、世界の命運は……。

原作ゲームを一切やっていないので、知識は設定資料と小説だけです。衝動書きですので、そのところはご了承ください。

Prologue

綺麗だ……。

彼は愛機の左肩に腰掛け、一筋の輝きを目にしていた。衛星掃射^{エーレンベ}砲が放つ輝きは地上から真っ直ぐに無限の上空へと伸びていく。その光の道には神々しさすら感じられる。

（……これでよかったのだろうか）

そんな言葉が頭をよぎったが、すぐに掻き消した。

『後悔するなよ、お前が決めた事なんだからな』

（そうだな、セレン。お前の言うとおりだ）

この選択は他でもない俺自身で決めた事だ。後悔も……そして、迷いも持つ事は許されない。

「マクシミリアン……俺の役目は果たしたぞ」

それだけ呟くと、左肩から首筋の後にあるコックピットに身を沈めた。AMS、神経接続クリア。ジェネレータ起動。

「さて……これからどうするか」

マクシミリアンとの盟約もなくなった今、これから何をすればいいのか……。

……タ……ス……ケ……

「……ッ!？」

（今、何かが……）

聞こえたような気がした。己の耳ではなく、体の中に直接……そう。まるで頭の中で直接響いたような……。

機体に搭載されているレーダーサイトを確認。外には人っ子一人いない。しかし、先程聞こえた“何か”は擦れてはいても人間……それも女の声に聞こえた。

……タ……ス……ケ……テ……

（タスケテ……助けてだど?）

まだだ。今度は先程ほど擦れていない。何とか聞き取る事ができ

た。しかし、不可解だ。頭の中に直接語りかけてくるようなこの感覚……。

…タ…ス…ケ…テ……タスケテ！

先程までとは打って変わって悲鳴のような声が頭の中に響く。

「何なんだ、これは…！」

脳を揺すられているようなこの不快感。平衡感覚が麻痺してきたのか、体の姿勢を保てなくなる。手を付いて体を支える。“声”はさらに強くなる。視界がぼやけ、体がコンソールに倒れこむ。

「畜生……」

次の瞬間、視界が白一色に変わった。それを認識した後、彼は意識を手放した。

P r o l o g u e (後書き)

プロローグが短い……

次話は設定です

機体設定

アーマードコア・ネクスト『スカイ・ウィクター空の覇者』

本作主人公であるカラードランクN031、リンクスである主人公が乗るワンオフ・ネクスト。

装甲は藍と白のツートンカラー。関節はくすんだ黄色。

ホワイト・グリントの予備パーツと天才アーキテクト・アブ「マーシユの協力によって開発された完全専用機であり、ホワイト・グリントの発展型。そのため、各パーツの名称は『WHITE - GLINT?』となっている。また、開発には主人公当人も関わっている。

機体構成

HEAD / WHITE - GLINT?

CORE / WHITE - GLINT?

ARMS / WHITE - GLINT?

LEGS / WHITE - GLINT?

R・ARM / 051ANNR (腕部に07 - MOONLIGHT)

L・ARM / 03 - MOTORCOBRA (腕部に07 - MOONLIGHT)

R・BACK / HLC09 - ACRU X

L・BACK / S ALINE05

フライマルアサルトアーマー

各部にP A、A A用の高性能コジマ粒子放出器が内蔵され、効果範囲と威力は格段に向上。

また、高出力ジェネレータにより、ハイレーザーキャノンはエネルギーが続く限り、連射可能（ただし、砲身の冷却、次弾チャージの関係で最大連射数は限られる。ある程度の空白を空けながら運用すれば、長時間の連続使用も可能）。

機体設定（後書き）

本編の進行に合わせて編集予定です

Episode 1

うう……。

「ど、どうなったんだ…？」

コンソールに倒れこんでいた体を起こす。まだ、頭痛と体に残る違和感が消えていないが、どうやら先程の不思議な現象は止んだようだ。

「……………何だ、ここは…？」

視線を上げ、外部モニターを見た瞬間、目を見開いた。先程まで自分は三基の衛星軌道掃射砲が見える高台に機体を止めていた。しかし、今目の前に広がる光景は…………。

「廃墟……………だけだな」

見渡す限りの廃墟郡。360度何処を見ても瓦礫と化した建物が並んでいる。どうやら、ここは昔閑静な住宅地があったようだ。今は見る影もないが…………。

（いったい、どうなっているんだ？ 気を失っている間に一体何が…………）

いったいどれだけの時間が経ったのか…………。

「……………どうなっている？」

HUDに表示される。

「なぜ、ワールド・クロックが狂っているんだ？」

機体に備わっているワールドクロックが全て狂っていた。

（システムエラー……………いや、気を失う前にそんな異常はなかった）
考えられる要素は…………。

「さっきの“謎の現象”だけか…………」

その時、機体に搭載されているレーダーサイトに熱源反応及び動体反応を感知。

「……ッ！」

すぐさま、ジェネレータを起動。念のため、機体の自己診断プロ

グラムも立ち上げる。

ファイア・コントロール・システム

（メインシステム、及びFCS、姿勢制御システム……問題なし。
エネルギー コジマ
EN・KP出力、安定。ミリタリーレベルまで上昇可能。各部関節
異常なし。武装……全てFCSのコントロール下……オールグリー
ン）

自己診断プログラムのデータを見る限り、機体に以上は見られない。戦闘は可能。

（戦闘になるなら、PAの粒子濃度の調整が必要か……）

機体に備わっているコジマ粒子計測器を動かす。結果は彼の予想を大きく裏切るものだった。

「計測結果……0%だと!？」

（馬鹿な！この地上で、コジマ汚染がない場所なんて存在しないはずだ!！）

しかし、HUDに表示されている数値は“0”。計器類のエラーはない。つまり、この数値に間違いはないという事になる。

動体反応がさらに接近。

「動体反応は……4。小隊か」

観測された音紋と振動をライブラリーと照合。

「——該当なし？」

ライブラリーには現在存在する殆どの機動兵器のデータが保存されている。しかし、結果は該当なし。機体のライブラリーに保存されているMT・AC・ネクストとのどれとも一致しない“何か”が接近している。これが意味する事は……。

（企業側の新兵器か？ そんな情報はなかったが……）

機影が目視できる距離まで接近する。水色の機体4機。それぞれ武装を所持し、銃口は間違いなく、こちらを向いている。

「デカイな、16…いや、18mはあるか」

こちらよりも二回りは大きい。1.5倍といったところか。

（全て同型機。目視で確認できるのは手持ちのマシンガンに肩の長刀……対艦刀か。後は肩のミサイルポッド……）

あの機体のスペックは未知数だが、性能がノーマルACクラスなら制圧は可能だ。

「通信をつなげてみるか……」

こんな状態で戦闘するのは出来るだけ避けたい。相手がこちらに敵意を向けるのなら、容赦なく排除するが、無駄な血は流す気もないのでまずは様子見だ。

「——ダメか。通信を開いていないか、周波数が合っていないのか」
後は外部出力スピーカーしかない。

《その戦術機！》

（戦術機……？）

向こうからコンタクトを取ってきた。しかし、“戦術機”とはいったい何の事だ……。

「コイツの事なのか？」

コイツとは彼が乗っている機動兵器アーマードコア・ネクストに他ならない。

《すぐに武装解除に我が方に帰順せよ。こちらは国連軍所属A-01連隊第9中隊隊長、伊隅みちる大尉だ》

（国連軍……？）

その組織名には聞き覚えがあった。だが、それがあったのは今から数十年以上昔の事だったはず。現在、世界の何処を見ても“国家に帰属する軍隊”など存在しない。

（とりあえず、コンタクトを取ってみるか……）

「聞こえるか、伊隅みちる。こちらはカリードランクNo31だ」

《カリードランク？ 一体何の事だ！？ 所属と階級を言え！》

（カリードランクを知らない？……どうなっているんだ？）

余計謎が深まる。国連軍と名乗った伊隅みちる達はこちらを敵と見なしたのか、密集隊形から散開してこちらを包囲殲滅する隊形に変わる。

「ちよつと待て、こちらに交戦の意味はない」

《なら、すぐさま武装解除しろ》

「それは出来ないな。後でどんな目に合うか知れたものじゃない」
《10秒以内に武装解除しろ、解除しない場合は実力を持って排除する》

「——仕方ないか」

殺し合うつもりは全くないのだが、相手がその気なら致し方ない。
「売られた喧嘩は買わせてもらう……」

ジェネレータ出力をミリタリーレベルまで上昇。EN・KP出力
戦闘レベルまで上昇。

《……4……3……2……1……0！ 各機攻撃開始ッ！！》

四方からの一斉射。

「行こうか、『空の覇者』」
スカイ・ヴィクター

アーマードコア・ネクスト『スカイ・ヴィクター』が天を舞う。

アンノウン
所属不明の戦術機が突然基地近くに現れた時、実弾演習を行っていたA-01部隊。CPからアンノウンの確認及び敵対する場合は撃破せよ——との命令を受けた部隊長伊隅みちるは隊員三名を引きつれ、アンノウンが出現した区域に向った。

アンノウンは戦術機にしては機体が小さく、通常よりも二回りは小さい。123m程か。通信を開こうとしたが、向こう側が回線を閉じているのか全く応答がない。仕方ないので外部スピーカーを使った。何とか相互通信は出来たが、アンノウンのパイロット……カールドランクN031と言ったか。訳の分からない事を言っている。こちらの要求に応じなかった。それどころか膝を突いていた機体を起動させ、銃口をこちらに向けてきた。

場合によっては撃破せよ——と命令を受けていたため、こちらは攻撃態勢に入った。こちらの戦力は不知火4機。初の純国産機であり、第3世代機でもある不知火は長年培ってきたノウハウの結晶であり最新の軽量複合装甲による軽量化、耐熱・耐弾装甲の部分使用、駆動部の軽量化、機体制御の高性能アビオニクスによって、前線の

パイロットから寄せられた困難な仕様要求を実現している。

彼我の戦力は明白。制圧も時間の問題。部隊長伊隅みちるはそう思っていた。戦闘が始まる直前までは……。

「なっ!？」

四機同時斉射。87式突撃砲から撃ち出された数百発の36mm弾は“敵機のいた場所”に着弾した。

(いったい、何処に!?)

《伊隅隊長、上です!》

敵機は上空に上がっていた。

(発砲から着弾までの一瞬のタイムラグで飛び上がったというのか!?)

そんな機動が戦術機に出来るはずがない。横左右に水平噴射跳躍ならともかく、一瞬で上空に上げられるほど大出力の跳躍ユニットは存在しない。

「っ!」 ヴァルキリー1より各機、敵機はかなりの機動力を有している! 油断するな!」

《《——ッ了解!!》》

すぐさま、伊隅は隊形を密集隊形に変更。あれだけの機動力を有している機体相手に、分散して戦っては個々撃破されてしまう。

「ヴァルキリー2、私に続け! ヴァルキリー3、4は後方から援護! 各機密集隊形を崩すな!」

《《——了解!!》》

跳躍ユニットを起動、ホライゾンナルブースト水平噴射跳躍で敵機に接近。同時に四機で連携をとりながら、時間差攻撃を加える。だが、その攻撃も敵機は圧倒的な機動力で全弾回避。

(瞬間回避速度が1000km/hを超すだ!?) そんな機体があつてたまるか!)

伊隅は毒づくつきながらも隊員に命令を飛ばす。

「ヴァルキリー2、速瀬! 飛ぶぞ、遅れるな!」

《——了解!!》

飛び上がる二機の不知火。追撃を嫌ったのか敵機は空中から地上に降りた。

「このまま、頭を抑える！」

空中でホバリングしながら連射を続ける二機。残りの二機は廃墟を利用しながら攻撃。無駄のない見事な動きを見せ付ける。

「良く訓練された動きだな」

追撃を回避しながら彼は見事な連携攻撃を見せ付けるA-01のレベルの高さに少し驚いていた。

伊隅ワルシリーズ

（だが、機体性能はノーマルAC以下だな）

ノーマルにも劣る性能でネクストであるコイツに対抗するのは不可能だ。事実、戦闘開始60秒、空の覇者には今だ一発も攻撃が当たっていない。そのため、現在ヴィクターのPAは切って戦闘を行っている。コジマ汚染のないこの場所を汚すのが気が引けたのもあるが、この程度の戦力なら被弾無しに終わらせられる自信があったからだ。

「たかが4機。本気を出す必要もない」

ネクストはノーマルACと比べ物にならない性能を有している。国家解体戦争以前に発見されたコジマ粒子、ネクストはその粒子を軍事利用する過程で生まれた汎用機動兵器であり、その性能は一機で小国を壊滅させるほどだ。事実、30機程度の旧式ネクストにより始まった国家解体戦争は企業側……つまりネクストの完全勝利で終わっている。全世界の国家戦力よりもたった30機のネクストの戦力の方が凌駕したのだ。それから数十年、コジマ粒子技術は発展を続け、最新技術で製作されたヴィクターの性能は平均的なネクストの数機分の戦力に匹敵する。

スカイ・ヴィクター

ハイエンド機であるネクスト——中でも空の覇者は専用のパーツで組み上げられたワンオフネクストだ。ラインアーク陣営の主戦力だったホワイト・グリントの予備パーツとその製作者であるアーキ

テクトゥアップ・マーシユの協力によって完成したスカイ・ヴィクターはホワイト・グリントの可変機構はそのまま空力特性と積載量を改善している。これにより、空中機動性が格段に向上している。またメインジェネレーターも強力なAAと航続距離に優れたOBを両立した新型を搭載。

そして武装面も……。

ホワイト・グリント同様の右手にBFF製ライフル——051ANNR。

左手にはレイナード製マシンガン——03-MOTORCOBRA。右肩には旧エメリスのレーザー技術の結晶であるハイレザーキヤノン——HLC09-ACRUX。

左肩にはMSAC製スプレッドミサイル——SALINE05を装備。

さらに腕のパーツを改良した事でマニピュレーターに武器をホールドした状態でありながら腕の部分にレイナード製レーザーブレード——07-MOONLIGHTが装備されている。

（軽く捻り潰すか……）

右手のBFF製ライフル、及び左手のマシガンセイフティの安全装置を解除。上空の二機に照準を合わせる。

「行くぞ！」

ペダルを踏み込む。それに連動して背部のメインブスターが噴射。12mもある鋼鉄の体を上空へ押し上げる。不知火を操る伊隅と速瀬は接近してくるヴィクターに突撃砲の集中砲火を浴びせるが、それもネクストご自慢のクイックブーストで回避される。左手のマシガンで地上の二機を牽制しつつ、三次元格闘機動で不知火に肉薄。攻撃の隙を突いて051ANNRで右腕を狙い撃ちした。打ち抜かれた不知火の右腕が宙を舞う。続けて、左肩のスプレッドミサイル——SALINE05で地上の宗像と風間を攻撃。ミサイル2基、計16発の小型ミサイルが地上に降り注ぐ。

不知火の右腕が？ぎ取られた時に働いたモーメントで機体の姿勢が狂う。伊隅は持ち前の操縦技術で立て直し、左手の追加装甲——盾をパージした。こんな物を持つていても何の役にも立たない。

（今の射撃……奴は間違いなく不知火のに右腕だけを狙っていた！）そこから導き出される事は一つ。あの敵機のパイロットはこちらを撃破するのではなく、無力化しようとしている。つまり、“殺す気がない”ということだ。

完全に舐められている……だが、あの機動に付いていくのは不可能……としか言いようがない。

「速瀬、大丈夫か！？」

《だ、大丈夫です！ 右腕がやられただけです》

「追加装甲をパージしろ！ 死重量だ！！」
デッドウェイト

《——りよ、了解ッ！！》

コックピット内に警報が鳴り響く。こちらが体勢を立て直している間に、敵機は地上のヴァルキリー2、3——宗像と風間に照準を定め、左肩のミサイルポッドから2発ミサイルが発射された。2人は即座に回避運動と迎撃を行った。だが……。

（クラスターミサイル！？）

ミサイルの外装が分解したかと思うと、中から計8発の小型ミサイルがホーミングされた。計16発のミサイルに対処しきれず、ヴァルキリー3、4は着弾の爆発に飲み込まれる。

「宗像、風間ッ——！」

すぐさま地上に降りる。ヴァルキリー3……宗像機は爆風で吹き飛ばされ、廃墟に埋もれるように停止している。風間機も同じ様な状態で、廃墟を支えに何とか姿勢を保っている。通信は開いているが、返答がない。バイタルモニターを確認する。宗像は気絶している。風間も気絶こそしていないが、バイタルが乱れている。

《よくも——ッ——！！》

激情した速瀬がブレードマウントの74式近接戦闘長刀を掴む。

マニピュレータが長刀の柄を掴んだところで固定していたロッキングボルトの炸薬が起爆、長刀を強制排出される。続けてロッキングリップが展開、パイロンの火薬式ノッカーが作動、十数mはある長刀が跳び上がる。

速瀬はその勢いと腰の跳躍ユニットエンジン——FE108-FHI-220のアフターバーナーの合わせ技でヴィクターに近接格闘戦を仕掛ける。

「速瀬っ！！ 止める！！」

伊隅の制止も振り切り、速瀬は長刀で振り落とした。いや、振り落とそうとした……。

《えっ……？》

それは一瞬の出来事だった。ヴィクターは左手にホールドしていたマシンガンを腰だめのモジュールに固定すると、まるで自分から差し出すように左腕を構えた。そして長刀が振り落とされる瞬間、電光石火の早業で不知火の左腕を救い上げるように左腕を振った。

次の瞬間、不知火の左腕が長刀ごと跳ね飛ばされた。

両腕を失った速瀬機の腹部にヴィクターの回し蹴りが入る。速瀬機はそのまま地上に落下。そのまま機能不全に陥る。

「おのれ……っ！！」

《大尉っ！ 離れてください！！》

風間機の肩に装備された92式多目的自立誘導弾システムから16連装×2基、計32基の小型ミサイルがランダム軌道を描きながら、次々とヴィクターに襲い掛かる。

この92式多目的自立誘導弾システムは対BETA戦や対戦術機など様々な状況に対応できる戦術機専用制圧兵器だ。制御ユニット——アクティブ・フェイズド・アレイ・レーダーを介してミサイルに転送される情報を基に複雑な軌道を描きながら目標を追尾する。終末は赤外線で目標に誘導する機能もあり、光線属種の迎撃も回避できるように開発されている。戦術機の起動を損なわず優れた制圧能力を秘めた92式多目的自立誘導弾システムは前線を抱える多く

の国々で採用されている。

それが一度に全弾——32基も一斉に襲い掛かってきたら、とてもじゃないが回避しきれない。普通の戦術機なら、文字通り“鉄屑”となるだろう。

だが、それはあくまで“戦術機”の話。鋼鉄の鎧であるACネクストの機動力を持つてすれば、高が30基程度のミサイルの対処など造作もない。ミサイルが発射された瞬間、背部の可変式OBを展開、ミサイルが接近する前に急加速で、戦術機の処理速度を越える機動でミサイルの追尾から逃れた。

目標をロストしたミサイルが伊隅と風間を目標と誤認する。

「風間、ミサイルの自爆装置を——！」

《だ、ダメです！ さきほどのダメージで制御系が——っ！！》

ミサイルは次々と伊隅と風間を狙って飛翔してくる。戦闘のダメージでIFFの識別信号も効かない。まだ、破損の小さい伊隅機はともかく、未だに立ち上がれない風間機はこのままではミサイルの餌食になってしまう。

《上空の機体、三時の方向に跳べ——！》

突然に通信から男の声が聞こえた。考えるより早く体が反応する。ペダルとスティックを瞬時に動かし、跳躍ユニットのロケットモーターを急点火。瞬時に機体を三時の方向へスライド移動させる。刹那、伊隅機のいた場所に青白い閃光が走る。それに打ち抜かれたミサイルが他のミサイルを巻き込んで爆発する。

風間機に襲い掛かっていたミサイルは突如降り注いだ鋼鉄の雨を食らい全て撃墜。伊隅と風間はいったい何が起きたのか判断できなかった。

《そこの二機、生きてるか？》

先程の声が通信機越しに聞こえる。そうだ、戦闘を始める前にスピーカーを通して聞いた敵のパイロットの声だ。

どうやら、ミサイルに補足された二機は無事のようだ。あの時、咄嗟に彼はOBとQBで超高G旋回を行い、右肩のハイレーザークリヤノンとマシンガンでミサイルを破壊したのだ。あのまま、見殺しにしてもよかったが、そうなった場合、確実に状況は悪いほうに拗れると思ったからだ。上空に上がった時、後方に大規模な基地があるのに気づいた。この部隊もおそらくその基地の所属なのだろう。

ここでこいつらを生かしておけば、基地司令官とのコンタクトを取る事が可能かもしれない……と考えた。基地司令官クラスなら、傭兵である自分の事も知っている可能性がある。自分はカラードランクNo31だが、実質そのランクはあのホワイト・グリントにも引けをとらないレベルだ。それなりに知名度はありと自負している。《な、何のつもりだ！？》

「最初に言っただろう？ こっちに交戦を意思はない……と。無駄な血を流すほど俺は馬鹿じゃないんでね。——もう一度だけ言う。こちらに交戦の意思はない。だが、今度攻撃を仕掛けてくるようなら、お前達の部隊だけじゃなく、後方の基地ごと廃墟の仲間入りする事になるぞ」

《……》

「話し合いの場を持ちたい」

《話し合いだと？》

「お前達は後方の基地の所属だろ？ その基地の司令官と話がしたい」

《そんな事が……》

「10分だけ時間をやる。話し合いで折り合いをつけるか、只の肉片と鉄屑に成り下がるか、好きな方を選ぶ」

半ば、脅しような要求だが、相手は応じる他ないだろう。この圧倒的な戦力差を見せ付けられた後では

……。

Episode 1 (後書き)

ご意見・ご感想があれば、お願いします

Episode 2

香月夕呼は非常に不機嫌だった。“計画”のため、地下の執務室兼研究室に籠っていた。そんな時、突然基地の警報が鳴り響いた。その五月蠅さといったら……。集中して思考をめぐらす事もできなくなり、イライラしていたら……。突然、内線がなった。話によると突如横浜基地の警戒エリアに所属不明の機影が現れたらしい。

状況が錯綜しているので詳しい情報が入ってこない。仕方ないので上の司令部の方まで上がる事にした。

「――ピアティフ」

「副指令！？ どうして…！？」

「その副指令だからよ。涼宮、状況は？」

「は、現在、市街地で実弾演習を行っていたA-01部隊が国籍不明機の確認に向かっています。こちらからコンタクトを取ろうと回線を開いているのですが、相手側が回線を閉じているのか全く応答がありません」

「IFFの識別信号は？」

「ありません」

「他に動きは」

「基地レーダーに突然補足されて以後動きを見せていません」

「そう……。ま、伊隅たちなら問題なく制圧するでしょ」

「はい……。A-01部隊、アンノウンを目視で補足。戦域データリンクを介してカメラ画像をモニターに出します」

司令室の大型スクリーンに不知火のメインカメラ画像が表示される。

「おかしいです。戦術機にしては小さ過ぎます。全長は15mもありません」

ピアティフの言うとおり、スクリーンに映っている機体は不知火と比べてかなり小さい。

（米軍の新型機動兵器？ でもそんな情報は……）

それに、あの機体の形状はどの戦術機にも当てはまらない特異な形状をしている。戦術機には必ず跳躍ユニットと言う主動機が搭載されている。だが、見る限りではあの機体に跳躍ユニットらしきものは見当たらない。一つ目に付くものといえば……。

（随分とゴツイ肩をしているわね……）

背部、肩からはみ出すほど大きなユニットが搭載されている。アレだけ大きかったら、機体のバランスも崩れるし、なにより死重量となつて機動力を削いでしまう。追加の増槽プロペラントタンクの可能性もありうるが、その両側に武器を付けているところから、只のパーツでない事だけは確かだ。

「副指令、伊隅大尉より交戦許可が……」

「——伊隅に一任するわ。場合によっては交戦も許可すると伝えて」

「は！」

「香月博士」

後で何も言わず、傍観していた横浜基地司令官バウル・ラダビノツドが一步前に出て夕呼に意見する。

「何故、我が横浜基地に現れたのか、その真意が分からない内に、交戦に出るのは危険では？」

「確かに司令官の言うとおりです」

「ですが……」と夕呼は続ける。

「この基地には、計画の全てがあります。何かあつてからでは遅いかと……」

ラダビノツドが押し黙った。夕呼の言うとおり、この基地に隠されている“モノ”の事を考えたら、たとえ戦術機一機でも放つておくわけには行かない。

「A-01部隊、交戦を開始します！」

A-01とアンノウンの戦闘が始まる。この時はまだA-01部隊がアンノウンを制圧すると思つていた。あの夕呼ですら……。

…

……

……

「うそ……」

「あ……」

オペレータである遙とペアタイプが言葉を失う。

戦闘開始わずか212秒。横浜基地でもトップクラスの実力を持つA-01部隊は立った一機の機動兵器によって無力化された。

アンノウンは圧倒的な機動力でA-01部隊を翻弄し、全機、破壊せずに無力化して見せた。さらに、危なく撃破されかけた伊隅機と風間機を助けるといふ真意の読めない行為までしてみせた。

あの機動兵器が一体何なのかは分からない。だが、第三世代の戦術機を遥かにしのぐ……いや、比べる事すら馬鹿馬鹿しくなるほどの戦闘力を秘めている。

夕呼は戦慄と狂喜で体の震えが止まらなかった。

「起動可能な戦術機全てにスクランブルを掛ける！ 大至急だ！！」

「は、はいっ！！」

ラダビノツド司令はすぐさま状況を呑み込み、基地で動ける全ての機甲部隊と戦術機部隊にスクランブル発進を命じた。

「待ってください、司令官」

「何だね、香月博士。君もさきほど……」

「涼宮、伊隅と通信は繋がっている？」

「は、はい、繋がっています」

「こつちに回線を回して」

「は……」

遙からインカムを受け取る。

「伊隅、生きているかしら？」

《は、申し訳ありません、副指令。このような無用な姿を晒してしまい……》

「そんな事はどうでもいいわ。動けるなら、今すぐにあのアンノウ

ンとコンタクトを取り直して頂戴」

夕呼の発言に管制室に詰めていたオペレータや遙、ピアティフ、ラダビノッド司令まで驚愕を顔に浮かべた。

《ふ、副指令……》

「聞こえなかったかしら？ 今すぐコンタクトを取りなさい！」
珍しく夕呼の口調が荒いものになる。

《あ、アンノウンの方から話し合いの場を持ちたいと申し出がありますが……》

「丁度良かったわ。すぐに応じて頂戴」

《で、ですが、奴は基地の司令官クラスとの一対一での話し合いを要求しています。その要求が呑めないようなら、基地ごと殲滅する
と……》

「なら、私とその相手をするわ。私はこの基地の副指令だし。問題ないでしょう」

インカムを耳から外すと夕呼はラダビノッド司令に向き直った。

「構いませんね、司令官」

「し、しかし……」

「伊隅の話を聞く限り、相手は無意味な交戦を避けているようです。相手の要求どおり、話し合いで済ませた方が双方にとってメリットが大きいと思いますが……計画についても……」

「……分かった、この件は君に一任しよう」

「ありがとうございます。涼宮、伊隅たちの回収は一任するわ」

「は！」

「ピアティフ、あなたはすぐにヘリを一機用意しなさい。大至急よ」
「は！」

それだけ指示を出すと、夕呼は管制室を後にした。その顔には隠しきれない狂喜が溢れていた。

何とか事は上手く運んだ……。

コックピット内で彼は体の力を抜いた。伊隅から話し合いに応じると回答を得たので、これで攻撃される事もない…… たぶん。

「さて……」

基地から副指令殿を乗せたヘリがつくまでまだ時間がある。

（ボランティアも悪くはないか……）

ヴィクターを地上に降ろし、瓦礫に埋もれる風間機に機体を近づけた。

「手を貸そう。機体は動くか？」

《えっ……？》

「何、ちよつとしたボランティアだ。他意はないさ」

腕を掴むとブースターを吹かして、機体を持ち上げる。大きさが違うのでこうしないと機体が大い戦術機を起こせない。

「機体が動くなら、お前達の仲間も助けてやれ」

宗像機は完全に瓦礫に埋もれていた。風間機に続いて、宗像機の瓦礫も手際よく退かしていく。風間機も慌ててそれを手伝う。伊隅は機体から降りて速瀬の容態を確認する。

一通りの救出活動が済んだ所に基地から飛んできたヘリが到着した。ヘリからは白衣を着た妙齢の女性が降りてきた。かなり胸の大きい女性だ。服越してもその存在が良く分かる。顔もかなり美人だ。（まさか、アレが“副指令”なのか？）

そんな疑問が一瞬浮んだが、それはすぐに霧散した。画面越しでも分かる、彼女の内に潜んでいる“何か”を感じ取ってしまったから。

《待たせたわね、私が国連軍横浜基地を預かる副指令『香月夕呼』よ》

「カラードランクNo31だ。聡明な副司令官殿で助かった。話し合いに応じてくれた事に感謝する」

《ここじゃ落ち着いて話す事も出来ないでしょう、基地のハンガーに案内するわ。勿論、そちらに危害を加えるつもりはない》

これを畏とるか……。

「——先に言っておく。こちらは武装解除しない」

《構わないわ。その代わり通信機越しでは無く、ちゃんと話し合いにに応じてくれれば……》

通信機・画面越しに繰り広げられる腹の探りあい。

「——いいだろ」

彼は踏み込む事にした。嘗て人類を滅ぼさんとした恐怖の象徴があつた横浜の地へ……。

横浜基地へ踏み込んだすぐに持っていたのは、武装した先程の機体と同系統の大型機動兵器の大群だった。

（熱烈大歓迎……と言つわけではないか）

攻撃こそ仕掛けてこないが、明らかな敵意が機体制御の節々に表れている。

（やれやれ……この程度でこの俺が殺^やれると本気で思っているのか？》

寧ろ、こんな狭い空間にここまで密集してくれば、AAの一撃で過半数は殲滅できる。そんな無駄な事をする馬鹿ではないが……。夕呼の指示に従い、メインゲートから横浜基地の地下に入る。さらに正面にあるAゲートに進む。

「……………」

彼はAゲートの下に広がる光景を見て言葉を失った。底が見えないほど深い縦穴。話によると、その深度は1200mにも達するらしい。

（B7を思い出すな……）

あそこも施設が地下にあり、かなりの深度があつた。

ブースターで落下速度を調整しながら、メインシャフトを降下する。目的地はレベル3にある90番格納庫。わざわざそんなところを指定したのは、あの副指令だ。地下にある90番格納庫が一番秘匿性が高く、関係者以外立ち入りできないから、安全……らしいが。

（ふん、まるで地獄に落ちているみたいだ）

罾である可能性は大きい。だが、情報を得なければ、動くに動けない。結局のところ、ここで引き返すという選択はないと言った。

メインシャフトのレベル3、90番格納庫まで降下完了。隔壁が低い唸り声を上げながら、開放される。

《そのまま進んで頂戴》

夕呼の声だ。どうやら、先回りしていたらしい。格納庫のど真ん中突っ立っている。その横には黒っぽい服を着た小柄な少女が立っている。

（子供…？ 何で…）

彼女の子供……かと一瞬思ったが、それにしても歳がかみ合わない。

「一対一での話し合いじゃないのか？」

《あ、社のことね。あなたはこんなか弱そうな女の子が危害を加えると思うわけ？》

「ようはその子を同席させろって事か」

《ええ、そういうこと》

「——分かった。だが、あくまで話し合いに応じるのは香月夕呼。お前だ、その子じゃない」

《はいはい、分かったから、さっさと降りてきて頂戴》

夕呼に促され、ヴィクターの肩膝を地面に付かす。各駆動部を固定、AMSのリンクを切断する。

「…！ッ」

脳に直接傷みが走る。AMSを使用するときはいつもこうだ。ネクストに乗ってかなり経つが未だに慣れない。痛みが落ち着いたところで、ヴィクターの首付け根をスライドさせコックピットを解放する。彼は上に開いた出入り口から外に這い出た。

「初めましてかしら？」

「ああ、そうだな。香月副司令官殿」

「回りくどいやり取りは嫌いだわ」

「同感だな」

彼はヴィクターの肩から飛び降りた。5〜6 mはある高さから飛び降りたら、常人なら骨折だけではすまない。だが、彼は全く体制を崩さないで地上に降りて見せた。彼の身体能力の高さを見せ付けられた夕呼だが、特に動じもしなかった。隣の少女も同様だ。顔色一つ変えない。

「改めて例を言おう。交渉同意に感謝する、香月副司令」

「別にこちらにも色々事情があつての同意よ。そういえば、あなたの名前を聞いていないわ」

「——リンクスか……レイヴンとも呼べ」

「——分かったわ……さて自己紹介も済んだところで幾つか質問したい事があるのだけど……」

「それはこつちもだが……レディファーストだ、先にどうぞ」

「ありがとう。じゃあ早速」

夕呼の顔が引き締まる。

「何故、あんな場所にいたの？」

「分かん」

「分からない？」

「ああ、俺は気を失う直前まで衛星軌道掃射砲エーレンベルグの近くにいたはずなんだが、意識を取り戻したら、何故かお前らの基地の近くにいた」
夕呼は隣の少女に目を移す。彼女は首を横に振った。

「そのエーレンベルグって何？」

「はっ？ 衛星軌道掃射砲に決まっているだろ」

「ちょ、ちよつと待て！ 衛星軌道掃射砲って一体何よ!？」

どうやら、掃射砲について全く知らないようだ。

（おかしい……クレイドルにすらその存在がばれていた筈なのに、何故地上の者が知らないんだ？）

「——別に説明してもいいが、今する事ではないだろう？」

「……いいわ。続けましょう」

「そうしてくれ」

「じゃあ次、あなたが言うカラードランクって一体何？」

「……お前、無知だな」

「な……私が無知ですって！」

「そうヒステリックになるな。カラードランクはリンクスを管理する共同管理組織『カラード』内で

ランク……格付けの事だ」

夕呼の顔に疑問が浮ぶ。

「リンクスって？」

「ネクストのパイロットの別名だ。まあ、企業に雇われる傭兵みたいな存在だと思ってくれていい。因みにレイヴンも傭兵の意を指す言葉だ」

「……」

「申し質問はないのか？」

「……あの機動兵器は？」

「俺の専用ネクスト、スカイ・ヴィクター空の覇者だ」

「ネクストって？」

「ACネクスト——アーマードコア・ネクストの事だ。まさか、その事まで知らないとはな……」

「あんな兵器、私は見た事がないわよ」

夕呼の顔を見るが、嘘を付いている様子はない。

「——まあ、いい。次は俺からだ」

この様子だとORCA旅団も企業陣営についても知らない可能性がある。

「ORCA旅団は知っているか？」

夕呼は首を横に振る。

「GA、BFF、有澤重工、レイナード、オーメル・サイエンス・テクノロジー、ローゼンタール、アルゼブラ、インテリオル・ユニオン……これらの企業は知っているな？」

「——いえ、どれも聞いた事がないわ」

「ちょっと待て、ここは日本“だった”はずだ。有澤重工は日系企業だ。知らないはずはないだろう？」

「知らないわよ、そんな企業は。今日本にある大手は河崎重工、富嶽重工、光菱重工よ」

「お前こそ、何を言っているんだ。そんな企業はなかった。それに日本と言う国家もすでに存在しない」

「あなたこそ、何を言っているの？ 日本は今もあるわ。ここに」
「……………」

何かがおかしい。

全く会話がかみ合わない。

情報を交換しようにも相手が全くこちらの事を知らない。さつきは「何故、国連軍が残っている？ 数十年以上昔に解体されたはずだ」など訳の分からないことを言っている。

社のリーディング能力で一応嘘を付いているかどうか調べさせているが、結果は白。つまり、このわけの分からない話は全て真実と言う事。彼にとっては…………。

（まさか…………ね）

この不可解な事象を解決できる一つの仮説が夕呼の脳裏に浮んだ。だが、それを裏付けるには情報が足りない。決定的な何かがなければ…………。

「——BETA」

「ベータ？」

「Beings of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of human race」

「……………」

「『人類に敵対的な地球外起源種』…………この“世界”にはBETAがいるわ」

「……………何が言いたい？」

「あなたは“私達のいる世界”ではなく、“別の世界”から渡ってきた可能性があるわ」

「——そんな事が」

「そうね。この仮説を考えた私自身、おかしいのかも知れないわでも、この仮説が正しければ、この食い違いにも説明がつく」

確かに夕呼の行っている事は無茶苦茶。気が狂ったので？………と思っただ方が納得がいく。だが、同時に彼女の言っている事が真実であるなら、この食い違いに説明が付いてしまうのも事実。

「——詳しく教えてくれ、あんたの言う“こちらの世界”とやらを……な」

彼は顔を上げ、そう頼んだ。夕呼は基地内にある自分の研究室兼執務室に案内した。

「汚い部屋だな」

「五月蠅いわね、あなたに関係ないでしょう」

「女なら、もう少し整理整頓を心がけた方がいいんじゃないか？」

あの子の教育によくない」

「それこそ、あなたの関係のないことでしょ」

彼はソファに腰を下ろした。夕呼はデスクから幾つかの資料を取り出し、社は壁のスクリーンの準備をする。

「社。部屋の電気を落として」

「はい」

部屋の電気が落ちると同時にプロジェクターが動き出す。

「今から半世紀近く前、1958年、アメリカの火星探査衛星ヴァイキング1号が送った最初で最後の画像データよ」

「1958年……その頃はまだ宇宙開発が始まった頃だ。火星に探査衛星が送り込まれたのはもっと時代をくだってからだ」

「科学技術の面でもかなり差異があるみたいね。続けるわよ」

スクリーンに一枚の写真が投影される。

「これがその写真よ」

「——左側が探査船の一部だな。で、右側が……」

「ええ、これが始めてBETAを捉えた写真よ。もっともこの頃はまだ単に“火星起源の生命体”としか思われていなかったけど……」

「以降、かなりの探査衛星が火星に送り込まれたけど、全て着陸後、また着陸前に消息を絶った」

次の写真に変わる。

そこには彼の想像を超える異形の生物が写っていた。

「1967年、サクロボスコ事件……月面で調査活動中だった調査チームが火星起源と思われる生命体と同じ存在と遭遇。通信後、調査チームは消息を絶った。何が起きたかはこれを見れば、分かるでしょう？」

「ああ……」

「サクロボスコ事件直後、月面基地プラトール1を含めた各所で火星生命体の戦闘が勃発。これを受けて、火星起源の生命体は正式にBETAと命名され、月面でのBETAとの戦争……『第1次月面戦争』が始まる」

「月面で？」

「ええ、当時、月面でのBETA戦はとにかく酷いものだったそうよ。訓練も武装も不十分の兵士が大量に月面に送り込まれたけど、結果は燦燦たるもの」

「奴らは宇宙空間でも問題なく活動できるのか？」

「ええ、地上でも宇宙でもBETAは問題なく活動できるわ。対して人間は宇宙服無しに活動は出来ない。1970年には機械化歩兵……パワードスーツが投入されたけど、それも焼け石に水だったわ。ま、それがあつたからこそ、瓦解しかけた戦線も3年維持する事ができたんでしょうけど」

「……悪い、続けてくれ」

「月面戦争は1973年に終結した。何故だと思う？」

「——BETAが地球に来たからか？」

「正解。1973年、BETAを満載した降下ユニットが旧ウイグル自治区“カシュガル”に落下。これがBETAの地球侵攻の始まりよ」

「BETAの地球侵攻を受けて、国連は月面のプラトール1の放棄、そして月からの全軍撤退を決断」

「撤退できたのか？」

「何とかね。脱出した月面総軍司令官がこんな言葉を残しているわ……『月は地獄だ』と」

「……………」

「話を地球に戻すわよ。当時、中国政府は各国の援護や国連軍の受け入れを拒否。自国内の問題としてこれに対処しようとした」

「一国で、どこまでできる問題じゃないだろう？」

「ええ、でも当時は冷戦で東西陣営の馬鹿馬鹿しい駆け引きも多かったのよ。BETAに由来する新発見も魅力的でね、中国政府はそれを独占しようとしたわけ。この頃は、人類にもまだその余裕があったし」

「で、結果は？」

「最初は面白いぐらい上手くいったわ。多大な犠牲を払った月面戦争の時と違って、地球での戦争は長年培ってきた兵器・戦略が自由に使えたから。当初BETAに航空・対空戦力が存在しなかったのも効いて、中国軍の航空作戦は一方的なまでに効果を出したわ」

「“上手くいった”という事は途中から流れが変わったってことか」
「——カシュガル開戦より2週間。落下地点の数km手前まで進軍したけど、そこでBETAの新種が現れた事で戦局は一変」

スクリーンに二枚の写真が映し出される。そこには、異様にデカイ目玉を持つ異形の生物……BETAが映っていた。

「^{レーザー}光線属種。驚異的な射程距離と命中精度を持ったこの新種によって、航空戦力だけではなく、ミサイルやロケット弾……砲弾すら全て撃ち落とされた」

「砲弾も？」

「ええ、それだけでなく、高高度爆撃も音速攻撃も全て撃ち落とされたわ。その結果、中国軍の航空戦力は全滅。地上軍だけで物量攻めをするBETAを止める事はできず、戦線も完全に瓦解したわ」
「中国の要請を受けたソ連の援軍も圧倒的な物量の前に壊滅したわ。両国は戦術核を用いた焦土作戦を実行、BETAの侵攻を僅かに遅らせるだけで殲滅できず、以後撤退を続ける」

「翌年、1974年。カナダのサスカチュワン州アサバス力に第二降下ユニットが落下。中国での失敗を踏まえて、落下直後の戦略核の集中運用で降下ユニットを機能停止に追い込んだ。その引き換えに、カナダの半分の土地が放射性物資が汚染されたけど……」

「中国の戦線はどうなったんだ？」

「まずBETAはユーラシア大陸の西側を勢力化に置いたわ。この侵攻理由はよく分かっているけど、地形的に侵攻しやすかった……
……というのが定説ね」

「奴らの行動心理は分かっているのか？」

「分かっているのはBETAが炭素系の知的生命体である事と……
人類を食らうことだけよ」

「闘争本能だけってか？」

「それもあるか怪しいところだけどね」

「で、現状は？」

「BETAの地球侵攻から30年弱。ユーラシア大陸はほぼ完全にBETAの勢力化にあるわ。日本の近くだと佐渡島とか朝鮮半島も勢力化ね。ハイヴもあるし」

「ハイヴ？ BETAの巣か？」

「ええ、この横浜基地も元々ハイヴがあった場所なのよ。一年ほど前、取り戻したばかり」

「物騒な事に基地を作ったんだな。俺なら遠慮するぜ」

「でも、これだけよ」

「何が？」

「人類がハイヴを排除できたのは、この横浜だけ……」

30年戦い続けて、取り戻せたのはこの土地だけ……。断片的にしか聞いていないが、BETAとの戦いの過酷さをこの身で感じる事が出来た。

「どう？ これでも私の言った事がおかしいと言えるかしら？」

「———どうやら、マジみたいだな」

深い溜め息が漏れる。自分自身の想像を遥かに凌駕する事実が多すぎて少し思考が追いつかない。

「あなたの世界はどうなの？」

「———まず、BETAは存在しない」

「そう、羨ましいわね」

「どうかな、俺の世界は汚染された地上に見切りをつけ、空で暮しているからな」

「地上で暮らしていないの？」

「ああ、『クレイドル』と呼ばれる空中プラットホームが俺の世界の新たな大地だった。今は全てのものが地上に戻ったがな」

「想像できないわね……」

「良かったら、ヴィクターのライブラリーを見せてやろうか？」

「そうさせてもらうわ、それよりも今いった汚染って一体何の事？」

「全ての始まりは、今から30年以上前に発見された新物質——『

コジマ粒子』。そして、ネクストを含めたコジマ兵器だ」

「コジマ粒子？」

「コジマ粒子とその技術はアクアビットとオーメル・サイエンス・テクノロジーの二社によって軍事技術に応用される。その過程でネクスト……“アーマーコア・ネクスト”は誕生した」

「あなたの機体ね」

「ああ、そしてネクストを開発した企業連は、統治能力を失った国家に見切りをつけ、新たな構築するため、全ての国家に対して宣戦布告。企業連の一方的な奇襲攻撃によって戦争が始まった。後に『国家解体戦争』と呼ばれるこの戦争は、30機にも満たないネクス

トによって始まった。そして開戦から約一ヶ月。たった30機のネクストによって全国家戦力は撃破され、企業側の圧倒的な勝利で戦争は終結した」

「…………… たった一ヶ月で？」

「複数の新技術を惜しげもなく投入したネクストは基になったACとは比べ物にならない性能を手にした。コジマ技術によって生み出されたPA、AA、OB。そして人間と機械をリンクさせるAMS」

ブライマルアラサルトアーオーバーブースト

アレコリーマニユビレイトシステム

「人間と機械をつー！？」

「搭乗者の脊髄や延髄を経て脳神経系の電気信号を直接統合制御体に送る次世代型の機体制御システムだ。ネクストはこの制御システムにより、通常では考えられない超高機動を実現している。そしてAMS適正を持ち、ネクストに操る者を“リンクス”と呼ぶのここに由来する」

「……………」

「だが、このAMSは万人に扱えるものではない。ネクストを動かすためには高いAMS適正が必要であり、このAMS適正は先天性、しかも非常に持っている者は少ない。企業連が30機だけで戦争を起こしたのもリンクスの数が限られた事が原因だ。そして、過度のリンクは精神と肉体に多大な負担を強いる。適正の低い者はそのせいで精神汚染を受け、廃人になる事もある。さらに……………」

「まだあるの？」

「コジマ粒子についても決して良い所ばかりではない。コジマ粒子はもともと自然環境に多大な悪影響を与える汚染物資。過度に浴びれば、寿命を縮める事になる」

「ちょっと待ちなさいっ！　なら、私も汚染されたって事！？」

「安心しろ、戦闘中もここに来る時もPAを切っていたから、汚染といっても大したレベルじゃない。人体や植生に影響が出る事は無い。それにコジマ粒子は比較的比重の重い粒子だ。空气中を長時間漂うこともない」

「本当でしょーうね？」

「元々、この世界はコジマ汚染がない。安心して大丈夫だ。今のところは……な」

「——とりあえず、あなたの乗る兵器が、こちらの世界の兵器とは比べものにならないほど強い事だけは分かったわ」

「そうだな、俺に喧嘩を売ってきた…… A - 01部隊だったか。あの部隊が使っていた機体の性能は、ネクストの基になったACよりも低かったからな。よほどこの世界の兵器技術は低いと見える」

「……」

「……」

会話が途切れる。暫くして夕呼が顔を上げた。

「あなた、私に“雇われない”？」

Episode 2 (後書き)

ご意見・ご感想がありましたら、ぜひお願いします。

Episode 3

「俺を……“雇う”だと？」

彼は驚いた顔を隠す事ができなかった。

「あなた、傭兵なんでしょ？」

「まあ、そうだな」

「さっきも言った通り、この世界は常にBETAとの戦いがあるのよ。あなたの実力とネクストの戦力があれば、即戦力としては十分」
「さらにアンタは、オーバーテクノロジーに等しいこちらの世界の情報が手に入る、か」

「あら、分かっているじゃない」

夕呼は含みのある妖艶な笑みを浮かべる。腹の底が知れない――先程まで人知の越えたような話をしていたのに、今は自身の利益のために交渉を行っている。

（性質が悪いタイプだな。目的のためには手段を選ばない奴の典型だ――だが、その代わりに）

——信用できる。

「俺を雇うとして、アンタは一体何を俺に提供する？ 言っとくが、“今回”は金だけじゃ動かないぞ」

「あなたの要求は可能な限り聞いわ。最も私の権限で実現できる事は限られるけど……」

つまり、契約後、こちらの要求が通る保証はないということ。随分と分の悪い契約だ。

「そうね、まずはあなたの国籍情報と国連軍内での地位を用意するわ。階級は……少佐クラスなら文句はないでしょ」

少佐……軍で言えば、大隊やそれ以上の大部隊を統括する将校と同クラスと言う事になる。確かに上下関係が明確な軍内なら、十分すぎる権力が手に入るだろう。

「後は、あなたの機体と身柄の安全は“可能な限り”保証するわ。」

私はこの基地の副指令だし、日本政府にも顔が利くから、“ある程度”は安心してくれて構わないわ」

「“いつもの俺”なら、絶対に乗らない依頼だな」

「いつも……ね、なら今はどうなのかしら？」

「……………」

腹の探りあい……二人は目も逸らさず睨みあう。

「——まだ、何かあるな？」

「……………」

彼の眼が魔女の腹の中を探る。

「アンタは俺に喋っていない、喋れないネタを持っているな？」

「何を根拠に……………」

「この基地、元々はBETAの巣だったらしいな」

「……………」

「この基地に入ってから、どうも各計器類やレーダーが“変なモノ”を捕らえてばかりなんだよ——」

靴先が床をコツコツと叩く。

「——この下でな」

「……ッ！」

夕呼の表情が僅かに歪んだ。

「最初から変だと思っていたんだよ。なぜ、“副指令”のアンタがわざわざ交渉に出てくるのかなってな。俺はこの基地の司令官と話をしたと要求した。そして出てきたのはアンタだ。直接交渉のリスクを考えて、代わりに出てきたのかとも思ったが、それにしては不審な点が多すぎる。まず、アンタの格好と雰囲気……………お前からは“戦い”の匂いがしない。そして、物事の着眼点、喋り方は司令官というよりは研究者のそのようだ」

「……………」

「次に気になったのは、わざわざ基地の腹の中を交渉の場にした事だ。普通はこんな真似はしない。俺の戦闘能力高さは既に分かっているのに、基地の招き入れるなんて只の自殺行為だからな。そんな

リスクを背負ってでもここに招き入れたのはリスクよりも実益が大きいと踏んだから——違うか？」

「……………」

「まだある。副指令のアンタが何故この大型格納庫を自由に扱えるかだ。アンタの口振りを思い返してみれば、ここはアンタの私物に近いものように聞こえた。幾ら基地副司令官とはいえ、出来る事とできない事がある」

「だが、それでも疑問は残る。ただ“それだけの理由”なのか——違う。アンタは計算高い女だ。その程度の理由で動くはずがない。そこで下の反応さ」

「ハイヴ——BETAの巢の跡にこの基地は造られた。副指令のアンタが司令官と同じ、もしくはそれ以上の権限を持っている。そしてアンタは軍人ではない——」

「——オルタネイティヴ4」

「ッ!？」

今度こそ、夕呼の顔に確かな動揺が走った。

「……………博士、落ち着いてください」

今の今まで黙っていた少女が口を開く。

(コイツ……………)

今までの行動を思い返しても、彼女が何故ここにいるのかその理由が読めなかった。だが、今彼女は彼の仕掛けた“罠”に気づいた。単に勘がいいのか、それとも……………。

「鎌掛けです。この人は“何も知りません”」

「よく分かった。君は将来いい公証人になるかもな」

彼女の頭にあるウサミミのような突起物がピクピクと反応するよう動く。

「鎌掛けですって……………」

「ああ、そうだ。殆ど俺の予想だ。あと、最後にいったオルタネイティヴ4は……………」

スーと伸びた指が刺す方向には少女の肩があった。

「そこに書いてある事を読み上げただけだ」

そこには、英語で確かに“Alternative 4”と書かれていた。夕呼は自分の迂闊さを呪った。

「オルタネイティヴ……代替品、いや代案か。どうやら、アンタはとんでもない事をやっているようだな、全く美人の癖に魔女ような奴だ」

「——綺麗なものには毒があるものよ」

それは間違いなく肯定の意が含まれた言葉だった。

「思っていた以上に頭が回るのね、あなた」

「傭兵はどんな依頼やクライアントでもを請けるわけじゃないって事さ。アンタ同様自分の損得で動く」

「そうみたいね」

「——で、どうするんだ？」

「勿論、雇うわ」

「情報の開示と身柄の安全、それと金、それが条件だ」

「OKよ。あなたの要求を呑むわ」

「よし、交渉成立だ。後で契約書にサインして貰うからな」

彼は右手を差し出した。

「改めて宜しく頼む、香月夕呼」

「こちらこそ——リンクス」

夕呼は簡単な契約書をサインし、彼らは正式に契約を結んだ。その時夕呼余りの契約料に一瞬めまいを覚えてしまったが……。

「まずはあなたの国籍データと階級を用意しないと」

「頼む、だが下手な真似はしないでくれよ。ま、アンタが自分の首を絞めるような真似をするとも思えないが」

「当然よ」

夕呼がPCを操作する。

「国連軍所属……階級はどうする？」

「副指令殿にお任せする」

「あなたに副指令なんて呼ばれると、なめられているように感じるわ……」

「なら、名前呼びにでもするか？ “夕呼”」

「ええ、その方がいいわ——でリンクスさん、階級は“少佐”でいいかしら？」

「将校になめられない階級ならそれでいい」

「じゃあ、決まりね。次にあなたのフルネームを教えて」

「……」

「フルネームよ。さつきは適当にはぐらかしたんでしょうけど、いい加減白状してくれないかしら？」

「…… 適当に決めてくれ、夕呼」

「……？」

夕呼はなぜ彼がそんなことを言うのか分からない。

「…… 生まれてこのかた、戦場で生きてきたからな。名前なんてない」

「……でも、本当に名前はないの？」

「こちら側に来る前は——『リユー』と呼ばれていた。セレンに……世話になった奴が勝手に付けた呼び名だな。一応、向こうではそれで名乗っていた、さすがに名無しと名乗るわけにもいかなくな」

「ふーん。じゃあ、ファーストネームは『リユー』で決定ね……でもあなた見た見た目日系よね」

「生まれは知らない」

「どうせだから漢字にしましょうか。『リユー』だから……『龍』でいいわね」

「俺の話を聞いていたか？」

「聞いていたわよ。別にかまわないでしょ。次はファミリーネームよ」

「聞けよ、おい……」

「そうね……草薙。それにしましょう」

「おい、俺の話は……」

「草薙・龍。生年月日は……それも知らないのね。じゃあ、切りのいい1月1日でいいでしょう」

「おい……」

「所属は横浜基地。配属は……VFA-01部隊の特別顧問にしましょう」

楽しそうに薄笑いしながらデータ改竄をする夕呼。傍から見てもなり不気味だ。

「……なあ、どうにかしてあの傍若無人魔女を止めてくれないか？」

「——止める気もそれほどないのになぜそんな事を頼むんですか？」

後ろに控えていた少女……社霞は感情のない顔でそう呟いた。

「……」

先ほどと同じだ。彼女は何故か俺の“思考”が読めている。現に今も龍が考えていたことを言い当てている。

「——正確には少し違いますが、大体そうです」

「ッ！なるほど、あの魔女の元にいるからにはそれなりに特異な存在ってことか」

「社に何をしているの？」

データ入力を終えた夕呼が胡散臭そうな顔でこちらを見ている。

「何か誤解しているようだから言うておくが、俺にそっち方面の性癖はない」

「本当かしら？」

「本当だ」

「そ……龍、さっそくで悪いんだけど、あなたの能力を測りたいの。用はテストか？」

「ええ、あなたには戦術機のシミュレーションをやってもらわうわ」「了解」

「社はここに残って、“彼女”の話し相手でもしてあげなさい」

「——はい」

社は隣の部屋に入っていた。

「さて、私達も行きましょうか」

夕呼の案内で基地内を歩く。

「それにしても広いな」

「まあね、この基地の地下は大部分がハイヴの構造を利用しているから」

「ハイヴの？ BETAは穴掘りが好きなのか」

「さあ、私には分からないけど、ハイヴは幾つか段階があつて常に地下茎構造は成長し続けるわ。横浜ハイヴはまだフェイズ2だったから地下茎構造はそれ程広くなかったけど、それでも半径2kmまで地下茎構造は広がっていたわ」

「2km……直径で4kmか。要塞なんて目じゃないな」

大要塞でも1km手前に防衛網を張るのが精々だ。余り遠くに防衛網を築いても防衛する範囲が広すぎて十分な効力を発揮できない。まず、費用対効果が悪すぎる。

「ええ、ハイヴに接近するだけでも一苦労。昔はハイヴ内に侵入できた事もあったけど……」

「けど……？」

夕呼が足を止める。振り向いた彼女の顔は微かに悲しそうだった。「突入した戦術機一個師団は連絡のために戻っていた部隊を除いて全滅」

「一個師団……そうそうやられる戦力じゃないはずだが……」

「対人戦ではね。でも圧倒的な物量で攻めてくるBETA相手だとそれじゃ“少な過ぎる”のよ」

再び歩き始める。

「でも……」

少し歩いてから夕呼は再び口を開いた。

「その時のハイヴの構造と敵の構成データは貴重なサンプルとして

今も使われているわ。シミュレーションにもフィードバックされて、今はヴォールク・データと呼ばれている」

「訓練に使われているのか？」

「ええ、ハイヴ突入訓練ができるのは、ヴォールク・データのおかげ——着いたわよ」

夕呼がカードキーでロックを開ける。中にはシミュレータが12機並んでいた。

「中隊クラスで訓練できるな、大した規模だ」

「A-01部隊の訓練に使っているシミュレータルムよ」

「あの部隊か……」

「さて、龍。あなたは“コレ”を着なさい」

「——なんだ、“コレ”は？」

「“強化装備”——そうね、分かりやすく言えば、パイロットスーツ」

夕呼が持っているのは99式衛士強化装備の特殊保護被膜だった。

「——随分とコメントに困るパイロットスーツだな」

「確かに極薄のスキンスーツだけど、プロテクターとか付属のアタッチメント付ければ、ちゃんとしたものになるわよ」

99式衛士強化装備は戦術機の操縦時に着用する優れたパイロットスーツだ。肌に直接密着する保護被膜はバイタルデータの回収や保水効果、電気パルスとスキンの伸縮によって血流の正常化、さらには耐G機能までの機能を集約したマルチスーツだ。

通常はさらにヘッドセットに頸部プロテクター、レスキューパッチ、脚部コネクタプロテクターを身に付けて耐G性能と管制システムのインターフェイスを強化している——

「——と、言うわけなのよ」

「いや、そう言われても……」

一瞬、二人の会話が成り立たなかった。

「さて、時間も惜しいからちやっちゃんと着なさい」

「——この傍若無人魔女が」

「いったい誰の事を言っているのかしら？」

「いや、別に……それよりも聞いてくるって事は少しはその自覚があるって事か？」

「……………」

夕呼の振り上げた脚のヒールが龍の弁慶の泣き所に……入る前に龍はヒョイツと足を引いた。

「あッ!？」

素っ頓狂な声を上げる夕呼。蹴りが避けられたせいで体制を崩す。龍がそれを支える。

「運動音痴だな、夕呼。体はなまらない程度に動かした方がいいぞ」

「……………」

夕呼の顔に赤みが差す。どうやら、恥かしいようだ。夕呼の手が懷に伸びる。

「このッ!」

手にしていたのは小銃。勿論、実弾はフル装填。

「……………」

しかし、銃口の向けられた龍は平然としている。特に慌てた様子もなく、夕呼を立たせてやる。

「恥かしいのは分かるが、人に不要に銃口を向けるな」

「あなたが悪いんでしょう!」

銃口を突き付ける夕呼。

「それともう一つ、銃の扱い方はもう一度勉強し直す方がいいぞ」

「……………何ですよ？」

「——安全装置が掛かりっぱなし」

それだけ言うとな龍はそそくさとシミュレータに引ッ込んだ。

「…………ッ!」

夕呼は暫し、その場で肩を震わしていた。

シミュレータに引ッ込んだ龍は先に夕呼から受け取っていたマニ

ユアル書に目を通していた。

「さて、始めるか……」

一通りの慣性システムは把握した。強化装備を身につけていないので手動でやらなければならないが、そこは名を上げた傭兵。人型機動兵器ならネクストとACで乗りなれている。戦術機を扱える自身はあった。

網膜投影システムによって、外の景色が写しこまれる。ネクストは360度をモニターに囲まれた全天ディスプレイを採用しているが、戦術機の場合はコックピットが狭い。これは管制ユニットをモジュール化しているのが原因なのだが、現在龍が使っている網膜投影システムのおかげもある。このシステムは外部の光学センサーから得られた画像を直接衛士……パイロットの網膜に投影する。これによっては衛士はまるで自分の目で外を見ているような錯覚を覚える。

龍の場合、ディスプレイでの戦闘に慣れていたのでこの感覚に違和感を感じて仕方が無かった。だが、この感覚に慣れれば、より正確に相手との距離感を測る事ができる。これはこれでメリットがある。

（夕呼に頼んで、このシステムを一台貰うか）

そんな事を考えながら、龍は操縦桿スティックとペダルを扱い、戦術機……不知火を操縦する。

「思っていた以上に反応が悪いな……」

機体制御システムの詳しいプログラミングは分からないが、かなり回りくどいシステムのような。AMSの神経接続機体制御と比較するのもどうかと思うが……。

主脚歩行で定足前進、続けて定速前進、主脚を踏む堪えてバックステップを踏む。その瞬間、僅かな機体の硬直が起きた。

（働いたモーションのカウンターか？ 一瞬こっちの動きが効かなくなるな）

機体の関節に過負荷を掛けないためにもカウンターは必要だが、

衛士の手を離れて作用するのは危険だ。限界域での反射的な反応ほど機体への負担は大きい。そして、そういった瞬間ほど硬直の一瞬が衛士の命を分かつ事になる。

（これは改善の余地アリだな。夕呼に意見してみるか）

夕呼が傍若無人魔女だとしても、前線で衛士の命が無用に散っていくのを良しとはしないだろう。

続けて龍は腰のブースターユニット——跳躍ユニットに推進剤を送り込んでアフターバーナーを点火。不知火が一気に加速して上空に上がる。龍の体には加速Gが襲い掛かるが、龍は平然とそれに耐えてみせる。

龍は瞬間速度1000km/hを越すネクストを操るリンクスだ。一般人では到底耐えられない高G下でも正確な機体制御が要求されるリンクスは高い耐G特性を持っている。機体の加速G対策もあるにはあるが、1000km/h以上の瞬間速度による加速Gは想像を絶する負荷を体に掛ける。それに比べれば、この程度の加速G……可愛いものだ。

加速によって変化した重心を考慮しつつ、三次元格闘機動を開始する。

「ん？」

機動が予想よりもずれてしまう。始めて使う跳躍ユニットの推進力と図体のデカイ戦術機の重心移動の見積もりが甘かったようだ。スティックとペダルを捌いて機体をコントロールする。だが、それでも拳動が不自然にずれる。機体を加速させると、さらにズレがひどくなった。

（一体何が原因だ？ 幾ら機体に慣れていないとはいえ……）
機体データを参照しながら原因を探る。

「……………空力特性データ」

龍が目をつけたのは不知火の空力データだった。

「そうか……………不知火はネクストやACと違って空力によって機体制御しているのか」

それで拳動のズレに納得がいった。加速によって機体各所で揚力が発生し、拳動にずれを起こしていたのだ。

「良しッ！」

再び不知火を加速させる。今度は頭部のセンサーマストや腕部のナイフシースを空力を考慮する。拳動が徐々に安定する。

（よし、次は火器を……）

そう考えた瞬間、機体の広域警戒レーダーが複数の熱源を探知。自動的に機体内のデータと照合される。光学センサーもそれらを捉える。

「ッ！ こいつらは……！」

網膜投影によって映し出された“それら”は地球上のどの生物とも一致しない異形の生命体。

「BETAッ！？」

データ照合完了、索敵範囲内に突撃級×10、要撃級×5、戦車級×35。
デストロイヤー グラップラー タンク

「おいおい、いきなり実戦テストとは聞いていないぞ、夕呼さんよ……」

今の今まで平常心を保っていた龍の顔に動揺が走った。

龍が黙々と戦術機の操縦を身に付けようとしていた頃、夕呼はモニタで龍の操縦を見物していた。

「大したものね……」

夕呼は素直に龍の操縦技術の高さを評価した。

龍は始めて扱う戦術機。それも日本が心血を注いで開発した第三世代戦術機——不知火をたった2時間足らずで扱えるように見せた。

「伊隅と戦ったら……負けちゃうかもね」

龍の操縦する不知火はこちらの世界の衛士と遜色ないレベルにまで達している。
そんしよく

（物心付く前から戦場にいたか……彼にとってそれは“良かった事”だったのか、“悪かった事”なのか）

それは彼自身にしか分からない。だが、衛士とは比較にならない
実戦経験の豊富さは凄いとしか言いようがない。

「でも、それはあくまで“対人戦”での話……」

夕呼が…… “この世界”が求めているのは、“BETA”と戦い、勝利できる“存在”だ。

「——ためさせてもらうわよ、リンクス」

龍はBETAと確認したすぐに機体の武装をチェックした。

（あるのは…… 65式近接戦闘短刀×2、87式突撃砲×1、74式近接戦闘長刀×2、92式多目的追加装甲×1か）

武装は、突撃前衛と同じだが、今の龍にはどうでもいいことだ。

ストーム・バングード

（飛び道具が少ないのは気になるが……仕方ない）

この装備でやるしかない。

「彼我戦力は50対1か。この程度の戦力差なら、普段は気にもしないんだがな」

それはネクストに乗っている時の話。今彼が乗っているのは乗りなれていない戦術機。

「全く夕呼の奴、容赦ないな。予告も無しにテストを始めるとは……」

この間も50体のBETAが群れを成して、こちらに向かってく
エンゲージる。会敵まで残り40秒。

「だが、そうだな。対人戦しか経験してない俺の能力はBETAに
対して未知数……ここで白黒ハッキリさせたいんだろ」

会敵まで残り20秒。

「——ふっ」

会敵まで10秒。

「——俺もそう思っていたところさッ!」

BETAと会敵。戦闘開始。

一気に跳躍ユニットを点火、ホライゾンナルフースト水平噴射跳躍。最前列の突撃級に接敵する。

「36mm弾のシャワーだッ！」

右手の87式突撃砲の銃口から砲火が出る。数十発の36mm砲弾が突撃級の装甲殻に命中。だが、その殆どが弾かれるか、装甲に薄くめり込むだけで、装甲殻を貫通できない。

（大した硬度だ。だが……）

跳躍ユニットの推力偏向ノズルで機体をスライドさせる。その横擦れ擦れを突撃級が通過する。その瞬間を狙って龍は36mm砲弾を体の側面に撃ち込んだ。

（はやり、前面だけで側面と後方は防御を考慮していない）

どうやら、この種類は、損害率は考慮しない突貫戦力として運用されているようだ。確かに前面の強固な装甲殻とこの突撃力を持つてすれば、戦術機の面制圧など苦も無く突破するだろう。だが、その分、動きが単調すぎる。何も考えずにただ突っ込んできているだけだ。

冷静に対処すれば、さほど脅威というわけではない。警報、後続の突撃級が7体突撃してくる。

「……………」
デストロイヤー

突撃級の動きを読んで、その射線上から退避、接近後、側面あるいは後方から36mm砲弾を叩き込む。10体の中、4体を排除。

再び、警報。今度は巨大な腕を振り上げる要撃級が等間隔を取りながら突撃してくる。その足下には、赤黒い体した30体の戦車級タンクが群れを成して迫ってきている。

「随分と元気な奴らだ」

龍は冷静に距離を取りながら、突撃砲をフルオートで連射した。狙うのは、要撃級の足下。36mm砲弾の直撃を受けた戦車級の体が粉々に吹き飛ぶ。だが、要撃級の侵攻を止めるほどの効力は無かった。戦車級もかなりの数撃ち漏らした。

「チッ！」

グラップラー 要撃級の前腕衝角が不知火の狙う。龍は冷静にそれを回避、反撃とばかりに120mm砲弾——劣化ウラン貫通芯入り仮帽徹甲榴弾をぶつ放す。だが、その一撃は前腕衝角に阻まれ、グラップラー 要撃級に致命打を与えるまでにはならなかった。衝角は突撃級の前面装甲殻と同等の硬度があるようだ。

続けざまにもう一発120mm砲弾を撃ち込む。今度は胴に命中、体が榴弾の爆発によって中から吹き飛ぶ。後方の警報になる。いつの間にか、グラップラー 要撃級に背後を取られていた。

「ッ！？」

考える前に体が反応する。膝を曲げ、飛び上がる。跳躍ユニットも同時点火。グラップラー 龍は要撃級の頭上をバクテンするような形で、後ろ側に回って見せた。勿論、バクテン中にグラップラー 要撃級を撃破するのも忘れない。

グラップラー 警報が鳴り止まない。デストロイヤー 要撃級は突撃級とは違い、こちらの動きを正確に認識している。さらに、4本脚によって高い旋回性能、デストロイヤー 突撃級にも引けを取らない硬度を有す大型の前腕衝角の攻撃範囲。どれを取ってもかなりの脅威だ。

グラップラー 別の警報、これは機体に何かを取り付いたときのものだ。要撃級 の相手に気が回り、小型種の存在を一瞬とはいえ、失念していた。

「離れるッ！！」

タンク 脚に取り付いた戦車級を片方の足で蹴り飛ばす。小型種は火器を使わなくても対処可能のようだ。

（右脚部の装甲一部破損！？ まさかあの一瞬で！？）

先程取り付かれていた部分の装甲が不自然に欠けていた。
「化け物かこいつらはッ！」

毒付きながらも龍は冷静に機体を上空へ逃がした。その上、敵の攻撃外から36mm砲弾のスコール降らせる。

その時、警報がまた鳴った。

（レーザー照射警報ッ！？）

咄嗟に龍は跳躍ユニットの逆推力装置を使って機体を急降下させた。刹那、機体の上擦れ擦れをレーザーがかすめた。一瞬で機体の耐熱限界に達する。

「光線属種ツ！？」

すぐさま、レーダーを確認するが、レーダーサイト内にレーザー族種は存在しなかった。

「……………」

夕呼の言葉が脳裏をよぎる。

「レーザー光線属種。驚異的な射程距離と命中精度を持ったこの新種によって、航空戦力だけではなく、ミサイルやロケット弾……砲弾すら全て撃ち落とされた」

なるほど、確かにコレだけの命中精度と射程距離、威力……人類が劣勢に追い込まれるのにも納得がいく。

（下手に高度を取った瞬間、レーザーで蜂の巣か……）

これでは三次元での機動がかなり制限されてしまう。

「——ふん、この程度で根を上げたんじゃ、空の覇者スカイ・ヴィクターの名が廃れちゃうな」

既に、不知火の周りにはBETAが群がっている。後方からは方向転換を終えた突撃級デストロイヤーが迫っている。

「——殺やってやるさッ！！」

シミュレーション開始から約3時間。BETAとの戦闘が始まってから約1時間。

「……………」

龍は冷静に周囲の警戒を行っていた。その周りには肉塊に成り果てたBETAの軀むくろが文字通り、山のように転がっている。

孤立無援の荒野でBETAと戦闘を行い、既に1時間。龍が食い殺したBETAの個体数は3桁を越す。

既に左手の92式多目的追加装甲のリアクティヴ・アーマーは全

て使い切り、盾としての役割を失っている。龍は打撃武器として盾を使っていた。だが、それももう限界だろう。

87式突撃砲も既に投棄した。マガジンも全て使い切った以上、持っけていても只の死重量にしかない。今右手に握られているのは74式近接戦闘長刀だ。表面にベツタリと血糊が付いて、切れ味も殆どなくなっているが……。

まともに使える装備は65式近接戦闘短刀×2と74式近接戦闘長刀×1だけだ。補給も無しに戦い続けた結果、不知火の関節部は極度に消耗し、モーションにも影響が出始めている。跳躍ユニットも燃料が殆ど残っていない。節約して騙し騙しやってきたが、こちらこそそろそろ限界だ。

警戒レーダーが新たなBETAを捉える。突撃級だ。数は……ざつと200。

「はあ……まだ出てくるか。いい加減“機体”が限界なんだが」

龍の常人離れた操縦技術のせいで、不知火は通常では考えられないほど消耗しきっていた。戦闘での破損も確かにあるのだが、それは殆ど外部装甲だけ。龍の乱暴な操縦は、この1時間で不知火の内部パーツが耐久限界に達するほど荒いものだった。

警戒レーダーがさらに複数のBETAを補足。中には要塞級もいる。小型種に至っては計測不能だ。

相対距離が500m切る。龍は左手の盾をパージ。左手に残った長刀をマウントする。両腕が同加重のほうがバランスを取りやすい。「行くか」

主脚歩行で突撃級に接敵。回避と同時に長刀で装甲殻のない側面を切り裂く。だが、長刀は途中で止まり、抜けなくなった。龍は冷静に右手のロッキングボルトを解除。右手の長刀をパージした。すぐさま、ナイフシースから短刀を抜き取る。

追撃の突撃級を次々と切り裂いていく。確実に殺せなくても足回りにダメージを与えてやれば、十分無力化できる。

先発の突撃級に続き、要撃級と無数の小型種、そして要塞級が接

近。

残った推進剤で一氣に加速。要撃級の胸を切り裂く。続けて長刀を振り、その首を討ち取る。バックステップで距離をとったところで長刀を横に振る。飛び掛ってきた十数体の小型種が肉片に変わる。だが、そこまでだった。とうとう脚の駆動部が限界をきたして不知火が地に足を着く。

「まずいッ!？」

グラップラー

要撃級の前腕衝角が迫る。

「——まだだッ!！」

左手の長刀を杖代わりに姿勢を立て直す。右肩を犠牲に攻撃を回避。長刀で前腕を引き裂き、胴を一刀両断する。

片足でバランスを取り、さらに横に長刀を振り抜く。が、要撃級の前腕衝角にぶち当たり、刃先がへし折れる。

「ッ!？」

そのまま転倒。そこに群がる大量の戦車級。不知火の複合装甲がまるで焼き菓子のように噛み砕かれていく。

モニターが戦車級で埋め尽くされた瞬間、ディスプレイが画像が六角形の断片となって消えていく。

ディスプレイに『シミュレーション終了』が表示される。

総合キル数が表示される。平均的な衛士の倍以上の撃破数だったが、龍の満足のいく結果ではなかった。機体が動けば、弾薬の補給が来ていれば、まだまだ“戦えた”はずだった。

（だが、仕方ない。俺がどう言っても“撃破”された事に変わりはない）

初陣のパイロットでも老練のパイロットでも撃破されれば、同じこと。

彼女が……夕呼が欲しているのはBETAを駆逐できる存在だ。自分がその存在だと思われなかったら、彼女は容赦なく切り捨てるだろう。自分から得られる全ての利益を取ってから……。

《龍、ご苦労様、降りてきて頂戴》

さて、彼女の理想に達する事ができたのか、否か……。

Episodes (後書き)

ご意見・ご感想がございましたら、ぜひ一言お願いします

Episode 4 (前書き)

土日しかゆつくり書いている暇がない……

Episode 4

シミュレータから出てきた龍を夕呼は複雑そうな顔で出迎えた。

「あなた、本当にBETAと始めて戦ったの？」

「おいおい、ここに来て自論の否定か？」

「——あなた……化け物？」

「真顔でそう言われると、流石の俺も少し傷付くんだが……」

「『死の八分』を余裕で越えて、アレだけのキルレコードをたたき出せば、誰だってそう思うわよ」

小型種だけで軽く500以上。デストロイヤー グラップラー突撃級や要撃級等の大型種でも100体以上。完全に仕留めてはしていないとはいえ、フォート要塞級も数体無力化。レーザー光線属種も相当数撃破。所見の機体でこのレコードは確かに異様だ。

龍本人からしたら、まだまだ物足りないようだが……。

「ん？ 『死の八分』？」

「BETAと始めて戦う……初陣の衛士の平均生存時間よ」

「そんなものだろう。実戦の厳しさってものは……」

龍も世界でも初陣の生存率は低い。特に相手がネクストやAFなら、その生存率は限りなく“0”に近づく。アームズ・フォート

「それにあなた、隻眼なんでしょ？ 余計性質が悪いわよたち」

龍は右目に黒々とした無骨な眼帯をしている。夕呼はそれを見て、龍が“隻眼”なのだと思っていた。

「ああ、このことか？ 悪いが、両目ともちゃんとここに収まっている。眼帯をつけているのは……余計な面倒を起こさないためだ」

「面倒？」

「——普段は絶対見せないことにしているんだが……ま、今日は特別だ」

龍は頭の後ろで結んでいる眼帯の紐を解くと、ゆっくりと閉じて

いた右目を開いた。夕呼が一瞬息を呑む。

「こういうことさ……」

龍の右目は赤と白と黒が入り混じったような常人ではありえない瞳をしていた。

「向こうの医者に見てもらったが、どうやらこの目の色はコジマ汚染による遺伝子異常が引き起こした色素細胞の異常が原因らしい。

先天性だから治りようがないし、工作上、相手に不信感を抱かせるわけにも行かないから、普段はこうやって眼帯で隠しているが……」

再び眼帯を付ける。

「夕呼の場合はビジネス以上の付き合いになるだろうからな。特別だ」

「そう……」

二人の間に気まずい空気が流れる。

そこに、国連軍の制服を持った霞が現れた。

「あ、社。ご苦労様」

「——いえ」

持って来た制服を龍に渡す。

「国連軍の制服よ。サイズは大丈夫かしら？」

「——ああ、ちょうどいいサイズだ」

「社、彼を部屋に案内してあげて。私は格納庫のネクストの前にいるからさっさと来るのよ」

「——はい」

夕呼はそそくさとシミュレータ室から出て行った。忙しい奴だ。

「さて、俺たちも行こうか？」

「……」

返事が返ってこない。始めてあってからずっと思っていたが、どうやら彼女は無口な性質らしい。

霞のウサ耳がピクピクツと反応する。

「あつ……」

彼女は思考が読めるんだった。当人が言うには少し違うらしいが、

ある程度は相手が思っているのを読み取れるのは確かだ。

「……………」

彼女はまったくこちらと目を合わせない。龍は彼女の頭に手を置いた。

「ッ!？」

ピクピクッ!!

耳が激しく反応。

「話すときはちゃんと相手の目を見るものだ。君からしたら、ばかげていることかもしれないが、それが人との付き合い方だ」

「……………」

霞はゆっくりと龍に向き直った。

「……………」

感情の见えない瞳は何処までも無機質で心を感じさせない。

(まるで鏡を見ているみたいだな……………)

龍は自分の昔の姿を思い出した。戦場でたった一人で生きてきた頃の自分を……………。

龍が生まれた頃には、既にコジマ汚染があり、それはリンクス戦争の時、全ての地上に広がってしまった。多くの人が汚染された世界に見切りをつけ、揺り籠クレイドルに逃げ込む中、龍は地上に残った。汚染されつくされ、経済戦争のためだけの場所となった地上に。カスタムしたACに乗り、レイヴンの一人として毎日のように戦っていた。時には身一つで“誰か”をこの手にかけた。そうやって生きてきた。彼女の瞳はその頃の——セレンと出会う前の自分と似ていた。孤独感に苛まれ、自分が何のために生きているのか分からなかったあの頃の自分と……………。

霞には似合わない瞳だ。“この世界”の実情は断片的にしか分からないが、こんな子供が自分と同じような瞳をしているのは……………許せなかった。

(この世界の“現実”か……………)

龍は霞の頭を撫でてやった。霞は黙って撫でられてやった。ウサ

耳がユラユラと動く。

頭から手をどける。それもよく見ないと分からないほど小さな変化だが、霞はさっきよりも少しだけ柔らかい表情になっていた。

「俺は……龍。草薙・龍だったかな？ ま、これからここで世話になる」

「社……霞です」

「霞か……かすみいい名前だな」

「はい……」

「これからよろしく頼む、霞」

「宜しくです……草薙さん」

「名前がいい。草薙って呼ばれるとどうも自分のことのように思えなくてな」

「はい……龍……さん」

「OKだ。宜しくな、霞」

「宜しく願います……龍さん」

龍が差し出した手を霞はおそろるそる握る。彼女の手はとても小さく、細かった。

己の力がどこまでBETAに通用するか分からない、この世界のこととは断片的にしか理解していない、自分の考えている事は只の理想論だということも分かっている、だが……。

彼女の小さな手をしっかりと握る。

光のない彼女の瞳に……“希望の光”をみせてやりたい。龍は柄にもなくそう思った。

「あら、意外と似合っているじゃない」

「褒めても何もでないぞ」

格納庫にやって来た龍と霞を夕呼は出迎えた。

「さて、さっそく始めましょうか」

「言っとくが、提供できるのは情報だけだ。機体を解体しようなん

て思っなよ?」

「分かっているわよ」

(……本当に分かっているのか?)

なんだか楽しそうな夕呼を見てると不安になってきた。

「まず、“向こう”の兵器データを見せて頂戴。可能ならコピーも」
「分かった。ちょっと待ってろ」

龍はネクストの突起物を足がかりに首の付け根まで上った。コンソールを操作してコックピットを開放。中に入ったら、メイン電源をオン。右腕のロックを解除する。

「今から右腕を動かす。手の平に乗れ」

夕呼と霞が乗ったのを確認すると、ゆっくりと腕を動かし、左肩の近くまで腕を引き上げた。

「不便ね。もう少し乗り降りの事を考えたら?」

「贅沢だな」

二人を機体の肩に引き上げ、コックピットの中へ案内する。

「全天がモニターになっているの?」

「ああ。外部の光学センサーの画像データを統合・処理した画像をモニターする」

座席に座った龍の首筋に、金属とチューブがくっ付いたような突起物が吸い付く。AMS神経接続開始。

「……くっ!」

首筋に痛みが走る。

「ちよつと大丈夫!」

「AMSの神経接続だ。安心しろ。接続時に痛みが走るだけだ」

AMS神経接続クリア。統合機体制御システムとの接続問題なし。機体のライブラリーを開く。戦闘・機体データの全てを外部記憶装置にコピー開始。

「マッスル・トーン・ワード・コアまずはMTとACのデータをいくつか出そう。戦術機への転用もしやすいだろうし」

カタログスペック幾つか画像データと目録仕様を表示する。

「MTは……そうだな、低コストの拠点防衛用兵器といったところか。機動力はないが、搭載火器でいえば、ACと同等——機体によれば、それ以上の火力を有している機体もある」

「ダメね。BETA戦では機動力がない機体なんて瞬殺よ」

「そうだな。だが、拠点防衛……という仕様なら、現兵器よりはBETA戦に有利かもしれないぞ」

「……そうかもね」

「次はACだ。MTを改良した機体だが、ブースターを使用したホバリング飛行なら200〜400km/hは出るし、主脚^{ラン}歩行でも100km/hは出せる。OB^{オーバーブースト}機構を搭載した機体なら、800km/hまで出せる」

「機動力で言うなら、第三世代戦術機と同じくらいね」

「戦術機のブースター——跳躍^{ジャンプ}ユニットだったか。あれはロケットエンジンとターボエンジンのハイブリットエンジンだろ？ ACの動力は燃料電池と水素タービンエンジンだからエネルギー効率が全然違う」

「水素タービンエンジンっ!？」

「その名の通り、ロケット燃料やジェット燃料ではなく、水素を燃料に駆動するターボエンジンだ。その出力荷重比はロケット^{パワーウエイトレシオ}エンジンの比じゃないぞ」

「……」

夕呼は絶句している。

「驚いて声も出ないか？」

「……声ぐらい出るわよ」

何とか搾り出した一言だった。

「でも、いったいどうやって燃料の水素を機体内に搭載しているのよ？」

「簡単だ、中に入っているだけだ」

龍は機体を指差した。

「ん？ どういうことなの？」

「超高密度水素吸着合金——“この世界”にもあるだろう、水素貯蔵合金。ACやネクストの装甲にはそれが使用されている」

「あるにはあるけど……実戦で使えるほどの性能はないわ」

「だが、“俺の世界”なら、水素貯蔵合金が実用化されている。そして有り余る水素燃料は燃料電池にも利用されている」

「その技術を丸々戦術機に転用できるかしら？」

「恐らく出来るだろう。だが、問題は実戦にも耐えられる強度と水素貯蔵能力を再現できるかだ。しかも大量に生産するには、専用の生産ラインも必要になる。はっきり言って一朝一夕で出来る品物じゃない。水素タービンエンジンについてもそうだ。発生するエネルギーに耐えられるだけの合金を精錬できる設備が“この世界”にあるとは思えないんだが……」

「精錬方法は分かる？」

「ちよつと待て」

ライブラリーの中から要望の情報を取り出す。

「流石に詳しい情報はない。手持ちはこれだけだ」

「十分よ。後、サンプルも欲しいわ。後で装甲を外させてもらうから」

「壊すなよ？」

「大丈夫よ」

「——お前の口から出る“大丈夫”には根拠がないんだよ」

「何か言ったかしら？」

「いや、なんでもない」

真横で夕呼が睨んでくるが、目を合わせないようにする。聞こえないように言っただけだが、どうやら聞こえてしまったようだ。魔女の耳は地獄耳だ。

「——博士の耳は地獄耳だそうです」

「へえ、そう……」

後からさつきが近づいてくる。

「——霞、何で言った？」

「——気分です」

そうやら、自分は霞の気まぐれでこんな自体に追い込まれているようだ。何とか、気を逸らさなければ、命が危ない。

「夕呼、“向こうの世界”の兵器について興味はあるか？」

「兵器？」

「ヴィクターに搭載されている兵器もそうだが、向こうには、実弾以外に光学兵器とビーム兵器が存在する」

「……」

夕呼が固まる。

「霞……」

「——少し思考が固まっています。驚いているようです」

「ま、同然だろう。人類を劣勢に追い込んだ交戦属種と同じものを持っているんだからな」

1分は待ったか、やっと夕呼が落ち着いたところで説明が再開する。

「向こうの現兵器には、パルスレーザー機関砲、レーザーキャノン、プラズマ砲、レーザーブレード等……ACやネクストに搭載できる火器ならこれらがある。後、これは古典的な兵器だが、電磁加速を利用した電磁投射砲も幾つか存在する」

「とんでもないわよ。レーザーブレードなんてどうやって出来たのよ」

「基礎概念と武装の設計データはある。後で詳しく見てみるんだな」
「そうさてもらうわ」

「だが、こっちの技術で再現するのは難しいだろう。ACやネクストの性能でも光学兵器やビーム兵器の使用は主動機にかなりの負担を掛けたからな。現状の戦術機の性能では、光学兵器は愚か電磁投射砲すら実装は無理だ。根本的にエネルギーが足りない過ぎる」

「電磁投射砲については今戦術機に搭載できる“やつ”を一つ開発中なんだけどね」

「あるのか？」

「『99式試製電磁投射砲』……現在、この横浜基地の技術工廠で開発中なの」

「実用化の目処は？」

「厳しいわ。アンタも言った通りに大電力の確保が難しくって……砲身の強度を満たす合金も問題だし」

「電磁投射砲自体の理論は古典的なものなんだがな」

「でも、一応開発の目処は立っているわ。近い内に試射を行う予定だし」

「もし、良いんだったら、その投射砲を見せて欲しい。興味がある」
そんなこんな兵器情報を交換し合う二人。霞は“向こうの世界”の景色を撮った画像データを見ながら、暇を潰す。結局、話が終わったのは4時間後。霞は既に夢の世界へ旅立ち、座席で寝ている。龍と夕呼はヴィクターの肩に腰を下ろして、コーヒーを飲んでいた。

「しかし、凄いわね、あなたの世界は。ACにネクスト、AF、空中プラットフォーム、エレベーター衛星軌道掃射砲……どれもこちらの技術とは比べ物にならないわ」

「アンタ達こそ凄いと思うがな、あんな化け物相手に30年の戦い続けているなんて……向こうじゃ考えられないよ」

龍は携帯端末に保存したBTEAの情報データに目を移した。

「本音を言わせて貰うが、物量戦が基本のBETAの相手は、ネクストの戦闘能力をフルで使っても厳しいと思う」

「……………」

夕呼が無言で続きを促す。

「まず、弾薬が持たない。いや、補給体制さえ何とかなれば、どうにでもなるが……。それでもあの物量を一機でどうにかするのは難しい。戦闘区域をコジマ汚染で駄目にしてもいいなら、手はあるんだが……………」

「その方法は？」

アサルトアーマー

「AAだ。ネクストにはコジマ技術がもたらした恩恵は3つある。」

一つ目はP A、コジマ粒子を機体表面で高速対流させ、攻撃を防ぐものだ。二つ目はO B。これはP Aを展開しながら、背部の大出力ブースターのフルドライヴで急加速するものだ。ヴィクターでその最高速度は1500km/hに達する。」

「もう三つ目は？」

アサルトアーマー

「A A、ヴィクターにも搭載されているそれは……… 言うなれば、コジマ汚染と引き換えに局地的大爆発を起こす——— そういう代物だ」

「コジマ粒子の分裂反応を極短時間で急速に起こす。そのとき生じた膨大なコジマ粒子と余剰エネルギーを一気に機体外へ放出する。これは高濃度のコジマ汚染を引き起こすが、その威力なら、B E T Aを軽く吹き飛ばす事ができる」

「汚染ね……」

この四時間の情報交換のせいか、夕呼は余程の事でも驚かなくなつた。科学者の癖か、すぐに冷静になり、客観的に物事を見る。

「しかし、A Aも欠点がある」

「汚染の事？」

「いや。急激にコジマ粒子を消耗するから、一定時間P AとO Bが使用できなくなる。そうなったら、幾らネクストでもB E T Aに後れを取る可能性がある」

「どれぐらい使えないの？」

「短くても60秒……… 消耗率が高い場合は120秒ってことか」

「60秒……… 重光線級の攻撃なら、二射目を食らう事になるわ」

「光線属種か。試していないから何とも言えないが、レーザーが直撃したら、ネクストでも危険だ。P Aは実弾や質量のある攻撃は防げるが、レーザーの場合は減衰率が下がる」

「そう……… とりあえず、今日のところはこれでお開きとしましょう。社も疲れて寝てしまったし」

「そつだな。俺もそろそろ休みたいよ」

龍はコックピットの座席で寝ている霞を抱き抱えると、慣れた様

子で下に下りた。

「ちよつと……」

「どうした？」

機体の肩に取り残された夕呼。下から見ているせいで彼女の……が見えている。

「——どうした？」

「——察しなさいよ」

夕呼の言いたい事は分かるが、ここは惚ける事にする。

「悪い、いったい何を言いたいのかサツパリ分かん」

霞を抱えたまま、夕呼に背を向ける。

「——降りれないよっ!!」

根負けしたのは夕呼の方だった。

「そうか。そう言ってくれば、早いものを……」

霞をコンテナに寝かせ、上にC型軍装の上着を掛けてやる。

「は、早くしなさいよっ!」

「そう怒るな」

肩までよじ登る。

「さて、さつさと降りるぞ」

「ちよつ!？」

夕呼の腕を掴むとそのまま抱き上げ、俗に言う“お姫様抱っこ”する。

「よっ」

そのまま肩から飛び降りる。

「きゃっ!？」

少女チツクな悲鳴が上がる。

「意外と可愛い声を上げるんだな。魔女とはいえ、一人の女か」

「……ッ!!」

羞恥心で顔が赤くなる夕呼。龍は夕呼を下ろすと、再び霞を抱き上げた。因みにこっちもお姫様抱っこだ。

「霞の部屋を覚えてくれ。ちゃんとしたベッドで休ませないと……」

「……こつちよ」

不機嫌そうな夕呼の様子を見ながら、龍は霞を部屋に運んだ。ベッドに寝かせ、後は夕呼に任せる。流石に男である自分が寝ている女の子の世話をするわけにもいかない。だが、部屋を出る前に見た霞の寝顔はとても穏やかそうなものだった。

霞の部屋を出た後、龍は基地の地下から地上へ出た。

「もう夜か……」

屋上まで上がると、既に辺りには夜の帳が下りていた。屋上から見える景色は海と夜空、そして、瓦礫の山と化した町並みだけだった。

「さて、これからどうなるか……」

近くにあるベンチに腰を下ろす。

バレルワールド

（平行世界か……まさか、そんな事に巻き込まれるとはな》

自分の中で未だに納得できていないところがあるが、この事実間違いはないだろう。

ベータ

（BETAが……夕呼の事だ、近い内に俺を最前線に出すだろうな）
ネクストの性能を知った以上、それを使わない手はない。龍自身もそう思う。だが……。

「俺の“力”だけでBETAをどうこうするのは不可能だ」

それはシミュレーションをやった事で分かった事の一つだ。アレだけの物量戦を仕掛けてくるBETA、ネクスト一機では到底太刀打ちできない。

「いや、太刀打ちは出来る……だが」

空を見上げる。そこにはコジマ汚染のない空が広がっていた。空だけではない。大地にも海にもコジマ汚染がない“この世界”。だが、ネクストを使ってしまったら……。

（仮にBETAを駆逐できたとしても、ユーラシアは人が住めない土地に変わってしまう）

そうなっては意味がない。夕呼もそれを許すことはしないだろう。
「難しいな……」

龍の弦きは誰もいない屋上に空しく響いた。いや、一人だけその声を聞き取っていた。

屋上のさび付いた金属製の扉が開く。屋上に上がってきたのは国連軍の軍装を着た一人の女性だった。

「あ……」

こちらに気づいた女性が小さく声を上げる。風に吹かれて長い髪が靡く。

「お邪魔……でしたか？」

「いや、気にするな。少し夜空を眺めていただけだ」

やって来た女性の軍装にはウイングマークがある。どうやら、この麗しい女性は衛士のようなようだ。だが、若い……いっても20歳前半といったところか。

（総力戦、男だろうと女だろうと関係ないってことか……）

龍の世界でも女パイロットは少なからずいた。だが、目の前の女性はどうみても荒事に向かないタイプだ。雰囲気……目が穏やか過ぎる。

（本当にこの世界は凄いいよ、夕呼……）

こんな女性まで戦いに出なければならぬ現実。そして、その中でも生き残ろうと必死に戦っている彼女ら。龍は素直に彼女らに敬意を払った。

「——あなたは何のようだ？」

「少し気分転換を……。昼間、少し大変な事がありましたから」
「……………」

昼間といえば、龍がこの世界にやって来た頃だ。彼女の言っている事は龍がやってきた時のいざこざらしい。

「あの所属不明機アンノウンの事か？」

「は、はい……………」

「となると、A-01部隊の一人か」

戦闘中の会話を思い返す。確か部隊長がそんなことを言っていたはずだ。

「良くご存知ですね」

「ま、アレだけ、騒ぎになれば…な」

「そうですね……」

彼女は龍の隣に腰を下ろした。

「そういえば、お互い自己紹介がまだだったな」

「あつ……私はA - 01部隊所属、風間禰子少尉です」

「俺は……草薙龍。階級は…少佐だったか？」

「えっ!？」

風間が慌てて龍の階級章を見る。

「し…失礼しました、少佐殿。軽々しい態度をとりまして……」

「別に気にしないでいいぞ。この階級は依頼主^{クライアント}を用意したものに過ぎない。傭兵にとって階級なんて必要ないものだしな」

「傭兵……ですか？」

「ああ、俺はゆう……ここ副指令殿に個人的に雇われた私兵だ。この階級は……この基地である程度自由に動くためのものに過ぎない」

「傭兵なんですか？」

「以外か？」

「いえ、私は傭兵の人とこうして話した経験がないもので……」

「そうなのか……」

（こちら側の世界では、向こう側のような突出した傭兵^{レイヴン}がいないみたいだな）

「ともかくだ、俺は傭兵だ。階級の事は気にしないでいい。それに変に余所余所^{チヤチヤ}しくされるのは嫌いだね」

「は、はい……」

と言つてもやはり階級の事が気になるのか、風間は身を硬くしたまま、気まずそうにしていた。龍はその様子を見て苦笑する。彼女は根が真面目な軍人のようだ。

そんな事を考えていたら、彼女の横に置かれた箱が目に入った。「それはなんだ？」

「これですか？」

風間は膝の上にその箱を置くとロックを外し、蓋を開けた。

「これは……ヴァイオリンか」

「はい」

彼女が持っていたのはヴァイオリンだった。年季の入った味のあ
るヴァイオリンだ。

「引けるのか？」

「はい、嗜む程度ですが……」

「なら、聞かせてくれないか？」

風間はそれに頷いて答えると、ベンチから立ち上がり、龍に向き
直った。ヴァイオリンを顎と肩で押さえ、弓を構える。

一呼吸置いて、二人のいる屋上に心地よい音色が響く。

彼女は嗜む程度などと言っていたが、このレベルなら、十分プロ
として通用するレベルだ。暫しの間、龍は彼女の奏でる音色に耳を
澄ます。

穏やかで心地よい時が流れる……。

風間の演奏が終わる。龍は自然と握手を彼女に送った。

「凄いな、聴き入ってしまった」

「ありがとうございます」

顔を赤らませる風間。嬉しいような恥かしいようなそんな顔をし
ている。

「ヴァイオリンは長いのか？」

「はい、子どもの頃から。でも、最近じゃこうやって引く機会も随
分減りました」

「だろうな……」

「くっしゅん！」

風間が小さくくしゃみを上げる。日も暮れ、夜もかなり更けてき
た。

「そろそろ戻った方がいいな」

「そうですね」

風間は恥かしいそうにしている。龍は少し笑いそうになったのを押し留めると、自分の軍装を彼女の肩に掛けてやった。

「体が冷える前に部屋に戻れよ」

「あ、あの…これっ！」

「貸しておく。今度あった時に返してくればいい」

そのまま、龍は振り返らず、屋上を後にした。

「——近い内に会う事になるだろうしな」

その呟きは誰にも聞こえる事は無かった。

Episode 4 (後書き)

ご意見・ご感想、ぜひお願いします。

キャラ設定

カレードランクNo31——草薙龍。

“Muv-Luv”の世界に飛ばされてしまった傭兵。リンクス

向こうの世界では、ラインアーク防衛線、ORCA旅団への参加、アルテリア襲撃……等を経験。

セレンに拾われる前は『名無しの傭兵』として戦場で生きてきた。そのため自身の名前はない。セレンに拾われた際コードネーム『リユー』を名づけられる。

今の名前は夕呼のもとで私兵として雇われた時に強制的に付けられた偽名……？。

操縦技術はカレードランクの中でも一二を争うレベル。初めて乗る戦術機も完璧に扱えるほど。また、彼の愛機であるホワイト・グリントの発展機——空の覇者の開発にも携わっていたため、兵器開発等も精通している。

“Muv-Luv”の世界に飛ばされてからは、香月夕呼に雇われ、私兵として活動することになる。また、A-01部隊の特別顧問や兵器開発等を任され、夕呼に日々こき使われている。国連軍内での階級は“少佐”。

先天的に高いコジマ粒子汚染耐性を持っており、過度の汚染でも肉体に影響が出にくい。

髪は漆黒のセミロング。普段は後ろで縛っている。左目も黒。しかし、遺伝子異常で右目は赤と白と黒のマーブル模様。そのため、右目は常に眼帯で覆っている。

基本的に自分のためにしか動かない現実主義。が、これはあくまで彼の主観であり、セレン（龍の世界の）や夕呼からは『あまい男』・『馬鹿』等と称されている。つまりお人好しと言ったこと。

しかし戦闘となれば自身と部隊の生存を第一に考え、場合によれば、撤退も味方を切り捨てるのも厭わない。そのため、正規軍の衛士と

は反りが合わない事が多い。

—— A - 01 部隊隊員 ——

すがわ
みすず
栖川・美鈴

宗像の同期で、階級は中尉。

A - 01 部隊内でのポジションは インバクト・ガード 砲撃支援。

容姿は赤毛のショートに赤い瞳、身長は女性の平均身長より少し高い、宗像と同じくらい。

宗像と同期だが風間のような噂はない。性格は少し男っぽくラフな感じ。

同期の宗像や新任たちとお茶を飲みながら雑談するのが好き。最近の話題は少佐殿の話と風間弄り。

やがみ
れいら
夜神・麗羅

風間の同期で、新任少尉。

A - 01 部隊内でのポジションは ストライク・バンガード 強襲前衛。

容姿は瞳は黒に、首辺りで切りそろえた黒髪のセミロング、さらに左の前髪を白いリボンで縛ってある。

風間の同期で、高い近接戦闘技術の持ち主。選任の速瀬の格闘機動について行ける技量を持ち、ヴァルキリーズの中では新任にして前衛を任されている。

だが、趣味は読書と以外に大人しめ。最近では率先して龍から近接戦闘や機動制御スキルを学ぼうとしている。

ほうじょういん
かや
奉上院・伽耶

風間の同期で、新任少尉。

A - 01 部隊内でのポジションは ブラスト・ガード 制圧支援。

容姿は薄茶色の背中まで伸びる長髪に、同色の瞳。

風間の同期で、夜神と違い近接戦闘は不得意。しかし高い射撃スキ

ルの持ち主で精密射撃を得意とする。

性格はのんびり……というか天然ボケ。その癖に意外と的を射た事を言うから油断ならない。最近では同期の風間と上官である龍の関係を気にして何かと風間の背中を押そうとしている。しかし本人は殆ど自覚なし。

キャラ設定（後書き）

新キャラが登場したら、編集します

Episode 5

国連軍横浜基地を騒然とさせた所屬不明機襲撃事件から一日。

襲撃事件（正確には、この世界に転移してきた）の張本人——カ
ラードランク No.31 『龍』改め、国連軍 A - 01 部隊特別顧問、
草薙龍少佐は……。

「ふわぁ〜」

ヴィクターの外装の取り外し作業をしていた。その周りには、夕
呼が A - 01 部隊付きの整備部隊から集めた整備兵が群がっている。
（眠い……）

朝早く夕呼に起こされてから、そろそろ4時間。龍は朝飯も食べ
ずに作業を進めていた。いや、正確には、作業のせいで食べられな
かったというべきだろう。

（夕呼の奴、人をこき使いやがって……）

『飯を食べている時間があるなら、整備の連中にネクストの構造説
明でもしなさいっ!!』

これだ……。

この一言で、龍の静かな朝は崩れ去った。それから4時間。龍の
イライラ度は限界近くまで溜まっていた。

「お疲れ、龍。これでネクストの解析が7〜8割がた完了したわ」
「そうかい」

結局、龍が開放されたのは昼を過ぎてからだった。

「そう怒らないでよ。遅かれ早かれ、ネクストの構造解析はやらな
いといけなかったんだから」

「そんな事は分かっている。俺が怒っているのは横暴なクライアン
トが俺を飲まず食わずで6時間も働かせたことだ」

「あら、私はあなたのクライアントよ。こき使って何が悪いのよ」
「くっ……」

そう言われると反論できない。

「……兎も角、休憩はさせてくれ」

「そうね……私の部屋で今後の相談をしながら、小休止でも入れましょうか」

「ぜひ、そうしてくれ」

龍は疲れた体を引きずりながら、夕呼の部屋に向った。

「たくつ、人をこき使うのも程ほどしろよな」

「文句言っんじゃないわよ」

龍はソファに倒れこむ。どうやら、そのまま眠るつもりらしい。

「ちよつと、寝るんじゃないわよっ!」

顔面にファイルが投げつけられる。龍は起用にそれを受け止める。

「何だよ……」

ファイルの中身を確認すると、龍の眠気はどこかに飛んでいった。

「『第四世代戦術機開発プラン』……?」

「ええ。といつても今は箱だけで中身が殆どないけど」

「——で、これを俺に渡したのは?」

「もちろん……」

夕呼が不敵な笑みを浮かべる。

「あなたにやってもらいたいのよ。新型戦術機開発を」

「……」

予想はしていたが……。

「幾つか補足しておきたい」

「言ってみなさい」

「一つ、俺はまだ“こちら側”の現兵器について……特に戦術機についての知識はほとんど持っていない」

「今からやればいいじゃない。伊達や酔狂でやっているわけじゃないんでしょ、プロの傭兵さん」

「……」

とりあえず無視して補足説明を続ける。

「一つ、アンタとの契約書には、一切この記載は無かった。俺はボランティアでここににいるわけじゃない。もしやらせるなら、追加料金が新たな契約書を用意してもらわないと困る」

「あら、契約書には『雇い主の私兵となる』って書いてあったわ。つまり、あなたは私のド・レ・イって事でしょ」

「……………」

龍の中に沸々と湧き上がる感情があった。

「他に言う事は？」

夕呼が勝ち誇った顔をしている。

（このクソ尼……………）

下でに出ていれば、付け上がりやがって……………。

だが、ここで怒りを露わにしたところで状況が好転するとも思えない。それに、この手の嫌がらせは今までも相当数受けてきたのでまだ何とか自制心が効く。

「——新兵器を開発するには、戦術・戦略規模での運用仕様、機体性能と量産性の両立等といった明確な開発コンセプトが必要不可欠だ。それに兵器開発はそんじょそこの金と労力で出来るものじゃない」

「そんな事は分かってるわよ……………時間がないのよ」

ポツリと夕呼がもらした一言を龍は聞き逃さなかった。

「——どういことだ、夕呼？」

「——あなたには関係ないわ」

「契約」

「契約？」

「忘れたとは言わせないぞ、夕呼。お前は俺に対して情報を開示する義務がある。それはどんな小さな事象でもだ。それが俺とお前がした取引だ」

「——そうだったわね」

夕呼はもう一つファイルを龍に投げ渡した。

「『オルタネイティヴ5』？」

表紙には、英語でそう書かれている。

（夕呼が指揮しているのは、“4”だったはず……。なら、これは……）

走り読みで内容を確認する。

「……………お前はこれに反対なのか？」

「勿論よ」

間髪いれず、夕呼が反論する。

「——一部の人類の地球脱出計画に、残った人類の大反攻計画を合わせた新たなオルタネイティヴ……か」

「オルタネイティヴ4で結果を出せなければ、米国は即時オルタネイティヴ5を発動するわ。脱出用の大型宇宙船もラグランジュポイントで建造中だし、米国はG弾を作るためのグレイ11集めに躍起になっている」

「G弾？ ここにも記載されていたが……爆弾の一種か？」

「G弾は略称よ。正式名称は『Fifth-dimensional effect bomb』。和名だと『五次元効果爆弾』と言うわ」

「——空間制圧兵器か？」

「燃料気化爆弾が核爆弾と間違っていない？ そんな可愛いもんじやないわよ、G弾は……」

「——名前から察するに、空間自体に作用する爆弾ってことか」

「察しがいいわね。あなたの世界にも似たものがあつたの？」

「そんなもんあつて堪るか」

「そうね、BETAに侵略されていないあなたの世界には存在するはずもないものだわ」

「——BETA由来の元素“グレイ11”。G弾はそれを燃料に稼動するML機関△アコック・レヒテの臨界反応による発生する次元境界面・多重乱数指向重力効果域を利用した空間制圧兵器。効果範囲内の全ての質量物をナノレベルまで分解する……か」

「でも、その代わり、効果範囲内では半永久的に重力異常が起き、

植生も回復する事はない」

「だが、上記通りの威力が実際にはつきりされれば、BETA殲滅も夢じゃない。違うか？」

「上記通りの威力が出たらね」

「ここまで大きく出ているんだ。性能の裏付けはちゃんとしてあるんだろう？」

「実戦でG弾が使われたのは一回だけ。この横浜ハイヴ攻略戦の時よ」

「ここで実戦テストが行われたのか？」

「ええ。結果は上々。二発投下されたG弾は地表構造物を完全に吹き飛び、ハイヴにいたBETAの9割強を消し飛ばしたわ」

「核兵器の比じゃないな」

「でも、当初考えられたほどの威力は出なかったわ」

「ここに記入されている情報を見る限り、G弾の集中投入で殆どBETAを駆逐できると書かれているが？」

「そんなの米国のG弾狂信派がでっ上げたものに決まっているじゃない」

「そんな適当な数値を地球の未来を決めるかもしれない計画に使うか……？」

「そこまで人類は追い込まれていると考えられない？」

「……」

「あなたはと思う？ オルタネイティヴ5について」

「一傭兵である俺の意見が役に立つとも思えないが」

「客観的な意見を聞きたいのよ」

「——— そうだな」

龍は言葉を選びながら続けた。

「結論から言うと、俺はこの計画には反対だ」

「理由は？」

「まず、G弾の性能の根拠がない。最初の数発BETAに通用しても、必ず対処されるようになる。G弾の元になる元素はBETA由

来だ。人類が使えるのなら、BETAが使えても不思議はない」

「私と同意見ね」

「それを抜きにしてもG弾はお勧めできない。兵器としてクリアしなければならぬものをクリアしていないからな。夕呼、兵器に一番必要なものは何だと思う？」

「——信頼性かしら？」

「当たりだ。兵器に必要なのは『必要な時に100%動作する』、確かな信頼性だ。それを満たしていない兵器は必ず実戦でボロを出す」

「つまり、G弾は欠陥兵器だと言いたいわけね？」

「そうとつてくれて構わない。それに夕呼が俺に要求している本当の事も少し見えてきた」

「要求していること？」

「お前が俺にさせたいのはBETA退治じゃなくて、オルタネイティヴ4の広告塔だろ？」

「——何故そう思う？」

「お前が言っただぞ、“時間がない”ってな。俺の読みでは、オルタネイティヴ4は大きな成果を出せていない……違うか？」

「……続けなさい」

「そして、4の代案であるオルタネイティヴ5。失敗なら即時移行のこの状態だ。計画を延命するための……手持ちのカードが必要になる」

「——はいはい、降参よ、降参」

両手を挙げて降参のポーズをとる。

「この新型戦術機開発プランも手持ちのカードを増やすためだろ？」

「——あなたって本当に目ざといわね。時タイラツとするわ」

「褒め言葉と受け取っておこう」

「でも、あなたの読みは半分あたりで、半分はずれよ」

「？ ということだ？」

夕呼のもう一つのファイルを龍に渡した。

「あなたの役目は“オルタネイティヴ4の広告塔”、そして……」
ファイルに書かれた仮案は……。

「……ハイヴを潰すことよ」

『甲20号攻略作戦』……と書かれていた。

龍が部屋を出て行った後、夕呼は深いため息を付きながら椅子に体を預けた。

「……時間がないのよ、龍」

オルタネイティヴ4は未だに目立った成果を挙げられていない。
このままでは遅かれ早かれ“5”に移行されてしまう。これは誰が見ても明らかだ。

（だからって……）

自分が彼に押し付けたのは……地獄への片道切符だ。

（最低よね、私って……）

自分は何も知らない……この世界とは無関係な一人の若者を地獄へ送ろうとしている。それも自分が描いた身勝手な虚像を押し付けて……。

「それでも……」

……歩みを止めるわけには行かない。

人類を救うためには、何としてもオルタネイティヴ4を成功させ、オルタネイティヴ5発動を阻止しなければならない。

（そのためなら……）

龍を地獄へ引きずり込む事も暇ない。

それが、私……香月夕呼が選んだ道だ。

夕呼の部屋を後にした龍は大量の書類とファイルを持っていた。
「『甲20号攻略作戦』……か」

夕呼から聞かされた事は龍の想像を超えていた。

…

……

………

「ハイヴを攻略だと？」

「ええ、朝鮮半島の甲20号目標——『鉄原ハイヴ』を潰すわ。すでに極東国連軍・帝国防衛軍・中華統一戦線の各軍からハイヴ攻略線に必要な戦力を算定中よ」

「早速広告運動か？」

「ええ、ついでにあなたにはハイヴを落としてもらう」

「話の腰を折るようで悪いが、勝算はあるのか？」

「厳しいわね……だけど、あなたという不確定要素が入った時、どつちに転ぶか……私には判断が付かないわ」

「つまりない……そういうことだな？」

「“0”ではないわ」

夕呼は作戦の概要をまとめた大量の書類を龍に押し付けた。

「龍、あなたに拒否権はないわ」

「………」

「これは命令よ、クライアント依頼人からのね」

………

………

…

「全く……本当に無茶苦茶な^{クライアント}依頼人だな、夕呼は」

思い返してみれば、理不尽極まりない命令だった。こっちは未だにこの世界の状況を把握しきれていないのに、こんな無茶を言うてくるなんて……。

「だが、クライアント依頼人の命令なら仕方がない」

夕呼の言ったとおり、今の龍に拒否権はない。

今の龍にできる事は生き残るための情報を集め、今作戦の成功率を1%でも上げることだけだ。

「ま、なるようになるさ」

龍は顔に笑みを浮かべた。まるでこの状況を楽しんでいるような笑みだ。

龍と夕呼が人知れず、話をした日から数日。

「はぁ……」

溜め息が漏れる。

「どうしよう……」

視線が胸に抱かれている軍装に注がれる。

「一応クリーニングはしたけど。草薙少佐……どこにいるのかしら」
風間禱子は困っていた。

数日前、龍に渡されたC型軍装の上着。どうやって龍に返せばいいか迷っていた。

（副指令に直接聞いた方が……）

風間は浮んだ案を掻き消した。悪くない案だが、それを知ったら確実に夕呼は弄ってくる。A-01部隊に配属されてまだ日は浅いが、夕呼の性格はある程度分かっている。

（どうしよう……）

「あが……」

通路に変な声が響く。風間の肩が驚きで跳ね上がる。

通路の十字路からドレスのような黒い軍装を着た少女が出てくる。

「社……ちゃん？」

食事の乗ったトレイを持った霞が覚束ない足取りで歩いている。

「どうしたの、こんな所で？」

「——風間少尉？」

その時、霞の体勢が崩れる。

「危ないっ！」

慌てて霞を支える風間。トレイの定食が落ちそうになったが、何とか最悪の事態だけは回避した。

「私が代わりに持つわ」

「あつ……」

霞が少し抵抗する。

「でも、またこけそうになったら、トレイのご飯が台無しになるわ」
「うう……」

「——じゃあ、代わりに私が持っているこの服を持ってくれない？」

「——はい、分かりました」

風間は霞からトレイを受け取り、自分が持っていた龍の軍装を霞みに渡した。

「これを何処まで運ぶの？」

「——風間少尉は……“これ”どうしたんですか？」

「ちよつと……人から預かっているの。でも、返したくてもその人がどこにいるのか分からなくて……」

「——そうですか」

そう呟くと霞みは歩き始めた。

「こつちです」

「ええ」

霞の案内でたどり着いたのは第一資料保管室という部屋だった。

「……」

慣れた手つきで霞が部屋のロックを開ける。

（この部屋……）

対BETA戦略・戦術、戦術機の仕様目録など軍事機密が保管さ

カタログスベック

れている部屋だ。普通は余程の事がない限り開放されるはずのない部屋……。

（何でこの子が…？）

中に入ってみると、大量の資料が入った棚の数々と何台かのPC、そして大きなデスクとソファがあった。デスクの上には大量の資料が乱雑に置かれている。

「龍さん……起きてください、朝です」

ソファを見てみると、顔に本を載せて寝ている男がいた。霞が彼の肩を揺する。

「あつ…………もう朝か？」

「はい、8時前です」

ムクリと起き上がる。

「あつ」

「ん？」

寝ていたのは風間の探し人である龍だった。

「確か、風間……………袴子だったか」

「は、はい、草薙少佐」

慌てて背筋を伸ばす。

「前も言ったが、そう硬くなるな。俺は只の傭兵だ」

龍は立ち上がると伸びをして体を解す。

「霞、夕呼から伝言はあるか？」

「はい、さつさと開発プランを提示しろと」

「あの我が儘魔女が……………」

「それと……………作戦に口を出すなら、それ相応のものをさせ……………と
も」

「分かった。とりあえず……………」

龍の腹が鳴る。

「飯が先だな」

「ご飯ならここに……………」

霞が風間の持つているトレイを指差す。

「ああ、二人ともわざわざ持ってきてくれたのか、ありがとう」

龍が霞の頭を撫でてやる。霞の特徴的な髪留めがユラユラ揺れ動く。

「ど、どうぞ……………」

「ありがとう」

風間からトレイを受け取った龍は手を合わせ、早速食べ始めた。

「——風間少尉」

「あ、社ちゃん、ありがとう」

霞から龍の軍装を受け取る。

「草薙少佐」

「ん？」

「あの時はありがとうございました。これ……お返しします」

「ああ……クリーニングしてくれたのか？ 別にそのまま返してくれてよかったのに……」

「いえ、流石にそれは……」

「前も言ったが、階級は気にしないでいいぞ。俺は傭兵であって軍人じゃない」

そう言われても……。

風間は困ったような顔をする。それを見た龍はこれ以上言うのも酷と思ったのか、食事に戻った。龍の食事風景をジッと見ているのも悪いと思った風間は散らかっている資料の整理を始めた。それを見た霞も慣れない手つきで手伝う。

（こっちの資料はBETAの行動解析の……こっちはBETAの侵攻陣形について……これは佐渡島ハイヴの、こっちは鉄原ハイヴのBETA予想個体数……）

デスクの上にある資料は30年間人類が戦ってきた証である大量の戦訓とBETAの行動予想だった。

「ん？」

大量のデジタル文字の中に手書きの文字があった。そこに書かれていた文面は……。

「第四世代戦術機……開発概要……？」

刹那、横から伸びてきた手がその紙を奪い取る。

「ああ……」

「……」

隣には龍が立っていた。眼帯に覆われていない漆黒の瞳が風間の瞳を貫く。

「……………っ！」

風間の肢体に戦慄が走る。龍に見詰められているだけ……それだけのはずなのに風間は何故か体の震えを止める事ができなかった。

「……全く、気を使ってくれるのは有り難いが」

風間から目を外した龍は溜め息を付いて実に面倒くさそうにそう呟いた。

「風間禰子、これはまだ他言するな。いいな？」

キツと龍に睨み付けられる。

「は、はいっ！」

少し声が裏返った変な返事になってしまう。

「龍さん……大丈夫です、風間少尉なら心配ありません」

「霞、人の中を必要以上に見るな」

「はい……」

二人がよく分からない会話をしている。だが、風間は先程の反動のせいか頭が回っていなかった。

「風間……」

「は、はいっ！？」

「そう硬くなるな。さっきも言った通り、この事はまだ他言しないでくれ。未だに形になってない仮案だ」

「分かりました……でも本当なんですか？」

「どういうことだ？」

「……本当に第四世代戦術機の開発が進んでいるんですか？」

「……言っただろう、まだ形になっていないと」

「じゃあ、形になれば、新しい戦術機が出来るんですね？」

期待の籠った声が漏れる。

「……さあな、俺は確かに新型機の開発を頼まれたが、それを本当に実戦配備するかどうか決めるのは御上であって俺じゃない」

「そう……ですか」

「それに新型機を開発する前に俺にはやる事が幾つかあってな」

「やる事……？」

風間はこの後、龍が発した言葉を聞いて心底驚く事になる。

「ああ、近い内に鉄原ハイヴを攻略目標とした大規模作戦が発動される。それを成功させてから……」

「ちょ、ちょっと待ってくださいっ！ 攻略作戦って……」

「ああ、その時にはA-01部隊にも働いてもらう事になるだろう。覚悟だけはしておいてくれ」

「ど、どうして少佐がそんな事を知っているんですか？」

「さあ、どうしてだろうな……」

それだけ言うと、龍は風間から目を離し、デスクの資料を読み始めた。

「どうしても聞きたいなら、少し手伝ってくれ」

「はい？」

「ここ数日、徹夜で調べ続けたが、どうも分からない点が多すぎだな」

「はあ……」

「士官訓練は受けているだろう？ ご教授してくれないか？」

龍は大真面目な顔でそういった。

「え、え……」

風間は少し困った顔をしながらも龍のご希望に答えた。風間は龍がありえないほどBETAや戦術機の知識を持っていないことに驚き、そして傭兵ならではの価値基準、そして戦い方を龍から教えてもらった。

教え、教え合う二人。その姿を霞がジッと見ている。端から見たら、かなりちぐはぐな状態だ。

そして、二人が気づいた時にはもう既に昼を過ぎていた。

「ああっ!？」

突然、風間が声を上げた。

「ん？ どうした、風間？」

「今日は午後からA-01部隊のブリーフィングがあるんですっ！」

「午後から？……もう昼過ぎだな」

「い、急がないと……っ！」

「待て、俺も行こう」

慌てて出て行こうとする風間の方を掴む龍。

「元は俺の我が儘が原因だ。それに俺もA - 01部隊に用がある」
「そ、そうなんですか……？」

「ああ、だから、弁護ぐらいはさせる。霞、お前も一緒に行くぞ」
「はい……」

三人揃ってブリーフィングルームに向う。

「そういえば、A - 01部隊の隊員は一体何人いるんだ？」

「自分を含めて7名です」

「7人？ 切りの悪い数だな」

「——三週間前に行われた佐渡島の漸減作戦で5名が殉職しました」

「——すまない、無神経過ぎた」

「いえ……それにA - 01部隊の戦死は事故死扱いです。記録に残らないんです。だから……気にしないでください」

「死んでもその事が残らない……か。まるで傭兵である俺と同じだな」
「えっ？」

「傭兵も同じだ。傭兵の死は戦死にカウントされない。事故死扱いだ」

「……」

「だからこそ、傭兵は戦場でよく使われる。自前の軍隊よりも優秀で自由に切り捨てられる。そして何より戦死にならない……戦場でこれ以上使い勝手のいいものはない」

「酷いですね……」

「だが、仕方ない。傭兵は……俺はそうやって稼ぎを得ている。文句は言えないさ」

「そうでしょうか……」

「そうなんだよ」

二人の会話が途切れる。

暫し歩くと、ブリーフィングルームに着いた。

「さて、中の様子は……」

耳を敬そはたてる。

「……かざ………しているんだっ!？」

いきなり怒号が聞こえた。風間の肩が飛び上がる。

「いす………ちよう、おちつい………ださい!」

「あ……引きでも、しているん………ないんですか?」

「あの袴子が………する………しょうか?」

耳を澄ませば、色々な言葉が聞こえてくる。

「どうも中にいるA - 01部隊の面々は個性的な者が多いようだな」

「………」

「どうやら、風間は誰かと逢引しているらしい」

「………っ!」

「ま、当たらずも遠からずかな………」

「全然違いますっ!」

赤く染まった顔で龍の言葉を否定する。

「………何をやっているの、あんた達は?」

そこにタイミング悪く夕呼が現れた。

「逢引なら他でやって頂戴」

「ち、違いますっ、副指令!」

「だ、そうだ、夕呼」

「あなたは否定しないのね」

「ご想像にお任せするさ。それよりもこれからブリーフィングだろ? 俺の紹介にも済ませようと思ってきた」

「そうね、風間、あなたもさっさと入りなさい」

「はっ」

ブリーフィングルームに入るとご機嫌斜めなA - 01部隊の面々が待っていた。

「風間っ! 何をしていた!? 今日は一三〇〇からブリーフィングだと言って置いただろうっ!」

「す、すいません、伊隅大尉………」

入った瞬間、風間は部隊長の伊隅に怒鳴られた。大人しく、怒鳴られておくつもりだった風間だが、自分たちの間に割って入ってくる者がいた。

「少佐……」

「風間少尉が遅れたのは、俺の仕事を手伝ってもらっていたからだ。それにブリーフィングに一つや二つでそんなにキリキリするな。折角の美人が台無しだぞ、伊隅大尉」

「——誰だ？」

「伊隅、口の利き方には気をつけなさいよ。彼、こう見えても少佐よ」

「ッ！ 失礼しました、少佐殿！—」

「ま、そういうことだ。風間のことは勘弁してやってくれ」

伊隅が疑うような眼差しを送ってくる。

「はいはい、こっちは忙しいんだから、手短に済ませてよね」

夕呼の声で騒いでいたA・01部隊の面々が黙る。伊隅と風間も席に付く。龍は夕呼に並ぶ。

「さてと……じゃあ、龍、さつさと自己紹介を済ませなさい。後が詰まっているんだから手短にね」

「はいよ……」

龍が一步前が出る。

「数日前からだ、A・01部隊の顧問……ま、簡単に言えば、お守りを任された草薙・龍少佐だ。これから宜しく頼む」

（えっ！？）

風間を含めたA・01部隊の全員が龍の言葉に驚いた。

「副指令、これはどういうことですか！？」

「彼が言った通りよ。伊隅が中隊長である事に変わりはないけど、龍にはさらに上の大隊長をやってもらったわ。ま、大隊長なんて肩書きだけで実際は単独行動をしてもらう事になるけど」

「私はそんな話……」

「ええ、言っていないもの。知らなくて当然よ」

「……っ」

夕呼の言い草に伊隅が息を呑む。

（少佐、だから、あの時……）

風間は龍と交わした会話を思い出した。あの時、龍はA - 01部隊へ命令が下る事を知っていた。

「あなた達からしたら、不満かもしれないけど、彼の操縦技術はあなた達の比じゃないわよ？ 何せ、実戦で不知火四機相手に圧勝したんだから」

「不知火四機につ！？」

「おい、夕呼の余計な事を……」

「伊隅、あなた忘れたの先日の事件の事……」

先日の事件……。忘れるはずがない不明機による横浜基地襲撃があつたあの日、そして、龍と出会った日。

（でも、それと少佐に一体何の関係が……）

「あつ！……」

叫び声が後から飛んで来る。振り向くと速瀬が立ち上がって龍の事を指差していた。

「まさか、あの時の衛士っ！？」

「えっ！？」

龍は立つたまま、何も喋っていない。風間はその無言が肯定であると理解した。

「……… 先日の事件の折、敵機を制圧できなかったのが、仕方ない。何せ、俺の機体は“異質”だからな。だが、冷静に敵の性能を測り、無理に小隊で戦闘を継続しないで後方の部隊と共闘していれば、事態はもう少し良い方向に転んでいたかもしれない」

「御託はどうでもいいのよっ！！ あんたがああの時の衛士なのね！？」

「……… そうだ」

「何でここにいるよ……」

「雇われたからだ、その副指令殿にな」

「雇われたっ？ ふざけるんじゃないわよっ！！」

食って掛かる速瀬。何せ、速瀬はあの時機体を半壊させられている。そのせいで速瀬は龍に対して異様な敵対心を持っていた。

「——お前か。あの時、対艦刀で切りかかって来たのは。余程の馬鹿か、脳味噌が逝っている奴だと思っていたが、当たりだったな」

「何ですって——っ！！」

逆上した速瀬が龍に殴りかかる。が…………。

「踏み込みが浅いな」

速瀬の拳を弾いた龍はそのまま速瀬の顎に掌底を叩き込む。

「ッ！？」

体制の崩れる速瀬。だが、咄嗟に後に跳んでいたのがダメージはそこまで大きくなかった。再び仕掛けようとする。

「直情で単調な動き……………これがもし対人戦なら、お前はすでに三回死んでいる」

オートマチックのハンドガンを構えた龍がまるで死刑宣告のような口振りでそう言った。

「あの戦闘の時も、お前は冷静さを失って無謀にも近接戦闘をした。実戦で冷静さを失ったら、どうなるか……………教えてやろうか？」

ハンドガンの引金に力^{トリガー}が掛かっていく。

「しょ、少佐、止めて下さいっ！！」

「……………」

刹那…………。

パン——！！！！

乾いた発砲音が部屋に響き渡る。

「……………身の程を知るんだな」

速瀬は無事だった。龍は撃つ瞬間、銃口を箆かにずらして速瀬の横擦れ擦れを狙っていた。そのため、弾丸に撃ち抜かれたのは数本の髪と後の壁だけだった。

龍がハンドガンをホルスターに収めると同時に、速瀬の腰が砕ける。

「水月っ!？」

遙が慌てて支えに入る。

「——この程度で腰を抜かすとは……」

龍は呆れたような口振りでそう呟いた。

「夕呼、この基地でもトップクラスの实力者集団って言うのは嘘なのか？」

「あなたの価値基準で物事を喋らないでよ。誰だってあれだけさつきを向けられたら、そうなるわよ」

「まさか、俺が本気で彼女を殺すとも思っていたのか？」

「違うの？」

「こんなくだらない事で、貴重な衛士を殺すことなんてするかよ……ま、場合によってはそれなりの対応はさせてもらうつもりだったが」

速瀬が真つ青な顔で介抱されている横で、龍と夕呼はまるで何もなかったような落ち着いた口調で喋っていた。

「少佐……」

風間はあの夜の事と今日の事を思い返していた。自分のバイオリンを聴いてくれて、褒めてくれた。また、聴きたいといってくれた。未だに実戦経験のない自分に体験談や戦いから学んだ事を教えてくれた。

目の前にいる龍を見詰める。

同じ人だ。だけど、まるで別人のように感じる。どっちが本当の龍なのか分からなくなる。自分の中に芽生えていた龍への信頼が疑惑と恐怖に塗り変わっていく。

（少佐、あなたは一体何者なんですか……？）

風間は両手を自分の胸の前で強く握り締めた。そうしなければ、襲い掛かってくる不安に絶えられなかった。そして、風間は気づかなかった。龍がそんな自分の様子をジッと見ていた事に……。

Episode 5 (後書き)

目標では、後二話ぐらいで甲20号作戦に入りたいです。

ご意見・ご感想宜しくお願いします。

Episode 6

ここは、第一資料保管室。

じい——

「……………」

ここに住んでいるのではないかと突っ込まれそうなほど、入り浸っている龍は現在進行形で何かと戦っていた。

じい——

何かを感じるがとりあえず、無視してPCのキーボードを打つ。

じい——

(甲20号作戦まで時間がない上、さっさと開発概要をアイツに提示しないとまずいの……………)

全く手が進まない。

じい——

「……………」

作業が遅れていることの言い訳に使うつもりはないが……………。

「……………霞」

「——はい、何ですか?」

「何で俺のことをずっと見ているんだ?」

そう……。

霞はここ数日ずっと付きまとい、人のことを観察している。それ自体は一向に構わないのだが、流石に作業中に見られていると、気が散ってしまう。

「……………」

「霞、いつも言っているが、思っていることはちゃんと口で言うようにしろ」

「はい……………」

心得てくれたかどうか……………このやり取りも100回ぐらいやったような気がするが、一向に改善が見られない。

（ま、仕方ないと言えなくもないか……）

霞がここまで他者とのコミュニケーション能力に問題をきたしているのは、出生とここに来る前にいた環境が主な原因だ。

（オルタネイティヴ3の遺物……作り出された命……か）

霞はオルタネイティヴ3の計画の中で作り出された人工ESP発現体だ。ESPとは、リーディングやプロジェクト能力……分かりやすくいえば、ESPとは超能力の事を指し、霞はその力を人工的に持たされ、遺伝子レベルでメインキングされて生まれた存在だ。

この人工ESP発現体を大量に投入する事によってBETAの思考を読み取る……それがオルタネイティヴ3の概要だ。そして、前線に送り込まれた多くのESP能力者はそのまま帰らぬ者になった。

（生存したESP能力者の数は確か全体の6%……）

つまり、100人中6人しか生存できなかった計算になる。当時はまだ戦術機の技術・運用理論が成熟していなかったとはいえ、これだけの損害率を出している……そして、それだけの犠牲を払って分かった事は“BETAは人類を生命体と見ていない”ということだけ。

（捨て駒……この子はその事を理解していたのだろうか）

……恐らく理解していただろう。

霞は数少ないオルタネイティヴ3の生き残りであり、その中でも最も出来の良いたわれた第六世代の生き残りだ。彼女の能力なら、何もしなくとも周りの人間の思考を読み、逆に自分の思考を相手に投写する事も出来る。それが彼女にとっていいかどうかは別にして……。

人の心が見えてしまうのは決していい事ばかりではない。いや、寧ろ悪い事ばかりだ。人は大なり小なり負の感情を持っている。人は普段それを自分の内に隠している。だが、霞はそういった普通は見ることができない“本音”を……“人の醜い”所を見てしまう。

（それは霞にとってマイナスにしかない……）

だからこそ、龍は霞と一緒にいる時、霞に思考が読まれても大丈夫なようにいつも思考に気を配っていた。不要に醜い場面を思い返したら、霞に負担を与えてしまう可能性があるからだ。最もその思考すら、霞に読まれている可能性があるが……。

「龍さんは何でこんな事をしているんですか？」

霞が珍しく自分から口を開いた。

「何でも何も……クライアントの命令だからに決まっているだろう」

「——何故、自分の世界とは無関係なこの世界のためにこんな労をしているのか、私には分かりません」

「世界なんてどうでもいい。俺は傭兵だ。どんな戦場でも場所でも金さえ積まれれば、仕事をこなす………そういう存在だ。それに霞の疑問は無意味だぞ。俺には軍人のような大層な意思も義務感もない。あるのは生への執着心だけだ」

「——生への執着心？」

「戦場で生き残るには、何が何でも生き残るという生への貪欲さがある。ま、霞は一生知らなくていいことだ」

龍は霞の頭を撫でてやった。

「汚れ役をやるのは俺みたいな屑だけでいい。君やA-01の奴らのやる事じゃない」

「——龍さん？」

「夕呼の所にいつてくる」

ここは夕呼の執務室兼研究室。その中では、夕呼が龍の持ってきた書類に目を通していた。

「頼まれていたテストベッド機だが、まずは不知火《TYPE 94》を使おうと思う」

「不知火を？」

「ああ、不知火には拡張できる設計的余裕がないが、数少ない第三

世代戦術機な上、フレームがトップクラスの強度だ。こちら側の技術を無理矢理乗せても耐え切れるだけの剛性・適正がある。それに夕呼の顔があれば、もう一機ぐらい確保できるだろう?」

「私を顎に使うなんてアンタも偉くなつたものね」

「何だ、出来ないのか?」

「出来るわよ。馬鹿にしないでよ」

「なら、良かった」

間髪を入れずに龍が続ける。

「今は時間が惜しい、ここの兵器工廠と兵器開発部門を総動員、後A-01部隊から……そうだな、数十人、専属の整備兵を用意して欲しい。まずは新技術のノウハウをマスターしてもらわないと次が出来ないからな」

「次……?」

「不知火はあくまでテストベッド機だ。そこで培った技術を次の機体——量産化も視野に入れた改修機に導入する必要がある。で、ベースとなる機体に……」

「機体に……?」

ブラックウィドウ?

「YF-23を所望する」

「……」

「知らないはずはないだろう? 現在、米軍で配備が進んでいるFラフター

-22Aが試作機だった頃の競合機だぞ?」

「知っているわよ……」

「そうか、じゃあ頼む」

「頼むじゃないわよつ! 高性能機なら日本の新型機——TYP

E-00“武御雷”があるでしょう」

「駄目だ。アレにはACの技術を搭載できる適正がない」

「どうということ?」

「確かに武御雷のカタログスペックは既存の戦術機の中でもトップクラスだろう。だが、評価できるのはそれだけだ」

武御雷はその高い機体性能・格闘戦能力から“究極の近接戦戦術

機”とも称されているが、その反面、最悪ともいえる量産性・整備性の悪さ、そして莫大な生産・運用コストを生み出している一面もある。武御雷は帝国近衛軍に集中配備されているが、それでも現在の配備数は30機にも満たない。生産ラインをフルで動かしても年間に製造できるのは10機未満……そんな機体を次期主力機として配備している事実は十二分に龍を驚かしていた。

「その点、YF-23は米国特有の高い砲撃性能、そしてステルス性能、BETAの近接戦闘を考慮した高い近接戦闘性能……。その中でも一番評価に値するのは兵装積載量の高さだ」

「積載量？」

「YF-23は計四つの兵装を背部と肩部に搭載する事ができる。これだけの兵装を装備しながらでも三次元機動が出来るのは、恐らくこのYF-23だけだろう」

通常、戦術機は両手のマニピレーターに一つずつ、背部の稼働兵装担架システムに一つずつの計四つがレギュラーである。機体によつては肩にミサイルポッドやセンサーポッドを搭載している事もあるが、基本的のこの四つに兵装を装備する。だが、YF-23はさらに両肩後ろ側に稼働兵装担架システムを搭載しているので、計六つの兵装を搭載したまま、戦闘ができる。

補給が困難であり、物量戦・持久戦になる事が常のBETA戦に置いてこれだけの兵装を搭載できるのは、かなりの強みとなる。また、これだけの重量増加が起きても動作に何も影響が出ないYF-23の性能の高さも評価に値する。

武御雷同様、コストや整備性はすこぶる悪いが、武御雷よりも戦闘能力は高いと龍は見積もっている。

「ま、YF-23については、不知火の改修が済んでからになるだろうが」

「そうね、とりあえず、不知火のテストベッドの話は早速準備に掛かるわ。あなたにも必要があったら、声を掛けるから」

「了解した。で、次に甲20号作戦だが……」

龍は持ってきた書類を夕呼に手渡した。

「……………何よ、これ？」

「甲20号作戦でやつてもらいたいことだ」

龍が続けて言葉を繋げる。

「今回の甲20号目標攻略作戦は確実に成功させる必要がある。そうしないと、一年前のような日本本土への侵攻が始まる危険性が高い」

「どういうこと？」

「今までの戦訓からも、こちらの大攻勢によってBETAの侵攻が触発されている面がある。今回もそれが起きたら、日本海側の……九州戦線にBETAが侵攻する可能性が高い」

「確かにね……………」

「ま、これはあくまで過去の事例を統計的に見て弾き出した可能性の一つだ」

「でも、あなたと言うとおり、その可能性は高いわ。——でも、それとこの無茶苦茶な作戦に一体何の関係があるのっ!？」

夕呼が珍しく声を荒げる。

「増速ブースターを装備したヴィクターで戦闘空域に突入する？ そんな事出来るわけじゃないでしょうっ!！」

夕呼の言う無茶苦茶な作戦……………それは時代に逆行した本当に無茶苦茶な作戦だった。

「だが、不可能ではない」

龍が考え出した作戦。それらはネクストにだけ備わっている強襲用増設ブースター、ヴァンガード・オーバーボード・ブースターVOBによる戦闘空域への強行突入だった。だが、夕呼の言うとおり、この作戦に現実味が無い。

「レーザー光線属種の事を忘れたの？ 航空戦力がものを言う時代はもう終わったのよ」

「ああ、俺もレーザーに撃たれて死にたくはないさ……………」

この作戦で最もネガティブな要因、それはレーザー光線属種の存在だ。龍もこの存在のせいで随分と頭を悩ませた。

「だから、古典的で確実な方法をとる事にした」

龍はヴィクターによる戦域突入に合わせて、前線部隊による一斉砲撃、艦隊からの艦砲及びロケット弾による飽和砲撃、衛星軌道上からの軌道爆撃及び軌道降下兵団の集中運用で戦域中にいる光線属種の狙いを逸らす大規模な作戦を提案した。

「軌道爆撃と軌道降下兵団は多くの光線属種の照射を引き付ける事が出来る。そして、軌道投下のタイミングを調整すれば、間髪を入れずに大量の標的を地上に落とす事ができる」

「でも、それだけじゃあ……」

「だから、地上の機甲部隊はこのタイミングで一気に戦線を押し上げてもらう必要がある。そして、大攻勢の前後、艦隊からの支援砲撃も相当数撃ち込んでもらうことも重要だ。じゃないと前線の機甲部隊の損害率が跳ね上がる」

「弾薬が持たないわよ。BETA攻略戦時の砲弾消耗率をあなたは知っているの？」

「数値は一通り確認している。いいか、あくまでこの作戦はヴィクターを最前線の奥まで……ハイヴに近い門まで無傷で投入するための作戦だ。この作戦が成功した後は戦線を維持しつつ、可能な限り、BETAをハイヴから引きずり出してくれるだけでいい。後は俺一人でやる」

「どう言う事？」

「この突入作戦の成功後、ヴィクターはVOBをパージして単機で門に突入する。突入さえ出来れば、ハイヴの中……地下茎構造には光線属種はいない。今までの戦訓通りなら、ヴィクターのOBで内部を移動できる。最短ルートで地下茎構造を突破し、主広間の反応炉を破壊する。ヴィクターの火力なら、単機でも破壊できるはずだ」

「……」

「作戦の概要は以上だ」

龍の説明を聞き終えた夕呼は眉間を押さえて唸った。

「無茶苦茶よ。絶対に無理だわ」

作戦の概要を聞いても夕呼の考えに変化は無かった。

（当然といえば、当然か。30年間の光線属種^{レーザー}によって苦しめられてきたんだからな）

だが、だからといってこの作戦を却下されるわけには行かない。

こつちだつて命を掛けている。出来る手を全て打てなければ、その後^に待っているのは“死”だけだ。

（夕呼がこれを用意してくれれば……………）

「夕呼、これを見てくれないか？」

一枚の紙を手渡す。

「何よ、今更……………」

「向こうの世界で試作されていた弾頭の技術をフィードバックしたものだ。奴らにどこまで通用するかは分からないが……………」

「———対レーザー拡散弾頭弾？」

それは、龍の世界で運用されてた事がある特殊弾頭だった。

「正確には、空気中でレーザーの乱反射を繰り返し起こさせる事によって、目標への照射防止、減衰させるものだ。だが、これは生成の難しい化学物質を大量に消費する。重金属による環境汚染の心配こそないが、今すぐに用意できるものではない」

この特殊弾頭の特徴は龍も言った通り、環境への影響が小さい事、そして、主成分に重金属を使用していない事が特徴だ。

AL弾の原料は重金属……………つまり、鈴などのレアアース・レアメタルだ。だが、それらは産出地域の一つがユーラシアだったため、常に慢性的な不足状態にある。

しかし、BETAと戦うためにはAL弾による重金属雲がなくてはならない。光線属種^{レーザー}に対する有効的な対処方法がない以上、AL弾に頼らざるを得ないのが現状だ。

（しかし、幾ら不足しているからって海洋生物まで使って集めるのもな……………）

不足する重金属を確保するため、各国はユーラシア各地の河川や沿岸部に金属回収施設を設けている。また、生物濃縮によって海洋

生物が蓄えた重金属をも抽出・回収している。その時取れたタンパク源は合成食料に利用されているが……そこまでしても不足している分を回収できていないのが実状だ。

（本当に俺の世界とは違いすぎるな……）

龍のいた世界では、こういった資源は企業間で奪い合っていた。龍も経済戦争の尖兵としてカスタムACに乗り、いくつもの資源基地や採掘プラントを強襲したことがある。向こうの世界では、地上は只の資源を奪い合う舞台に過ぎず、龍もその中の駒でしかなかった。

「帝国をたきつければ、何とか用意できるかもしれないわ」

夕呼の顔色が変わる。

「乗る気になったか？」

「ええ、やってあげるわ。あなたの作戦なら、既存の部隊で十分対応できるし、軌道降下兵団オーバービット・ダイバースの投入が決定していたから問題ないでしょう。問題は突入作戦時のAL弾の確保ね」

「はやり、最初の軌道爆撃と飽和砲撃で殆ど使い切ってしまうか……」

……

「……いえ、そっちも何とかするわ。他に何かある？」

「そうだな……VOBを二機用意しておいて欲しい」

「二機？」

「只の保険だ。出来ないなら一機でいい」

「分かったわ。となると、問題は……」

「YF-23をどう確保するか？」

YF-23は米国の戦術機の中でもトップクラスの性能を有している。そのため、機密保持の関係上、米国がこちらに引き渡してくれるとは到底思えない。

「お困りのようですね」

「……っ!？」

龍は咄嗟に夕呼を背中隠しながら、服の中に隠し持っていたハンドガンを声のした方向へ向けた。

「おや、優秀なボディーガードを雇ったようですね、博士」

「鎧衣。今日来るなんて聞いていないけど？」

「夕呼、コイツは誰だ？」

「ああ、済まないね、自己紹介が遅れたかな？」

全く自分のペースを崩さないコートにパナマ帽子を被った男。龍は警戒心を解かず、銃口を受けたままにする。

「私は帝国情報省外務二課を任せられている鎧衣・左近（よこい さきみち）と言つ者だ。これから宜しく、草薙龍少佐」

「——何故、俺の名前を知っている？」

「それでも、情報省の人間なのでね。情報収集はお手のものなんだよ」

「鎧衣、私は入室の許可も、面会の約束も知らないんだけど……」

「いやあ、すいません、香月博士。至急知らせなければならぬ事があつたので、こうして出向いたんですよ。ああ、草薙君、そろそろ銃を下ろしてくれないかな？」

「……………」

銃を下ろしてホルスターに戻す。

（帝国情報省の人間か——このオヤジ……………できるな）

会話をしている間も警戒を解いた事はなかった。それなのに、鎧衣は龍の後を取っていた。もし、鎧衣に龍を殺す理由があつたら、既に龍は天に召されていたことだろう。帝国情報省所属と言つのは伊達ではないようだ。

「で、一体何よ、至急の知らせって？ こっちは忙しいんだから、くだらないことだったら怒るわよ」

「先日、この横浜基地を襲撃した不明機（アンノウン）についての情報を開示せよと、帝国から厳命が出されたのでその事を……………」

不明機……………。

（なるほど——ここは下手に出ない方が身のためだな。さて、夕呼はどうでるか……………）

「その事？ 私はちゃんと帝国側に情報を開示したはずだけど」

「どうやら、先方の方はそれでは納得しなかったようで……」

「面倒ね。こっちは甲二十号攻略作戦の準備で忙しいのに」

「甲二十号作戦についても帝国は難色を示しています。この極東国連軍横浜基地から案が出たと言うのも気に食わないようで……」

「作戦まで待つてもらえない……か」

「少なくともこの基地を襲撃した不明機とその衛士の情報について開示しないと帝国は素直に軍を出さないでしょう」

鎧衣の視線が一瞬龍に移った。

「作戦終了後じゃ駄目かしら？」

「この場では何とも……しかし、甲二十号作戦が成功すれば、帝国も米国もそう大きく出る事は出来ないでしょう」

話が見えてきた。

「米国は^{アメリカ}どう動いているんだ？」

「龍、黙っていて頂戴」

「ふむ、君には何か良い案でもあるのかい、草薙君？」

「質問の答えになっていないぞ」

「おや、そうだったかね？」

「さつさと答える。俺の右手が^{トリガー}引金を引く前にな」

龍は未だに銃から手を離していなかった。

「おお、くわばらくわばら……」

鎧衣はワザと大げさなリアクションを取った。

「米国は難色をつけていると言うよりもより安全で確実な作戦を押しているんですよ」

「G弾の投入か？」

「察しがいいですな」

「なら、そうさせてやればいい」

龍の発言に夕呼が驚きを示す。

「ちよつと何を考えているのよっ!？」

「作戦が失敗……もしくは作戦成功の見込みがないと判断した瞬間、連中に指揮を任せる。G弾だろうが、何だろうが好きに使わせれば

いい。ただし……………」

龍は口調を変えず続ける。

「甲二十号作戦が成功した暁には、YF-23を貰い受ける。これでどうだ？」

「ふむ、なるほど。第5計画の進展と第4計画の転覆のチャンスが巡ってくる……………」米にとつて悪い取引にはならないでしょうな」

「それに米と一枚岩じゃないだろう。幾らG弾狂信者の集まりだからって、全員が第5計画を押ししているわけじゃない。そこからメスを入れれば、不可能じゃない取引のはずだ」

「仮にそれで米を黙らせる事が出来たとして、帝国の方はどうするのかね？」

「ようは、作戦終了時まで連中の文句を黙らせるだけのネタと帝国軍を引きずり出すための口実を用意する必要があるってことだな？
なら、どうにでもなる」

「どうやって…………？」

「それは言えない。アンタは帝国側の人間だ。こっちの事を教える義理も道理もない」

「ははは、確かにそれはその通りですな」

「とにかく、帝国側には十分なネタを用意できる。後は米国を引きずり出すだけだ」

龍の視線が鎧衣から夕呼に移る。

「龍、作戦が失敗したら、どうする気？」

「そんなもん知らん。作戦が失敗するって事は俺は死ぬって事だ。その後、この世界がどうなるうが知った事か」

「もし、作戦が失敗したら、そのまま第5計画に移行になってしまいうリスクがあるわ」

「用は作戦が失敗しなければいいだけの事だろう。確かに分の悪い賭けではなるが…………その程度のリスクに構っていられる状況なのか、夕呼？」

「……………」

龍の問いかけに夕呼は苦虫を嚙んだ様な顔になる。

「俺の言いたい事はこれだけだ。後は夕呼のやる事だ」

（それにこれ以上この場においても邪魔にしなければならないしな）

Episode 6 (後書き)

思った以上に、長くなりそうだったので、少し変ですが、一旦ここで切ることにしました。

ご意見・ご感想がありましたら、ぜひ一言お願いします。

Episode 7

ここはPX……。

「本当にあの少佐、一体何を考えているのよっ!?」
「バンッ!!」

湯飲みが机を叩く。幸い中が空だったため、お茶は飛び散らなかった。

「水月落ち着いて……」

「遙はム力つかないのっ!? アイツは私達の事を侮辱したのよ!!」

「そ、それは………」

「それについては、私も同意見ね。美冴みさえはどう思う?」

A-01部隊の一人、栖川美鈴すがわ みすずは隣でお茶を飲んでいる同期の宗像に聞いた。

「さあ、どちらにしても私達が束になって掛かって草薙少佐を倒せなかった事実に変わりはないしな」

宗像の言葉を聞いて騒いでいた水月が押し黙る。他の者も苦虫を噛んだ様な顔をする。

「……………」

そんな中、一人だけ違う事を考えている者がいた。

(……少佐……)

風間禰子は湯飲みに映る自分の顔を見ながら、ここ数日ずっと抱えている疑問を考えていた。

思い返されるのは、先日……龍の正体があの不明機のパイロットであると分かったあの日の事だ。

龍とは一足先に会っていた風間。あの時はまだ龍が一体何者なのか知らなかった。しかし、あの一晚での出来事の事を考えると、どうしても龍が酷い人に思えなかった。

しかし、先日の速瀬に対する対応やその後のことを考えると、分

からなくなる。あの後、龍はA - 01部隊の面々の前でこう言った。

…

……

……

「お前らに現実を見せてやる。——全員、強化装備を着用しシミユレータ室に来い。相手をしてやる」

あの後、龍はA - 01部隊全員を相手に戦術機で勝負を言つて来た。

「1対7で？」

美冴が龍に確認を取る。

TYPE94

「ああ、そうだ。機体は全員不知火で構わない。装備も特に指定しない。各自のポジションで装備で構わない」

「少佐は？」

「同じ、不知火を使わせてもらう。その方が力量を測りやすいだろう？ 俺のも、自分のも……」

含みのある言い方だ。

「構わないだろう、夕呼？」

「ええ、いいわよ。私も伊隅たちがどこまであなたに太刀打ちできるのか、疑問だったし」

「決まりだな。俺は先に行っている」

龍がブリーフィングルームを後にする。

「——と言うわけだから、あんた達もボケツとしていないでさつさと用意しなさい」

「ふ、副指令！ これはどう言う事ですかつ！？」

「速瀬、何度も言わせないで頂戴。あんた達A - 01部隊はこれから龍に鍛えてもらうの。もし、その事が気に食わないのなら実力で龍を捻じ伏せるのね。ま、今のあなた達じゃ返り討ちだろうけど……」

……

「こ、この前は確かに遅れを取りましたけど……今度は……」

「ま、そう思いたいのなら、そう思っていないさい。社、行くわよ」

「はい……」

夕呼と社が龍に続いて出て行く。

「……………」

しかし、霞は扉の前で脚を止めた。

「……龍さんは皆さんが思っているような人ではありません」

「社ちゃん？」

「……………風間少尉、龍さんはとても“優しい人”です」

「えっ？」

一瞬、霞が言った言葉が理解できなかった。聞き返そうとしたが、霞はそれだけ言つと夕呼の後を追つて出て行つたのでタイミングを逃してしまった。

不満や不安を抱えながら、A - 01部隊の面々は強化装備を着用し、シミュレータ室に集まった。既にシミュレーションの準備はできていて、龍は一足先にシミュレータの中に潜っていた。

《全員、よく聞け》

ヘッドセットから伊隅の声が聞こえる。

《速瀬や宗像、風間は分かっていると思うが、先日のような無様な姿をまた晒すわけにはいかない。今回は相手も同じ機体。いくら、あの“奴”の腕が立つとしても数で勝る私たちが圧倒的に有利だ。だが、気を抜くことは一切許さん。“奴”に本当のA - 01部隊の実力を思い知らすぞっ！！》

《《了解っ！！》》

伊隅の発破に、中隊の全員が気合の入った返事をする。

そこに伊隅から風間機に戦術データリンクではなく、“無線”で通信が入った。

《風間》

「は、伊隅大尉」

《あの少佐と何があつたか知らないが、お前はA - 01部隊の一人

だ。分かっているな?》

「……………」

疑っている……いや、不振がっているといった方が正しいのかもしれない。

（当然…かな。知らなかったとはいえ、敵だった人と仲良くしていたのですから……）

龍と仲良くしていたとはいえ、それが手加減したり、引金トリガーを引くのを躊躇する理由にはならない。風間本人もそんな気はない。自分はA-01部隊の一人。その事に誇りも持っている。

「勿論です、大尉。A-01の……伊隅ヴァルキリーズの名に傷を付けるような真似はいたしません」

《よし。今度こそ、奴を墜とすぞっ!!》

「了解っ!!」

黒一色だったモニターが廃墟の風景を映し出す。網膜投影システムによってそれがよりリアルに感じられる。

《各機、全周警戒のまま、低速前進。奇襲が考えられる、注意しろ》
主脚歩行で前進。右手の突撃砲を、左手の追加装甲を構える。

《大尉、レーダーに機影がありません。相手は主機を切つてレーダーの陰に隠れている可能性があります》

《流行り奇襲か……各機、警戒しつつ、低速前進》

A-01部隊は周囲を警戒しながら廃墟を進む。風間も部隊の後方に続く。

「レーダーの反応がない……」

未だに龍の乗る不知火の反応を捕まえることができない。

（主機を切っていれば、確かに捕捉され難いけれど……この数で探してまだ見つからないなんて）

伊隅の読み通り奇襲が狙いなのか……。

（でも、少佐がこの展開を考慮していないはずがない）

午前中、龍の色々話して分かった事がある。彼は戦術機やBETAの知識をほとんど持っていなかったが、その代わりに数多くの実

戦経験を持っている。それは戦術機にも通じる機体の扱い方から歩兵での銃撃戦まで……まるで戦場のすべてを知っているかのようだった。

（少佐はいつたい何を考えて……）

思えば、この演習も変だ。“私たちに現実を見せる”とはいったい……。

《レーダーに影がありますっ！ ポイントB-42ですっ！！》

《各機、噴射跳躍で一気に距離を詰めるぞっ！！》

《《了解っ！！》》

跳躍ユニットのロケットモーターを点火。18mの巨体を上空へ押し上げる。

《っ！？ 速瀬、狙われているぞっ！！》

《えっ！？》

刹那、速瀬機の管制ユニットがある胸部が超音速の弾丸によって撃ち抜かれた。

（120mmの一離脱装弾筒付翼安定徹甲弾《APFSDS》っ！？）

貫通力に優れた120mm砲弾のAPFSDSは突撃級や要撃級の強固な装甲殻を貫通したい時に用いられる徹甲弾だ。破壊力こそないが、貫通力だけなら第三世代機の複合装甲をも簡単に貫くぐらいの威力がある。

《速瀬機、コックピットブロック被弾。致命的損傷により大破と認定》

コマンドポストの涼宮中尉が速瀬機の撃墜を知らせる。

《高度を取り過ぎだ。いい的だぞ？》

戦術データリンクを閉して龍の声が聞こえる。

《全機高度を落とすつつ、36mm弾斉射っ！！》

伊隅の指示で、6機が突撃砲を斉射する。先程の攻撃から逆算した発砲位置へ集中砲火を浴びせる。

《各機、逆噴射制動！ 着地後はエレメントで行動、“unkno

W1”を包囲するぞっ！！」

《《《了解！》》》

6機の不知火が跳躍^{ジャンプ}ユニットを噴かして着陸する。

《馬鹿どもが……1対複数で固まって行動するか》

次の瞬間、視界が真っ白に変わった。それだけでなく、戦術データリンクやレーダーも機能を死ぬ。

「センサーキラーっ!？」

大量の発煙弾によるジャムスモーク。対人戦——特に戦術機対策に用いられる装備の一つだ。

足下に隠されていた大量の発煙弾が起爆してA-01部隊のあらゆるセンサーを奪っていく。これでは光学センサーも当てにならない。

(まさか、最初から……!?)

最初のレーダーに映った影……。思えば、あそこから何かが変わった。少佐はこの手の戦闘は数多く経験している。下手に動けば、レーダーに影に映ってしまう事ぐらい分かっていたはずだ。

(ここに誘い込むための……!)

レーダーの影……速瀬機に対する攻撃……そして、このジャムスモーク。全て少佐の仕込んだ罠だったとしたら——!!

「奇襲時、相手の“目”を殺すのは有効的だ。そして、戦力的劣勢を崩すには“相手を動揺させること”が重要だ」

あの時の龍の言葉が蘇る。

「相手を動揺させる?」

「そうだな——俺がよくやるやり方だと……」

「伊隅大尉、狙われていますっ!!」

戦術データリンクが死んでいる状態では、無線でのやり取りしか出来ない。このようなジャミング下では明瞭な音質は愚か繋がるかどうか疑問だが、幸い隊長機である伊隅機は無線の出力が高い。何とか無線が繋がった。

《風間、どういふ……》

通信が途切れる。

「大尉っ！」

伊隅機の後には黒い影が見える。

《流石に風間は気づいたか………ま、もう遅いがな》

(少佐っ！)

スモークの間から伊隅機の首の付け根に65式近接戦闘短刀を突き立てているunknown——草薙龍機が立っていた。

風間や異変に気づいた栖川機・宗像機が銃口を向けるが、伊隅機が邪魔で発砲できない。その一瞬の躊躇を龍は逃さない。unknownが伊隅機を盾に、36mm弾を斉射。反応が遅れた栖川機がもろにそれを受ける。

《キャッ！？》

栖川機のマーカーが消える。これでA-01部隊の残存は4機。

風間・宗像・風間の同期である奉^{ほう}上^{じょう}院^{いん}・伽^か耶^やと夜^や神^{かみ}・麗^れ羅^{いら}だけだ。

《全機、短^{ショート}距離^{バックブースト}後退跳躍！！ スモークから出るぞっ！》

「了解っ！」《《了解っ！！》》

宗像の指示で全機、ロケットモーターを点火して急後退——着地と同時に全機36mm弾を斉射する。

スモークから出たおかげで、リーダーとデータリンクが回復。unknownはすでに伊隅機から離れ、廃墟を盾に突撃砲を構えていた。

《いつまでも同じ場所にいるはずがないだろう》

龍からの反撃。多目的追加装甲を持つている風間機と宗像機が前に出てそれを防ぐ。

《エレメントで行動し、unknownを包囲する。ヴァルキリー7、ついて来い！ ヴァルキリー5、ヴァルキリー6は右から回り込め！》

「了解っ！」《《了解っ！！》》

4機はエレメントを維持しながら、両翼に展開する。

「ヴァルキリー5、FOX3！」《ヴァルキリー6、FOX3！》

風間・夜神機が36mm弾を斉射。龍がそれを回避。そこに左翼から回り込んだ宗像・奉上院機が援護に入る。

先程とは打って変わって龍が防戦一方になる。単純に考えて戦力差は4倍、普通ならかなりの劣勢だ。だが、龍はそれ以上の状況でも3機の機体を撃破して見せた。

（少佐なら、まだ手を持つているはず……）

その読みは外れなかった。龍が一気に跳躍ユニットのロケットモーターを点火。通常の不知火では考えられないほどの急加速で宗像機に肉薄してきた。龍の不知火が盾を構える。次の瞬間、多目的追加装甲同士が衝突、火花を散らす。

《今だっ！！》

宗像の聲が跳ぶ。彼女は自分が龍を引きつけている間に攻撃しろといっているのだ。

《突っ込むわっ！ 禰子、伽耶、サポートしてっ！！》

74式近接戦闘長刀を構えた夜神機が突撃する。

《そろそろ、終わりにしようか》

リアクティブアーマー

龍の追加装甲に取り付けられた爆発反応装甲が起爆、宗像機の追加装甲に風穴をこじ開ける。続けざまに、体勢の崩れた宗像機に零距离でAPFSDSが撃ち込まれる。宗像機のマーカーで消える。

「美冴さんっ！！」

風間も夜神の援護で前に出る。

「伽耶、後退してっ！！ 狙われているわっ！！」

《は、はいっ！！》

風間は背中の突撃砲も合わせて36mmを乱射。龍の中尉を奉上院から逸らそうとする。

だが、龍はその攻撃を撃破した宗像機を盾にして防ぎ、ロケットモーターで急加速。追加装甲と突撃砲を投棄して長刀を装備。そのまま、後退中の奉上院機の胸部に必殺の斬撃を浴びせる。着地時の硬直で動けなかった奉上院機はそのまま上半身を切り落とされ、撃破された。

《このお——っ!!》

そこに夜神が切りかかる。龍は背部兵装担架ガンマウンに懸架された突撃砲を斉射。

《くっ!》

夜神はそれを回避。その隙に龍が体勢を立て直す。

「麗羅、サポートするわ! 切り込んでっ!!」

《分かったわっ!》

追加装甲を構え、突撃する風間。龍は背部の突撃砲を前に持つてきて、120mm弾を風間に打ち込んだ。弾丸が空中で大量の爆子をばら撒く。

「キャニスター弾っ!?!」

辺り一面が一齐に爆発する。それによって一時的に視界が奪われる。だが、風間は追加装甲を構え直し、そのまま突っ込んだ。爆煙の抜ける。そこでは龍に夜神機が切りかかっていた。

《いい太刀筋だ。だが——まだ青いな》

龍はいつの間にか拾い直していた追加装甲で長刀を受け流す。そして超近距離で爆発反応装甲を炸裂させた。夜神機の上半身が完全に吹き飛ぶ。

「っ!?!」

恐怖——戦慄にも似た感覚が風間を襲う。龍が跳躍ユニットジャンプの口ケットモーターを点火する。

「こ、来ないでっ!!」

36mm弾を斉射。だが、龍は跳躍ユニットジャンプの向きを無理矢理変えて強引な推力偏向を行う。

(嘘っ!?! あんな無茶な機動をやったら中の衛士は……!!!)
だが、龍はそのまま突っ込んでくる。

「んっ!?!」

恐怖で手元が震える。だが、衛士の誇りが彼女を動かす。

「これならっ!!」

120mm砲弾——APFSDSを撃つ。36mm弾とは比べ物

にならない初速を出す事ができるこれなら回避できないはずだ。案の定、APFSDSは龍の右肩アーマーと右主腕を吹き飛ばした。だが、それでも龍は止まらない。

次の瞬間……。

「きやつつっ！！！」

激突、風間は機体ごと地面に倒れこむ。

《ゲームセットだな》

その上に馬乗りなるunknown。A-01部隊と草薙龍の模擬戦の決着がついた瞬間だった。

「何で負けたか、分かるか？」

シミュレータから出てきた私達を待っていたのは、龍の失望した顔とこの問いかけだった。

「お前達是对人戦の経験が殆どない。それは仕方ない、ある程度はな。だが、この模擬戦に負けた最大の理由は他にある」

「………何でありますか？」

「——型に嵌った考え方」だ。お前達は決められた訓練を行い、型にはまった訓練しかしてこなかった。それ自体は決して悪くない。何事も基礎が大事だからな。だが、お前達はそこから新たな戦闘スタイルを見つけるわけでもなく、ただ、決まった形でしかやってこなかった。それが今回のような大敗を来たした“最大の原因”だ。だから、お前らは俺の変則的で型破りな戦法に全く対応できなかった。それだけじゃない。こんな攻撃はこないだろう……トラップなんてないだろう……そういった希望論……凝り固まった思考も“原因の一つ”だ。事実、警戒さえしていれば、あんな初歩的なトラップには引っ掛からなかったはずだ」

「……………」

それを聞いたA-01部隊の面々は何も言い返せなかった。龍の事を舐めていた事も油断していた事も自分達の中に少なからずあつ

たからだ。

「これはBETAにも言える事だ。奴らにも意思がある。思考できるって事は人間のように戦術・戦略を使ってくる可能性が十分ある。そして、そのような自体が起きた時、今のA-01部隊に対処できる能力はない——」

「……………」

「分かったのなら、これを期に考えを改めるんだな。本当にこの基地で最強の部隊を名乗るなら——戦場から生きて戻ってきたのなら——」

……………

……………

…

——A-01部隊はたった一機の不知火すら、撃破する事は出来なかった。それが事実だ。だが、あの一戦はA-01部隊に様々なものを投げかけた。

（あれから、日々の訓練がガラリと変わったなあ……………）

ハイヴ突入訓練などは最近全くやっていない。というか、龍が全面禁止した。

『高が一機の不知火も撃破できないで何がハイヴ突入だ。身の程を知れ』

この一言でA-01部隊の訓練は全て却下された。現在やっているのは訓練兵がやるような射撃訓練や基礎的な機動訓練。分隊・小队^{エレメント}での連携訓練などだ。他に龍はBETAの攻撃を回避し続ける回避訓練などもA-01部隊に課している。

速瀬は余程二回も負けたのが悔しいのか、最初は訓練に対して否定的な態度をとっていたが、龍の凶悪な殺気と拳骨^{ゲンコウ}一発により、現在は大人しく訓練に励んでいる（表面上は……………）。

だが、速瀬だけでなく、伊隅や栖川もこの訓練には否定的な意見を出している。“今更こんな基礎訓練をやっても……………”これが彼女らの意見だ。だが、今のところ、彼女らの要望が叶ったことはない。

だが、中には龍の真意を読み取って日々研鑽に励んでいる者もいたりする。

「ふう〜。毎日毎日、回避だけする訓練をしようのは疲れますね」

奉上院が机に突つ伏す。

「そう言わないの、伽耶。私は回避訓練、悪くないと思っているけど？」

その向かいで本を読んでいる夜神がそんな事を口にした。

「ふえ？ どうしてですか？」

「私、前衛突撃とか強襲突撃がポジションでしょ。だから、こいつた訓練って凄く実戦で役に立つのよ」

夜神は速瀬と同様、部隊では切り込み役を担当する前衛ポジションだ。速瀬ほど実戦経験を積んでいないので、まだまだ初心者に毛の生えた程度の腕前だが、それでもA-01部隊の中ではトップ3に入る近接戦闘スキルの持ち主だ。

そして、夜神はあの模擬戦の後、時間を見つけては龍の所に行き、近接戦闘と機動制御の指導を頼んでいる。

当人に訳を聞いてみると……

『少佐の近接戦闘術をマスターしたいのよ。“アレ”があれば、禱子や伽耶を守ることが出来る』

……そして、それを聞いた奉上院が……

『それじゃ、皆で草薙少佐に頼みに行きませんか？ 禱子さんがいれば、多分草薙少佐も了承してくれるような気がするんです』

……などと言いついてしまった。

その結果、現在では三人で龍の指導を受ける形になっている。龍も龍で特に嫌がる節も見せず、三人の指導をしてやっている。

「なるほど」。禱子はどう思いますか？」

「……………」

「——禱子？ どうしたの」

「禱子さん？」

夜神が読んでいる本を閉じて横にいる風間の頬を突つつく。

「ひゃっ!？」

風間が慌てて顔を上げる。

「珍しいわね、袴子がボーとするなんて」

「わ、私だつて考え事ぐらいますわ……」

「いったい誰の事を考えていたんですか？」

「えっ!？」

奉上院の問いに風間は一瞬焦った。

「——ふ〜ん……あの少佐の事でも考えていた？」

その動揺を見逃さなかった夜神が風間の思考を読む。

「——っ!!」

風間の顔が目に見えて赤くなる。

「やっぱりそうなんですネ! 袴子さん、少佐とはいったいどのような関係で？」

「既にやる事やったんじゃ……袴子の性格なら、それはないかな」
好き勝手に話を盛り上げる二人。夜神も奉上院も風間とは同期で、訓練生時代からの付き合いだ。そのため、お互いの考え方や思考は結構バレバレだったりする。

特に奉上院は天然なのか……感がいいのか……よく突拍子もない事を言ってくることもある。しかも性質が悪い事にその突拍子もない事は結構核心を突いていたりする事が多い。先程の事などがいい例だ。

さらに夜神も夜神で人の思考を読むのが上手い。ここに宗像が入ってきたら、もう歯止めが着かない。幸い、宗像は栖川と一緒に速瀬をやり玉にしているのでこちらに気づいていない。

「で、どうなの(ですか)?」

「うう……」

顔を赤くして黙り込む。普通に『少佐とは少し喋った程度の仲だ』と言えはいいのに、何故かその一言が出てこない。思い返してみれば、自分は一度も龍との関係を否定するような事を言っていない。

流石に恋人かと聞かれた時は否定したが、赤の他人かと聞かれたら、どう答えていいのかわからず、答えを濁した。

（私、少佐の事をどう思っているのかな……）

最初は好意を持っていたかもしれない。彼は自分のヴァイオリンの腕を褒め、“また聞きたい”と言ってくれた。だが、先日の模擬戦以降、自分の心が大きく揺らいでいる。まるで靄が掛かっているみたいに全く自分の気持ちが見えない。

（私は……）

「……………」

風間の様子を感じ取った二人が顔を合わせる。

「——何か悩み事があるなら、相談してよ」

「そうです。私達、一緒に頑張ってきた同期じゃないですか」

二人が風間の手を握る。

「——ありがとうございます」

大切な二人の親友の気遣いに感謝する風間。

「でも、少佐との仲はちゃんと教えてもらっわ」

「はいですっ！」

「えっ!？」

二人が風間の手をガッチリ掴む。

「「どうなの（ですか）!？」」

「うっ……」

どうやら、この話は二人が納得するまで続くようだ。

風間がやっと二人の追及から脱出した頃、PXに霞が現れた。どうやら、かなり重要な報告があるらしく、全員ブリーフィングルームに集まるようにと副指令から言われたそうだ。

ブリーフィングルームには既に副指令の夕呼、私兵の龍、そして基地司令官のラダビノツド司令がいた。

「全員揃ったな」

「ええ、さっさと始めましょう、龍」

「了解」

龍が前に出る。

「今日、集まってもらったのは、来月の頭に決定した大規模作戦とそれに伴って行われるA-01部隊の任務について説明するためだ」
大規模作戦……風間はそのフレーズに聞き覚えがあった。

「ま、詳しくは司令の話を聞いてくれ。ラダビノツド司令」
ラダビノツド司令が前に出る。

「本日未明、国連軍第11司令部及び、帝国軍参謀本部、統一中華戦線参謀本部より、“甲20号作戦”——『^{グングニール}神槍作戦』が発令された」

甲20号作戦っ!?

この場にいる全員に動揺が走った。そんな話、全く聞いていなかったからだ。

(あっ………)

『近い内に鉄原ハイヴを攻略目標とした大規模作戦が発動される』
前、確かに龍が話していた。

(本当だったなんて……)

「朝鮮半島の鉄原地域にあるBETAハイヴ“甲20号目標”制圧を目的とした極東国連軍及び、帝国軍、統一中華戦線による大規模合同作戦だ。尚、本作戦は気象状況に関係なく決行される。まず、本作戦の概略を説明する」

後のディスプレイが表示される。

「本作戦の第一目的は“甲20号目標”の無力化——第二に新型戦略級機動兵器及び、新兵器の実戦テスト——第三に敵施設の占領及び、可能な限りの情報収集である」

「“甲20号目標”は佐渡島の“甲21号目標”と並び、BETAの日本侵攻に於ける前進基地となっている。この“甲20号目標”の脅威を取り除く事により、樺太、日本、台湾、フィリピンからなる極東防衛ラインの戦略的安定を強固なものとすると同時に、後の大陸反攻のための強固な橋頭堡と前進基地を確保するものである」
「では、次に作戦の概要を説明する」

ディスプレイが朝鮮半島の地図を表示する。

「ハイヴ攻略のセオリーに従い、作戦の第一段階では、国連宇宙総軍の装甲駆逐艦隊による機動爆撃が行われる。衛星軌道上からハイヴ周辺地域に極超音速のAL弾の雨を降らすのだ」

「機動爆撃と連動し、京畿湾沖に展開した統一中華戦線第3、4艦隊及び、アイオワ・ニュージャージー・イリノイの3隻を旗艦とした国連太平洋艦隊第1戦隊、帝国連合艦隊第3戦隊が艦砲及び、ロケット弾による超長距離飽和砲撃を開始。この攻撃も軌道爆撃同様、AL弾によるものだ」

「敵の2次迎撃による重金属雲の発生を合図に、全艦多目的運搬砲弾に切り替え、長距離砲撃による面制圧を行う」

「凄い規模の作戦だ。この作戦に投入される戦力もさることながら、使用される砲弾数も桁違いだ。」

「ここで作戦は第2段階へ移行する。統一中華戦線第3艦隊及び、国連太平洋艦隊第1戦隊が京畿湾に突入。仁川周辺を面制圧。続いてインベリアル・マリン日本帝国海軍海兵隊及び、国連太平洋艦隊第1海兵隊からなる『ステイングレイ大隊』が仁川周辺に強行上陸、橋頭堡を確保」

「続いて、統一中華戦線機甲2個師団及び、戦術機甲10個連隊からなる『シェンロン部隊』を順次揚陸。戦線を構築後、後続の帝国軍第4機甲戦術機大隊及び、国連軍4個連隊からなる『ティルヴィング部隊』を順次揚陸。戦線を維持しつつ、シェンロン部隊は東進、旧ソウル地帯を確保。ティルヴィング部隊は北進し、鉄原ハイヴから来るであろうBETAの増援の迎撃に向う」

「BETAの第3波増援を確認し、敵を仁川周辺に引き付けた後、作戦は第3段階に移行する」

「画面が切り替わり、朝鮮半島の東側と鉄原ハイヴ周辺の拡大画像が出る。」

「朝鮮半島の東側に展開したミズーリ・ケンタッキー2隻を旗艦とした国連太平洋艦隊第2戦隊と帝国連合艦隊第4戦隊が湾岸部に制圧砲撃を開始。同時に帝国海軍第4機甲戦術機大隊及び、国連軍戦

術機甲4個連隊からなる『ダインスレイヴ部隊』が沿岸部を確保。
光線級の最優先で排除する」

「ダインスレイヴ部隊はそのまま、内陸に進軍。旧金剛山跡を確保する」
クムガン

「旧金剛山跡を制圧後、作戦は第4段階に移行する」

「爆撃を終え、衛星軌道上を周回中の国連宇宙総軍艦隊より再度、軌道爆撃を開始。同時に第6軌道降下兵団が再突入を開始する。また、軌道爆撃と連動し、帝国艦隊第4戦隊の多目的大型輸送艦『浦賀』から新型戦略級機動兵器が出撃する」

「司令、そこからは俺がする」

「うむ」

ラダビノツド司令の代わりに龍が前に立つ。

「第4段階の説明をする前に新型戦略級機動兵器の説明をする」
ディスプレイに機体の画像が映し出される。

「戦略級人型機動兵器“アーマードコア・ネクスト”——『空の覇者』^{クタイ}。A-01部隊の面々はもう知っているな。これが今作戦で投入される新兵器って訳だ。細かい説明は省くが、コイツが本作戦の“要”である事は理解して置いて欲しい」

アーマードコア・ネクスト……。

（それがあの機動兵器の名前……）

戦略級人型機動兵器と言っていたが、確かにアレは戦略級の兵器だろう。一度ネクストとやりあった風間にはその性能の異常さが骨の髄までよく沁みていた。

「今回、ヴィクターは新型の強襲用増速ブースター^{ヴァンガード・オーバード・ブーリスト}『VOB』を装備し、『浦賀』から出撃。超音速水平飛行でBETA支配空域に強行突入。限界までハイヴに接近後、VOBをパージ、最寄の門^{ゲート}から地下茎構造物に突入する」

「えっ!?!」

「私語は慎め——また、この強行突入は第2軌道爆撃と第6軌道^{オービット}降下兵団の再突入、全艦からの長距離艦砲射撃と同時に行われる。」

オービット・ダイバース

その後、第6軌道降下兵団とは別に、最短ルートで反応炉を目指し、これを破壊する」

「反応炉破壊後、東側に展開しているダインスレイヴ部隊はそのまま、西進しハイヴ内に突入。地下^{スタフ}茎構造物内の残敵掃討及び、第6機動降下兵団の補給・支援に当たる。西側のシェンロン・テイルヴィング両部隊も最低限の補給を済ませ、日本海側に撤退するBETAの追撃戦に入る」

グングニール

「神槍作戦の概要は以上だ。続いて九州でのBETA上陸阻止作戦の説明に入る」

Episode 7（後書き）

1万字になったので切る事にしました。

作戦の概要……ゲームの甲21号作戦を基に書いたので、知っている人は少し違和感を感じるかもです。

神槍作戦には、遅くても次の次には入るつもりです。

ご意見・ご感想がありましたら、ぜひお願いします。

Episode 8

「続いて、九州でのBETA上陸阻止作戦の説明に入る」

画面が切り替わり、九州沿岸部の陣営が映し出される。

「知つての通り、九州戦線は鉄原ハイヴや内陸の重慶ハイヴからの定期的な侵攻を受けている地域だ。今回、鉄原ハイヴの反応炉を破壊した場合、かなりのBETAが日本海を渡海して九州に上陸する事が考えられる」

「少佐、少し待ってください。何故、九州戦線なんですか？ BETAの習性から考えてBETAが撤退するのは重慶ハイヴと佐渡島ハイヴじゃないんですか？」

「九州で上陸してから陸路で“横浜ハイヴ”を目指した方が進行速度が速いからだ」

「“えっ！？”」

一瞬、龍が言った事を理解できなかった。

「ちよつと待ちなさいっ！ 龍っ！？」

「草薙少佐っ！」

「この横浜ハイヴの反応炉は今の生きている。BETAにとって“横浜”はまだハイヴなんだ」

夕呼とラダビノッド司令の静止も聞かずに、龍はこの基地の底に隠されていた存在を暴露した。

「ちよつと何のつもりよっ！ 反応炉の事は機密事項なのよっ！！」
夕呼が龍の襟をつかみあげる。

「そんな事は知っている。だが、この事を話さずに彼女達が納得して任務に就けるとも思えない」

「傭兵の尺図で話しているんじゃないわよっ！ ここは“軍隊”よ。命令さえ掛かれば、どんな任務でもこなすよ」

「だが、疑問は残る。そういった不安要素は戦場で隙を作る事になる。そんなくだらない事で優秀な衛士を殺すつもりはない」

「……っ」

龍は夕呼の手を払いのけるとラダビノッド司令に向き直った。

「アンタも言いたい事がありそうだな。司令殿」

「………何が狙いだ？」

「何も………俺は俺なりのやり方を通していただけだ」

「………」

「あんたも元衛士なら分かるだろう？ 実戦では一瞬の判断の迷いが生死を分ける」

「………君の好きなようにしたまえ」

「そうさせてもらう——話が逸れたな、続いて作戦概要の説明に入る」

龍はそのまま話を続けるが、ヴァルキリーズの耳には全く届いていなかった。

（何でハイヴが………まだ……）

一年前、多くの犠牲を出して取り戻したはずのこの“横浜”が今だハイヴとして機能しているとは……。

（そんなどうして……）

一武官こときでは知ることができないような機密事項であることは先ほどのラダビノッド指令と夕呼の態度から察しがつく。しかし、何故反応炉のような危険物を放置したままにしているのか……。BETAの帰巢本能は分かっているはずである。それを稼動状態のままにしているというのは自分達からBETAを呼んでいる事に等しい。

「先程言った通り、この横浜ハイヴは今だ稼働中だ。そのため、鉄原ハイヴとその周辺のBETAが相当数横浜^{（横浜）}を目指して九州に上陸する可能性が高い」

「現在、帝国海軍を主力に日本海海底の機雷群設置作業が急ピッチで進められている。また、沿岸部でも地雷の敷設作業が進行中だ。だが、これらはBETAの進攻と僅かに遅らせるほどの効果しか望めないだろう。鉄原ハイヴのBETA個体数は約10万。これは帝

国参謀本部が算出したものだが、かなり楽観的な数値と理解しておけ。過去の事例を垣間見ても、ハイヴとその周辺のBETA個体数は人類側の予想を遥かに上回っている事が多い。進攻してくるBETAの数は少なく見積もっても1万——つまり師団クラスだ……だが、海底に展開しているBETAも進攻してきたら、その数は数万強——軍団クラスになるかもしれない。その事を念頭に置いた上で、作戦に当たって欲しい。続いてA-01部隊の任務について説明する」

「今回、A-01部隊は九州戦線にて日本帝国軍と共闘し、BETA進攻の阻止作戦に参加してもらう。指揮系統こそ独立しているが、基本は現地の司令部の指揮に従ってもらう事になる。だが、緊急時には、個々の判断による的確な行動を期待する——ま、色々御託を並べているが、用は上陸してきたBETAども皆殺しにすればいい、子供でも出来る仕事だ。死なない程度に頑張ってくれ」

スクリーンの電源が落ちる。

「詳しいミッションスケジュールは追って連絡する。夕呼、他に連絡事項はないな？」

「——ええ、ないわ」

「——以上で、ブリーフィングを終了する」

不機嫌そうな夕呼と無表情なラダビノッド司令がブリーフィングルームを出て行く。

「——霞、俺の部屋から“例の物”を取ってきてくれるか？」

「——はい、分かりました」

「A-01部隊の全員は格納庫ハンガーに集合しろ。今作戦の補足説明を幾つかしておきたい」

それだけ言うと、龍は霞を連れてブリーフィングルームを出て行った。

「もおおおおお——っ！！——一体何なのよ、あの少佐はっ！！」
龍が出て行った瞬間、速瀬の怒りが爆発した。

「何が神槍作戦よっ、何が阻止作戦よっ！！——ふざけているのっ！」

？」

「ご乱心中の速瀬。こうなってはもう誰にも止められない。」

「禱子、伽耶、格納庫^{ハンガー}に行きましょう」

「はい」

「え、ええ……」

「大尉、私達は先に行きます」

「お、おい、夜神っ！」

伊隅が何か言う前に夜神は風間と奉上院を連れて外に出た。

「い、いいのかしら……私達だけ」

「少佐に来てって言われているんだから、問題ないでしょう」

伊隅の言葉など聞きもしないで、夜神はさっさと格納庫^{ハンガー}に向った。

「……………」

その態度に風間は少し驚いていた。

夜神はA - 01部隊の先任たちに対して敬意を持って接していた。だが、ここ最近の夜神の様子を見ると“伊隅<龍”の状態になっている気がする。夜神が龍の戦闘スキルに惚れ込んでいるのは十二分に分かっているつもりが、どうも最近先任たちの事を蔑ろにしている気がする。

「ほほ、麗羅さんは少佐に“ぞっこん”ですね」

「えっ!？」

ぞっこん!!

その言葉を聞いた瞬間、風間の心が大きく波打った。

（えっ? どうして私……）

こんなに動揺しているの?

「どうしたんですか、禱子さん? 麗羅さんが少佐と仲良くするのに何か問題でも?」

「ええっ!？」

そこに思わぬ追撃。流石は天然お嬢様、言う事が唐突過ぎて対処の仕様がなない。

「伽耶。そんな分かり切った事を聞いちゃ駄目でしょう。私は少佐

に“ぞつこん”じゃなくて、“尊敬”しているだけよ。それに“ぞつこん”なのは“袴子”だし、私の付け入る隙なんてないわよ」

「えっ！？ わ、私！？」

「ああ、そうなのですか？ お幸せに袴子さん♪」

夜神に続いて天然嬢の必殺撃が入る。

「え……え……え……あ……っ……う……う……」

これが止めとなった……。風間は顔を真っ赤にして口をパクパクさせる。

「はいはい、思考固めていないでさっさと行くわよ。伽耶、引きずってでも行くわよ」

「はいです！」

固まってしまった風間は両側から夜神と奉上院に運ばれていった。

その頃、龍は一足先にA-01部隊の占有格納庫に来ていた。

「“例のデカ物”は用意できたか？」

「用意できたはできましたけど、試射も済んでいない試作品をいきなり実戦に出すというのは……」

歯切れの悪い返しをするA-01部隊の整備班長。

「試射はする。ただ実戦テストが思いのほか早くやってくるだけだ」

「実戦でトラブルがあったら、死ぬのは彼女らですよっ！」

不満を爆発させる整備班長。

「殺す気はないんだがな……」

（ま、この程度で死ぬような奴はご退場してもらうつもりだが……）

後半は口に出さず、龍は補足した。

「17式砲と88式刀は最終的に彼女らの判断で搭載するかどうか決めてもらうつもりだ。今、心配することじゃない。整備長がやれる事は17式砲と88式刀の調整を完璧にしておくことだけだ」

「——了解しました」

「無理を言っているのは重々承知しているが、こっちも時間がない

んだ。無茶を言った副指令殿には俺から釘を打っておくから、そっちも頼むぞ？」

「はっ、了解しました」

整備長が敬礼をする。龍も慣れない敬礼で返す。

「ふう……」

傭兵である自分にはどうも馴染めない空気だ。

周りを見渡せば、全身に汗をかきながら機体整備をしている整備兵たちが目に入ってくる。彼の殆どは己の信念に基づいて軍隊に入っている。やれ国を守りたいなの、やれBETAを打ち滅ぼすなど……人によつてその考え方は千差万別だが、何かしらのより所を持つていることに違いはない。

（傭兵である俺には理解できない境地だな）

信念や思いなどを大切にすることに何の意味がある？

それが戦場で己を守ってくれた事があるのか？

少なくとも龍にはそんな事一度もなかった。戦場では誰も助けてくれない。自分が死ぬかどうかを決めるのは他ならぬ自分であり、生き残るために必要なのは優れた操縦技術と戦場で培ってきた“勘”だけだ。

「“違う世界”か……どうも馴染めないな」

コンテナに腰を下ろして小休止を入れる。まだ、ヴァルキリーズは一人も来ていない。丁度いいので、彼女らが来るまで間仮眠を取る事にした。ここ一週間、作戦の準備や新兵装の調整、霞の手助けを得て秘密裏に用意した“秘密兵器”等のせいで、睡眠時間は毎日2時間以下だ。

職業上、徹夜等には慣れているが、事務や機械弄りでこれだけ時間を取られると言うのは初めてだった。事務方の仕事など数えるほどしかやった事がなかったし、機械弄りも自身の機体を整備するだけで現在推し進めている“大掛かりなもの”等の経験も無かった。

結果、龍の疲労は蓄積と圧縮を繰り返し、さらなる上位の未知なる“何か”に昇華されかけている。流石に我慢の限界だ。今、この

時眠っても誰も文句は言わないだろう。言われないほど働いたと自分も思っている。

いつも着けている眼帯を外す。別につけていてもいいのだが、眼帯を着けていると目の周りが蒸せる。目を閉じ、意識を半分手放す。

寝ると言っても職業から完全に寝る事はしない。有事の際にはすぐに動けるよう僅かに意識を残しておく。

だが、龍の安眠は意外と早く邪魔される事になる。

「少佐、遅くなりました」

目を開けると、ヴァルキリーズの新任ズ、風間・夜神・奉上院の三人が立っていた。

（たく……早く来るか、とことん遅れるかのどちらかにしろよな……）

意識を引き上げてコンテナに預けていた体を起こす。髪の毛をかき上げ、後で縛る。

「ん？」

新任ズの顔が少し赤くなっている。

「——どうした、お前ら？」

「い、いえっ！」

「な。何でもないですっ！」

風間と袴子が慌てて誤魔化す。が、その顔はどう見ても赤みがかっている。

「少佐つてやつぱりカッコイイですね。さっきの仕草、ちょこっと色っぽかったですし」

だが、二人の誤魔化しも後ろに控えていたお嬢様（天然）によって意味を無くす。

「色っぽい、この俺が？」

「いつも眼帯をしてらっしゃいますし、素顔をちゃんと見たのは今回が初めてで……」

確かに龍は人前で眼帯を外した事はない。右目を晒したら、今こ

うやって普通に接してくれている彼女らでも同情や哀れみ、嫌悪感を抱いた目で自分を見るのが目に見えているからだ。

「あれ……？ 少佐、その眼帯は目を保護するためのものではないのですか？」

「ああ、これは……」

「右目を負傷しているわけではないのですか？」

「右目は負傷していない……この眼帯は別のために使っている」

「別のため、ですか？」

「詮索はそれぐらいにしろ、夜神……好奇心は猫をも殺すぞ？」

「は、失礼しました」

「他のメンバーはどうした？」

「まだ、ブリーフィングルームにいるかと……皆さん色々思うところがあるらしくって」

風間が何か堪えるような顔をする。

「——風間も何か言いたげなようだな？」

「いえ、私は……」

「言いたい事があるなら、はっきり言え。事次第によっては“可能な範囲”で要求には答えてもいい」

「うう……」

縮こまる禰子。

「少佐、禰子さんは少佐との仲で悩んでいらっしゃるんです」

「仲……？」

「か、伽耶っ!？」

「用は少佐と密な関係になりたいんですよ、禰子は……」

「麗羅っ!! 何を言っているのっ?!」

禰子は顔を真っ赤にして二人の言葉を否定した。恥かしさもあるだろうが、それにしても動揺しすぎているようにも見える。

（仲ね——確かに彼女とは一足先に会っているが……）

そのせいで彼女が変に自分の事を意識して悩んでいるのは何となく感じていた。

「……………そんなくならない事に気を使っている暇があるなら、少しは訓練に時間を割くんだな。戦場で死なれるとこつちが迷惑だ」

「袴子の表情が固まる。それだけでなく、麗羅が非難するような……奉上院が悲しそうな顔をする。」

（そう……これでいい。元々傭兵である俺が好かれる理由なんてない）

それにいつまでもそんな事に気を使っているのは彼女らの命に関わる。例え、恨みを買おうと憎まれようともこうする方が彼女らのためになる。

（俺も甘くなつたものだ……）

こちらの世界に来てからと言うものの、どうも弛んでいる。普通なら他人に対してここまで干渉したりはしない。

（セレン……お前からみて今の俺をどう見える？）

この世界にはいない唯一の戦友に思いを馳せる。

（……………意味のない問いかけ……か）

「——今のお前達では戦場で死ぬのは自明の理だ。死にたくなければ、今出来る事をしっかりとやり切っておくんだな。後悔は後にして、意味がないぞ」

さらに一言、拒絶の意を含ませながら彼女らに釘を刺しておく。これでくだらない事に気を使う事もないだろう。

「——龍さん」

タイミングがいいのか悪いのか、丁度霞がやって来た。

「ああ、ご苦労さん、霞」

霞が持ってきたボックスを受け取る。後は伊隅たちが来るのを待つだけだ。

「——やっと来たか」

伊隅たちがやってくる。これでやっと話を進められる。

コンテナに腰を下ろすと、龍はヴァルキリーズの戦女神達と対峙した。

「さて、面子が揃ったところで、BETA九州上陸阻止作戦の補足

を幾つかする。まずはこの書類に目を通して欲しい」

彼女らが資料に目を通したところで龍は口を開いた。

「それは現状で分かっている九州戦線に配備される帝国軍の配置データだ。そして、残りの資料はBETAの進攻予想データとそこから弾き出した九州の結末だ」

「――何が言いたいのですか？」

伊隅が龍を睨みつける。だが、龍は全く揺るがない。

「現状の部隊……いや、配備とBETA戦略では再び日本侵攻を許してしまうと言うことだ」

「……っ?!」

ヴァルキリーズに動揺が走る。

「今作戦で帝国軍は主力である帝国海軍第1、2艦隊は全て九州配備が決まっている。それだけでなく、クングニール神槍作戦へ投入するはずだった部隊すら削って九州に配備している。夕呼の話だと帝国は自軍だけで国を守りたいらしい」

「……」

「だが、それは自殺故意だ。帝国は進攻してくるBETAが今までよりも少し多い程度という……楽観的な見方をしているが。その先に待っているのは防衛部隊の壊滅と一年前の悲劇の再現だ」

「しかし、それは今までの進攻データを基に……」

「BETAの行動を、人間様の尺図で図る事なんて出来るのか？」

「そ……それは……」

押し黙る伊隅。他の者を同様だ。反論できるものなどない。

「俺は今回、A-01部隊の九州派遣に反対のつもりでいる」

「……っ?!」

「ど、と言う事ですか?!」

「むざむざ負ける事が見えている戦場に衛士を死なせに行かすつもりはない。それだけだ」

「しかし、それでは……っ!」

「俺はお前達の上官だ。異議は認めない――」

たとえば、彼女らが納得してなくとも龍はA - 01部隊の——ヴァルキリーズの上官であり、階級がものを言う軍隊内では上官に対して異議を申し立てるなど不可能である。

（しかし、こうまで反発するとは……………）

不確かなデータである事は認めるが、それでも可能性としては帝国が掲示したものより確実に高い予想データのはずだ。それを見ても彼女達は戦場に赴こうとしている。“傭兵”である自分には到底理解できないことだ。

（軍属だから……………いや、違うな）

彼女達が戦う理由はそんな安っぽいものではない。

「——だが、お前達の考えは理解しておきたい」

「えっ？」

「お前達は今回の大規模作戦についてどう思っている？」

龍の問いかけに彼女らは目を丸くした。

（ま、無理のないか……………）

階級と実力に託^{かか}けて彼女達のプライドを傷つけた。彼女達の話に耳を傾ける事もしなかった。だが、ここに来てそれをする……………彼女らには理解しがたいことだろう。

「負ける事が明白な戦場に何故行こうとする？ 無駄に命を散らすだけだぞ」

「それでも行かなければ、国を守る事は出来ません」

はつきりとした口調で伊隅がそう答える。

「全員、同意見か？」

無言で首を縦に振る。

（お国か……………理解に苦しむな）

龍にとって守るべきものは己自身だけだ。セレンと組んでいた時もその原則に変わりはなかった。

（己の信念……………そして矜持……………そのためには命すら掛けるか）
「もう一度確認する、生きて帰れる保証は何処にもないぞ？」

「この部隊に配属されている時に覚悟はついています。他の者も…

……」

彼女達、戦女神の瞳に揺るぎは見えない。

（——強いな）

「——どうやら俺はお前らの事を過小評価していたようだ、許せ」

彼女たちの覚悟は確かなものだった……それが確認できただけで十分だ。

「作戦には予定通り参戦する。だが、作戦に関して幾つかオーダーを付けさせてもらおう」

「オーダーでありますか？」

「ま、見れば分かるさ。付いて来い」

ハンガー格納庫の奥に移動すると、ガントリーに固定された巨大な砲身が鎮座していた。

「これはっ?!」

「うわあゝ凄いですね」

「これは……戦術機の新しい兵装？」

ヴァルキリーズが各々驚きの声を上げる。

「手前のデカブツが17式試製中隊支援火器——57mm4連装機関砲一門と120mm多目的滑空砲を複合した——ま、大型重機関砲つてところだ」

龍が得意げに説明を始める。

「背部の専用兵装担架ガンラックの右肩にこのデカブツを、左肩に専用大型弾倉を搭載する。常時給弾ベルトで57mmがローリングされる構造を採用、砲身の専用大型強制冷却装置ラジエーターによって連続砲撃が可能だ。また120mmも下方の専用ドラム弾倉マガジンからローリングされる構造で、さらに予備の小型弾倉マガジンを搭載する事ができる」

「まあ、見ての通り色々詰め込みすぎたせいでこんな“デカブツ”になった上に総重量は……みれば分かるな。不知火の積載超過ギリギリのラインだ。だから、不知火の高い格闘機動はトレードオフ、機動力にもかなりの制限となっている——以上、解説終わり」

「で、続いて……」

奥に脚を進める。そこには、戦術機の近接戦闘兵装の一つ長刀が並んでいた。だが、それらは見慣れた74式刀とは少しフォルムが違う。

「88式試製近接戦闘高周波長刀^{ブレド}。分子結合強化が施されたアドバンスドハイパーカーボン製の刀身に高周波機能を付加した最新近接戦闘兵装だ」

「す、すごい——っ!!」

「はあ〜」

速瀬が興奮した声をあげ、夜神が感嘆した溜め息をつく。

「デメリットも大きい新兵装だが、性能は保証しよう——」

（——テストはまだただけだな）

勿論後半は心の中で……だ。

「——急造仕様な上、テストも一切まだやっていないので信頼性に難あります」

「「えっ?!」」

「……霞……」

龍が頭を抱える。

「少佐、どう言う事ですか?」

「テストも済ませていない兵器を私達に押し付けるつもりですか?」

「少佐、色々吐いてくれますよね?」

「……」

「全員落ち着け、弁解をする時間もくれないのか?」

詰め寄ってくる速瀬や栖川を止める。

「霞の言うとおり、こいつらのテストはまだだ。だから、A-01部隊には17式砲と88式刀の性能テストと実戦テストをやってもらいたい」

「実戦テスト?」

「そうだ、それが一つ目のオーダーだ。で、もう一つオーダー……
…というか、テストしてもらいたいものがある」

龍は霞が持ってきたメタルボックスの封を破り、中から一枚のH
Dを取り出した。

「正直なところ機体制御だけでなく、ソフトウェアを全面改修したか
つたんだが……」

「少佐、それは？」

「新しい戦術機の機体制御システムだ。手直しは済んでいるが、何
分機動データ不足でな。思っていたほどの機動は望めなかった。ま、
それでも風間たちが手伝ってくれたおかげで随分とマシなものに仕
上がっているが……」

「……えっ？」

「お前たちがせっせと訓練をしていた不知火のOSは通常のものじ
ゃない、こいつの試作品だ」

「えっ?!」

「おいおいまさか本当に気づいていなかったのか？ 俺はお前達に
機動制御のやり方を教えた時に今までのOSでは到底出来なかった
新しい方法を言ったはずだぞ」

呆れながらも龍は伊隅たちへの説明の意も込めて再度説明を始め
た。

「お前達は今日まで回避訓練をしてきているから分かるだろうが、
現在のOSでは機体制御の節々で衛士のコントロールを離れた制御
が起きる事がある。跳躍直後、衝撃緩和のためのカウンターモーシ
ョンやコマンド入力時のタイムラグ……等といったものだ。高度な
戦闘時、これらの制御外モーシジョンは死に直結する。それを解決……
いや、緩和したのがこのOSだ」

「旧OSとの最大の違いは……任意での発動中モーシジョン・コマ
ンドの中止・変更が出来る点だ。だが、これは機体制御システムが
担当する機動制御を全て自分でやると言うことだ。跳躍直後の衝撃
緩和も、カウンターモーシジョンの緩和も全て自分のコントロールで
だ」

「……」

優秀な衛士である彼女達はすぐに龍が言いたい事を読み取る。

「今のこのOS」では並みの衛士が使っても大した戦力UPには繋がらないだろう。いや、寧ろ軒並み落ちるだろう。今まで“代行”していた機動制御や射撃制御の一部を自身で制御するのは実戦経験と操縦技術に乏しい衛士には少し荷が勝ち過ぎている——だが」
龍が強い口調で続ける。

「それはあくまで実力のない衛士での話だ。老衛士や高い操縦技術を持った衛士なら——このOSは必ず役に立つ。そして十分な機動データと時間さえあれば、このOSは全ての衛士にとって“救世主”になれるだけの力がある。だからこそ、俺はA-01部隊にこれを任せたい」

「だが、使用の強制はしない。この判断で武装・OSの使用は決めて欲しい。どこまで行こうとこいつらは試作品であり、実戦での信頼度は低い。その事を踏まえた上で使用を決めてくれ、今……」
「今……ですか？」

「悪いが、作戦まで時間がない。今日から新型の試射テストとOSのテスト、それに合わせた編成と戦術の調整……時間的にギリギリだ——全員が新型を使用し、俺の指示通りに動いてくれば、もう少しゆとりはあるがな」

含みのある笑みを浮かべる龍。一応選択の余地は残しているが、こちらの意図する方向以外に進んだら後は知らないぞ——と遠回しに脅している事は大差ない。

「使わせてください、少佐」

夜神が一步前に出る。

「いいのか、伊隅はまだ何も言っていないが？」

「少佐は個々の判断に委ねると言いました。なら、私が新型を使っても問題はありません」

「まあ、そうだな——書類上とはいえ、俺はA-01部隊の上官だからな。で、何を使うんだ？」

「新型のOSと88式長刀を使わせてください」

「なら、私もっ！」

夜神に続き、奉上院まで前に出る。

「私もOSと17式砲を使わせてください」

龍はメタルボックスから二枚ディスクを抜き取った。

「アップロードは各自でやってくれ、すでに整備班の連中には声を掛けてある」

「さて、他にはいないのか？」

顔を合わせるヴァルキリーズ。暫しの思案の後、残りのメンバーも全員新OS使用を承諾した。

さらに、宗像と風間が08式砲の使用、伊隅と栖川が88式長刀を使用することになった。これでヴァルキリーズ全員が新型を使用することが決まった。

龍は今後の詳細なタイムスケジュールと幾つかの諸注意を彼女らにした後、愛機のある90番格納庫に向った。今作戦にはヴィクターも参戦するので、現在急ピッチでオーバーホールが進められている。だが、まだノウハウをマスターしていない整備兵が大半なので龍が全体の人頭指揮を取っている。さらにハイヴ突入時の特殊兵装の準備も同時進行で進んでいるので90番格納庫内は現在修羅場と化している。

そんな修羅場の格納庫から避難し、1人休憩室で小休止を入れる龍。

「……………」

長椅子に座りながら、缶コーヒーに舌鼓を打つ。

（合成品だが、割といいコーヒーだな）

呑気に休んでいるように見えるだろうが、龍はここである人を待っていた。

「……………よ、缶コーヒーはいるか？」

「遠慮しておきますよ——しかし、あなたには驚かされる。一体

「どうやって情報省アクセスしたのかな？」

「これで手打ちにしろ」

缶コーヒ―を真後ろに投げ捨てる。だが、その缶コーヒ―が床に落ちる音はしなかった。

「さて、香月博士にも通さず、個人で私を呼び出したと言うことは博士に知られたくないことだろうと思うが……」

「御託はいい。まずはそっちの進捗状況を教える。無駄口を叩けば、体の穴が増える事になるぞ？」

「おお、くわばら、くわばら……」

「一応、有事の際の権限は確保できましたよ。相手の方はそんな事態ありえないとおっしゃっていましたが」

「OKだ。それと追加のオーダーが出来た」

「おや、またですか？ さすがにこれ以上タダ働きするのは嫌ですね」

龍は一枚のディスクを投げ渡す。

「これは？」

「自分で確認しろ——用件はそれだけだ、頼んだぞ」

「——ふむ、なるほど……確約は出来ませんが、一応打診はしておきましょう」

背後から気配が消える。龍の後に残っていたのは空になった缶コーヒ―一つだけだった。

龍は缶コーヒ―をゴミ箱に投げ込むと、窓から90番格納庫を覗き込む。ヴィクターの横には二機の試作VOBが鎮座している。さらにその横には複数の大型多弾頭ミサイルが並んでいる。クラスター

「——これで今打てる手は全て打った。後はなるようになるさ」

甲20号作戦まで後3週間で切っていた。

それからの3週間はまさに地獄だった。ヴァルキリーズの訓練や試作機のテスト、新型OSのデバッグ、ヴィクターの最終調整にV

OBの最終組上げ、作戦に関する様々な確認や資料作り……分かつてはいたが、やはり過酷なものだった。

テストの方は伊隅たちが協力してくれたおかげで滞りなく進み、OSのデバッグ処理も開発を手伝ってくれた霞が率先して進めてくれているおかげで予定よりも格段に動作が向上している。彼女らの協力が無ければ、この単時間でこれら全てを消化しきるのは無理だったろう。

ヴァルキリーズは昨日の内に新型と一緒に九州戦線に向った。そして龍も本日二一〇〇には横浜基地を出発し、甲20号目標のある朝鮮半島を向う予定だ。

出発までの空いた時間を利用して龍は横浜基地最深部——BETAの反応炉を拝みに行っていた。

「これが——反応炉」

青白い光を放つ異様な塊……だが、これがハイヴの中枢であり、BETAのエネルギー源でもある。話によると、コイツ一つで基地の大部分の電力を賄^{まかな}っているらしい。

「しかし、何故夕呼はこいつを止めない？」

電力確保のためだけに反応炉^{これ}を活動状態のまま放置するのは得策ではない。BETAの帰巢本能が事実ならこの横浜基地は常にBETA進攻のリスクを背負っていることになる。

（BETAの研究のため……いやそれでもリスクが多過ぎる。何だ、反応炉を活動状態にしておく理由は？）

活動状態にしておく……？

（活動状態にしておくではなく——しておかなければならない？）この反応炉からは人間が利用できるエネルギー以外の“何か”も生み出されている。それらがBETAの活動源となっているのなにかと提唱する学者もいるらしいが……。

（この基地のどこかにBETAに関する何か……例えば施設が生きている、それを維持し続けるために反応炉をそのままにしている）可能性としてありえないものではない。しかし、確証もない。だ

が……

「あの女なら、それぐらいの事をやっていてもおかしくないな」

「何がおかしいのよ？」

噂をすれば、何となら。

「よ、夕呼。散歩にしては随分と遠出だな」

「アンタ、どうやってここに入つたのよ、アンタに渡したセキュリティカードじゃここには入れないのに」

「セキュリティはデジタル以外にアナログなものも用意しておく事を進める」

その言葉から龍がセキュリティを破つて侵入した事が分かる。

「で、わざわざそんなことまでここに来ていったい何なの？」

「なに、戦場に行く前に自分が殺す相手を拝んでおこうと思つてな」
反応炉を眺める龍の横顔に恐怖や迷いは無かった。

「アンタ——怖くないわけ？」

龍は今作戦で単機ハイヴ突入を行う。それがどれだけ危険で無茶なのか……理解できているのか夕呼は心配になる。

「俺だつて人間だ、恐怖は感じる」

「そう？ アンタを見ているとどうも神経が狂っているようにしか思えないわ」

再突入殻による軌道降下部隊——リエントリーシェル軌道降下兵団でもハイヴ突入時の生存率は2割にも満たない。

そんな地獄の最深部に増速ブースターで突入し、単機で反応炉を目指すなど不可能としか言いようがない。

「アンタが死んだら作戦どころか第四計画すら失敗で終わるのよ？」

「戦いに絶対なんて存在しない。どんな優秀なパイロットでもどれだけ優れた機体に乗っていようと人外の化け物でも平等に“死”が存在する。それが戦場だ」

「失敗なんて許さないわよ」

「それは依頼主クライアントの命令か？」

「——そうよ」

「確約はしない。だが、心に留めておこう」
踵を返す龍。

「上に戻る、ヴィクターの搬出作業があるからな」
それだけ言うとな龍は上に戻った。

「——本当に死ぬんじゃないわよ、馬鹿」

反応炉が放つ低い機械音に埋もれるような小さい声で夕呼はそう
呟いた。

「……………」

「……………」

上に戻った龍を待っていたのは寂しそうな顔をした霞だった。

「どうした、こんな所で」

ここは90番格納庫の搬入口。今まさにヴィクターが運び出され
ているところだ。

「本当に行くんですか？」

「仕事だからな」

「——死ぬかもしれないんですよ？」

龍は霞の頭を撫でてやる。

「心配してくれるのは嬉しいが、そんな暗い顔を見て戦場に行くの
は少し気が滅入るな」

「すいません……」

本当にすまなそうな顔をする霞。その反応を見た龍が仕方ないな
という顔をする。この世界に来てからというものの霞とはそれなりの
時間一緒にいたため、彼女が感情表現の乏しさと苦手さは分かって
いるつもりだ。

（まだまだ“子供”だからな、少しずつ前に進めばいいさ）

霞にその気持が伝わるかどうか分からないが、優しく彼女の頭
を撫でてやる。

「今作戦は夕呼の戦場に向うからな。少し寂しいだろうが、いい子

で待ってるよ」

「はい、分かりました」

「余裕があったら土産を持って帰ってくる。ま、期待しないで待ってる」

「……………バイバイ」

「霞、今言つべき事はそれじゃない。誰かを見送る時は“いつてらっしゃい”だ」

「いつてらっしゃい？」

「ああ、そして帰ってきた奴を迎える時に“お帰りなさい”だ」

「お帰りなさい……………」

反復するように何度も呟く霞。

霞の頭から手を離す。ヴィクターの搬出が終了する。龍も出発しなければならぬ。

「——帰ってきますよね？」

「死ななきゃ帰ってくるさ」

脚を進める。もう行かなければ…………。

「龍さん」

霞の声が龍の脚を引きとめる。

「——いつて……らっしゃい……………です、龍さん」

「ああ、行ってくる」

脚を進める。今度こそ霞は何も言わず龍を見送った。

Episode 8（後書き）

長々書いてやっと投稿できました。

個人的には余りいい出来に出来ませんでした。

次話は神槍作戦……書くのが大変です。

ご意見・ご感想がありましたら、一言お願いします。

Episode 9

日本海西部、鬱陵島^{ウルルン}から北西に250km、朝鮮半島沿岸部から約50km沖合いの海域に展開した3軍連合艦隊。その中の帝国連合艦隊第4戦隊の一隻、多目的大型輸送艦『浦賀』の甲板に龍はいた。

「はぁ……」

吐く息が白くなる。春が近づいているとはいえ、夜はまだまだ冷える。日の出もまだだ。だが、輸送船内の中は異様な緊張感に満ちている。いや、輸送船だけではない……周りの全ての艦船から刺すような緊張感が伝わってくる。

「作戦は確か明朝だった」

予定通りなら“〇七〇〇”ちょうどに開始される。国連宇宙総軍所属の装甲駆逐艦隊による軌道爆撃が作戦開始を告げる盛大な合図となるだろう。

すでに殆どの艦隊が一時集結地点に集結を完了している。作戦まで3時間を切った今、各艦隊は所定の作戦開始海域に順次移動を開始始めている。

「——戻るか」

作戦開始時刻まで後数時間を切った。

艦内に戻った龍は格納庫^{ハンガー}の作業状況の進捗を確認しにいった。格納庫^{ハンガー}では急ピッチでヴィクターとVOBの接続作業及び多弾頭ミサイル^{クラスター}の搭載作業が進められている。

「藤林整備長」

「あ、少佐」

油と煤で汚れたつなぎを着た女性が綺麗な敬礼をする。龍はそれに手で答え、硬くならないよう伝える。

彼女は藤林京子曹長、元はA-01部隊の専属整備部隊の1人でヴィクターの構造解析時にこちら側に抽出された整備兵だ。今ではその高い技術力を買われ、ヴィクターの整備だけではなく、VOBの生産・整備や現在横浜基地で改修が進んでいるアーマードコアの技術をフィードバックした不知火・改（仮称）の人頭指揮を担当している。龍とは既に顔馴染みの関係でもある。

「作業状況はどうだ？」

「タイムスケジュールより若干遅れています、〇七三〇までには全ての作業を完了させます」

タラップの手すりに体を預ける。彼女の言うとおり作業の進捗状況に大きな遅れはないようだ。

「そうか、何とか間にあいそうだな」

「はい……ただ、VOBは急造仕様なので少佐の掲示したスペック維持し切れるかは保障し切れません」

「構わない、ハイヴまで持てばいい。それよりもこんな単時間でここまで仕事をしてくれたんだ。文句はないさ」

「しかしッ！」

「藤林」

彼女の反論を静かな……しかし力の籠った声で止める。上官に対してここまで大きく出るのは決して褒められたものではないが、それでも彼女は続ける。

「元々無茶な作戦な上、VOBまで未完成な状態でハイヴまで本当に行けるのですか？！」

彼女の言うことにも一理ある。発案した龍も今作戦には無理があると承知している。その上、作戦の要であるVOBまで不調子では作戦のリスクは数倍に跳ね上がるだろう。

「藤林、今君に出来る事は時間限界までVOBを調整し、出撃時の憂いを無くす事だけだ」

「少佐……」

「突入作戦は必ず成功させなければならない。そうしなければ、今

作戦に参加する全ての兵士を無駄死にさせる事になる」

「……………」

何かに耐えるような顔をする藤林。整備兵の1人として不完全な状態で出撃を強要しなければならぬ事態が許せないのだろう。だが、龍からしたらこの手の不測の事態は慣れたものだ。職業柄依頼主の無茶なオーダーには慣れてるし、準備が完全でない状態での出撃もしょっちゅうだ。

（ま、敵のおよその戦力と布陣、確かな支援が望めるだけ今の状況は良い方だろう）

前向きに考えているわけではないが、今までの経験と比較するとまだマシな部類になる。

「安心しろ、無駄死はしない主義だ」

軽い口調でそう続ける。だが、龍は急に真面目な顔をする。

「藤林、最前線に來たことがあるか？」

「最前線ですか？ いえ、私はずっと横浜配備でしたので」

「作戦のフェイズ4で『浦賀』はVOBの航続距離を稼ぐため随伴の護衛艦隊と共に光線照射警戒域へ突入する。仮に重光線級が照射可能地域に生存していた場合、護衛艦や浦賀の耐レーザー塗料や耐熱装甲は数十秒も持たない」

「……………」

「艦にいれば安全……もしそう思っているのなら今の内に改めておけ」

「……はい」

「覚悟しろとまでは言わないがその事は忘れるな。お前は今、戦場にいるんだからな」

それだけ言うと龍は格納庫を後にした。

明朝、龍は甲板に再び上がった。現時刻は〇六五九、作戦開始、一分前だ。

「——来た」

遙か上空から無数に飛来してくるAL弾の雨……それら全てが鉄原ハイヴや仁川周辺に降り注ぐ。

軌道爆撃を代表する低軌道上からの爆撃・降下戦術は1980年代後半から試験的に導入され、1990年代前半に正式に導入された画期的な対BETA戦術の一つだ。

軌道爆撃・軌道降下戦術が確立する以前は多数の艦隊・機甲部隊による面制圧砲撃によってハイヴまでの道を切り開く方法しか有効な手段が無かった。しかし、この方法では艦隊・機甲部隊の砲弾消耗率が激しく、また戦術機部隊や機甲部隊の直接的な被害も無視できない程出てしまう等……問題点も多く、相当な被害を覚悟しなければならなかった。

しかし、光線級・重光線級の射程外である上空200～400kmの低軌道上から大量のAL弾と戦術機部隊を投下できる軌道爆撃・軌道降下戦術は従来の全軍による面制圧攻撃と違い、ハイヴやその周辺全域を一度に爆撃でき、かつ戦術機部隊を地上進攻の何倍もの効率と低被害で主縦坑に近い箇所から突入させる事が可能となる革命的な戦術である。

そして、今まさに軌道爆撃が開始されている。しかし、極超音速で飛来するAL弾も所詮は空中を飛ぶ飛翔体に過ぎない。朝鮮半島

……ハイヴ周辺から無数の光線が空を切り裂く。

……
レーザー
光線級……。

人類が劣勢に追い込まれた最大の理由。

音速を遙かに超える速度で投下されたAL弾は対数の光線照射によってその殆どが撃ち落とされる。だが、人類とて馬鹿ではない。

この第一波爆撃の本来の目的はAL弾の撃墜時に発生する高濃度の重金属雲の生成である。

これらの無誘導AL弾は通常MRV（多弾頭再突入体）に満載された状態でHSS（再突入型駆逐艦）から分離、投下される。

巡航高度が200～400kmで低軌道上を周回するHSSは

軌道爆撃のゴーサインが出ると順次減速、高度を落とし、大気圏内へ再突入。高度100km、大気の影響がさほど無い高度まで降下したところで順次搭載されたMRVを投下する。HSTはすぐさま再加速し待機軌道上まで戻るが、MRVは待機摩擦による減速を相殺させるため搭載されたロケットモーターを点火、最大加速で地表に墜ちる。その時の最高速度は時速7km/s強（マッハ20）、低軌道上を周回する時と同速にまで加速する。

高度が3〜4000mを切ったところでMRVは搭載された無数の無誘導AL弾を分離、指定範囲に金属の雨を降らせる。無論、これらのAL弾は百発百中の光線級^{レーザー}によつて90%以上が撃墜される。しかし、この事は想定範囲内の事でしかない。ここで重要なのが、発生する重金属雲と光線級^{レーザー}の次照射までのタイムラグだ。

撃墜時に発生した重金属雲は後続の第2波軌道爆撃、海上または地上部隊からの艦砲及びロケット弾による飽和攻撃の盾となり、次照射まで少なくとも十数秒要する光線級^{レーザー}は間髪を入れない連続攻撃に対処しきれない。探知能力が高すぎる光線級^{レーザー}はほぼ確実に第1波軌道爆撃を感知し、迎撃してくる。仮に光線級^{レーザー}が地上部隊の攻撃を先に感知したとしても次照射の前に極超音速のAL弾が地表に到着する。また双方の攻撃が無効化されても第2波軌道爆撃は照射のタイムラグを着いてその殆どが撃墜されず地表に届く。

軌道爆撃は重金属雲の発生と同時に地表に展開するBETAへの^{プレセント}攻撃にもなる攻守一体の戦術なのである。

「始まったな、“戦争”が……」

地表を吹き飛ばす轟音と青空を灰色に染め上げる重金属雲が戦いの始まりを高々と告げる。

仁川沖合いに展開した3軍連合艦隊は作戦通り、フェイズ1の軌道爆撃と連動してありつたけのAL弾・ALMをハイヴに打ち込んだ。重金属雲の発生を合図に全艦多目的運搬砲弾による面制圧に切

り替え、長距離飽和攻撃を開始。さらに中華統一戦線第3艦隊及び、国連太平洋艦隊第1戦隊が艦砲射撃を継続しながら京畿湾に強行突入、仁川を含めた沿岸部を面制圧。後方の帝国連合艦隊第3戦隊による全力砲撃による支援もあり、2艦隊は予定通り指定範囲の制圧を完了。作戦はいよいよ海兵部隊による強行上陸へ移ろうとしていた。

海上で激しい砲撃戦が続いてた頃、水中ではソードフィッシュ級潜水艦とその日本ライセンス生産機である81式潜航ユニットが最大船速航行で沿岸部に急接近していた。

《H Qより潜航ユニット戦隊長、全ステイングレイ離艦せよ、繰り返す、全ステイングレイ離艦せよッ！》
オルシナスリッド

「潜航ユニット戦隊長了解ッ！」

オルシナスリッド
H Qからのゴーサインを受け、潜航ユニット戦隊長が計36隻にも及ぶソードフィッシュ級・81式潜航ユニット全艦にステイングレイ大隊出撃の命令をする。

オルシナスス
「潜航ユニット戦隊長より全潜航ユニット、全艦最大船速——全ステイングレイ離艦せよッ——」

水中に低い音が響く。潜水艦の艦首パーツがパージされ、機体と潜水艦を繋げる最終ロックが解除される。

《ステイングレイ01よりステイングレイズ、海兵隊の恐ろしさをクソ虫どもに思い知らせろ！》

《全て蹴散らせッ——！》

《——了解ッ！》

イントルーダー

A - 6は通常の機甲部隊よりも遥かに効率よくBETA支配地域の沿岸部を制圧し、強固な橋頭堡を確保する目的で開発された可変機構と水中航行能力を備えた強襲歩行攻撃機である。

正式配備が始まって20年以上経つ老兵士だが、潜水可能な点が高く評価され、米国海兵隊を始めとして日本帝国、英国、台湾などで現役任務に就いている非常に優秀な機体でもある。

A-6は単機で36mmチーガン^{チーガン}を4門、120mm滑空砲を2門、多目的兵倉庫を2基、近接戦闘スパイクマニピュレータ^{マニピュレータ}2基を搭載し、1個小隊で通常の戦術機一個2個小隊の区域を制圧できるだけのスペックがある。また、日本がライセンス生産しているA-6J（海神）の場合、航続距離を犠牲にして36mmチーガンを6門に増設し、面制圧能力を上げている。

「さあ……いよいよだ」

ステイングレイ大隊長——山田久司大尉の額に汗が流れる。
イントルーダー^{イントルーダー} A-6、A-6J（海神）を操る衛士が最も緊張を強いられるのが上陸時、潜航形態から歩行形態へ移行するこの瞬間である。

推進機構が巻き上げる砂により、機体のレーダーはその効力を一時的に失い、海底との距離もさほどないこの瞬間……機体の脚部が接地部が海底の岩礁と激突し、体勢を崩す事故が多い。そしてそうなった場合、ともに射撃も出来ない状態で光線照射^{レーザー}を受ける危険がある。

頼れるものは己の腕と時の運のみ。

主脚が海底との砂礫を踏みしめる。四肢が飛べ出て機体にかかる水圧が変化する。この瞬間が最も危険だ。冷静に油断無く……。

各兵装の強制砲口排水機構^{スタンバイ}即応待機、その時がやってくる。

「全機交戦開始^{エンジン}、撃ちまくれ——ッ！！」

36mmチーガンが——120mm滑空砲が一斉に火を噴く。沿岸部に残っていたBETA^{ベータ}が次々と血肉に還元されていく。

上陸を無事に完了した大隊36機のA-6とA-6J（海神）^{イントルーダー}は海岸に隊列を組んで強行上陸を開始する。

大隊長はすぐさま優先撃破目標をマークし、回復したデータリンクで全機にそれを知らせる。

「全機優先撃破指定共有確認！ 火線を散らすな！ 確実に殲滅し

ろッ！」

「——了解ッ！」

海兵隊衛士が一斉に応える。散らばっていた火線が確実に目標を捕らえていく。しかし、いくらA-6の火力がずば抜けているからとはいえ、やはり敵の数が多い。

だが、彼らには絶対にやり遂げなければならない任務がある。後続の機甲部隊の上陸安全を確保するためにも、軌道爆撃・飽和砲撃で生き残った光線種レーザーを一刻も早く排除しなければならない。

「失せる、クソ虫ども！」

120mm滑空砲が前方の要撃級と多数の戦車級タンクを吹き飛ばす。多目的兵倉庫に搭載されたミサイルが次々と要撃級を爆殺していく。

「この向こうに、この砲火の果てに——！」

遙か遠くに見える異形の構造物——BETAが巣であり、多くの同胞の墓標である地表構造物モニメントがその存在を高々と示している。

沸き立つ血のうねりを彼は止める事ができなかった。だが、それでも頭の中は常に冷静に戦場を“見て”いた。

A-6の衛士には通常の衛士以上に技量が求められる。戦術機のように三次元機動を出来ないA-6にとって冷静で正確な目標識別と判断能力、戦場を見極める“目”は生き残るための必須条件の一つだ。そして、多くの兵装を自在に操る技量も無くてはならない。

彼らの“武器”はA-6だけではないからだ。

レーダーが大隊規模の突撃級デストロイヤーの影を捉える。

「ステイングレイ01より全機、大隊規模の突撃級デストロイヤーがポイントAE-31-45より接近中、距離7000！ 各自潜航ユニット制御

を確認せよ！」

「ステイングレイ01より潜航ユニット戦隊長、聞いての通りだ！ 全潜航ユニット攻撃深度、支援兵器制制御移譲の再確認を願うッ

！」

《——潜航ユニット戦隊長よりステイングレイ各機、全潜航ユニットは攻撃深度まで浮上、準備宜し！」

海上に潜航ユニットの背が次々と浮上してくる。だが、この間に
デストロイヤー
も突撃級はステイングレイ大隊を押しつぶさんと突撃してくる。

オルシナスリッド
《潜航ユニット戦隊長よりステイングレイ01、再確認完了ッ、全
ハヴ・コントロール
兵器制御移譲済——全てなぎ払えッ!》

「ステイングレイ01了解ッ!! 全兵器制御受領確認、ステイン
アイ・ハヴ・コントロール
グレイ全機、連動制圧砲撃斉射用意——」

海岸線を埋め尽くすBETAに次々とターゲットサイトの赤い死
印が押されていく。大隊長は後続の増援が射程内に入った瞬間を逃
さなかった。

「射エ——ッ!!」

36機のA-6の全力砲撃、それと連動して“支援兵器プラット
フォーム”である潜航ユニットから無数のロケット弾と対地クラス
ターミサイルが吐き出される。

潜航ユニットはA-6の航続距離を稼ぐためだけでなく、ロケッ
ト弾やVLS等で前線の海兵隊衛士を支援する事ができる。そして
それらのコントロールは全て海兵隊衛士によってコントロールされ
ている。海兵隊衛士たちは自在に支援兵器プラットフォームのロケ
ット弾、VLSを使いこなし、橋頭堡を確保するのである。圧倒的
な大火力を制御しながら、敵をなぎ払うこの瞬間こそが彼らの真骨
頂とも言える。

「弾着まで30、全機撃ちまくれッ!!」

ロケット弾が隊列の上を飛び越え、光線級撃ち落とさされる。そ
隙にミサイル群が匍匐飛行で突撃級に殺到する。焼き払われた後
に続くのA-6とA-6J（海神）たちの砲火。次々となぎ払われ
ていくBETA群。目標の重光線級まであとわずか……。

だが、次の瞬間第二種光線照射警報が視界を黄色に染めた。

「照射警報ですッ! 小型光線級多数接近中ッ!!」

ガードの薄い右翼から数十体現れる。しかもその照射目標はミサ
イルやロケット弾ではなく、彼らステイングレイ隊を狙っていた。

「——それがどうしたアアッ!!」

ミサイルやロケット弾が食われないのなら、何の問題もない。それに機動力のないA-6、A-6J（海神）にレーザー照射を回避する事はできない。出来るとすれば、海まで引くか……。

「ステイングレイ全機、自動連動射撃モードッ！！ 帝国海兵隊員は一步も引かないッ、全てを蹴散らすぞ——ッ！！」

「……了解ッ！！」

戦闘開始より27分後、日本帝国海軍海兵隊及び、国連太平洋艦隊第1海兵隊からなる『ステイングレイ大隊』は前衛の突撃級や要撃級の一群を突破、後方の重光線級により総戦力の4割を失うもこれを撃破し、仁川周辺の橋頭堡を確保した。

彼は文字通り一步も引かず、橋頭堡を確保し、最初に上陸を果たした。

橋頭堡確保とほぼ同時に各機甲師団は上陸を開始。ステイングレイ大隊が決死の覚悟で確保した橋頭堡を中心に一気に戦線を押し上げる。

統一中華戦線機甲2個師団及び、戦術機甲10個連隊からなる『シエンロン部隊』も順次戦術機母艦から出撃を開始する。

「いいか、このJ-10X（殲撃10型）はアラスカ行きの決まった大事な機体だ、壊すんじゃないよッ」

「……了解ッ！！」

「帝国や国連にだけいい顔はさせるな。朝鮮半島は我々の手で取り戻す、暴風の名を轟かせる——ッ！」

12機のJ-10Xが戦術機母艦の甲板で主機を全開にする。

「全機、私に続けエ——ッ！！」

中華統一戦線軍所属崔・亦菲中尉率いるバオフエン中隊は一気呵成にBETA群に切り込む。その後続にJ-8（殲撃8型）、さらにはJ-11（殲撃11型）が続く。

中華統一戦線軍を主力とした『シェンロン部隊』の上陸が完了し、戦線を構築したところで後続の帝国・国連軍を主力とした『ティルヴィング部隊』が順次上陸、両部隊はレーザー照射により少なからず損害を出したが、それも想定の範囲を超えるほどでもなく予定通り目標地点の制圧を進めることが出来た。両部隊が指定地点目前となった頃、東側に展開した国連太平洋艦隊第2戦隊と帝国連合艦隊第4戦隊が沿岸部へ制圧砲撃を開始。作戦はいよいよ第3フェイズに移行した。

多目的大型輸送艦『浦賀』でヴィクターとVOB接続の最終点検及び燃料充填作業が急ピッチで進められていた。作戦の順調な推移は聞き及んでいたが、現在格納庫ハンガーにそれを気にしている者は一人もいなかった。可能な限り不安要素を潰し、万全に近い状態でヴィクターを出撃させる。整備兵たちは文字通りに死に物狂いで作業を続けていた。

そして、龍も藤林から細かいVOBの仕様や注意点などを話し、出撃に備えていた。

「少佐、重ねて申し上げます、この試作VOBではネクストの急激な推力偏向に耐えられません。持って数回……いえ一回も持たない可能性が高いです」

「それは腕でカバーする。他に注意点は？」

「加速によるソニックブームはPAプライマル・アーマーによって防がれますが、エネルギーの殆どを衝撃波防御に回している状態でレーザー照射を受けた場合、10秒と持たずにアーマーは消失します」

「照射を受けなければいいだけだ。多弾頭ミサイルは亜音速下でもホーミング可能だな？」

「はい、ただ命中精度は雀の涙ほどです」

「構わない、こいつらはタダの餌だからな」

「……………少佐」

「くどいぞ藤林、もう決まっていることだ。VOBの最後の締め、任せたぞ」

「——了解」

藤林に整備の指揮を任せる。ヴィクターのコクピットに行き、そこで出撃の時を待つ。龍は最近来ていなかったリンクス専用パイロットスーツに身を包んでいた。

戦術機の強化装備と違い、リンクス専用スーツにはAMSコネクトユニットとヘルメットが付いている。高Gが掛かるネクストの制御ではヘルメットからの酸素供給が必要不可欠となる。また、ヘルメットの内側には眼球をの動きから目標を識別、ロックオンする機能等もあり、戦闘補助の性能もある。またスーツ自体も優れた耐Gスーツであり、同時にパワードスーツでもある。このスーツさえ着ていれば、軽くコンクリートの壁にひびを入れることが出来る。

出撃の時を待っていた龍の元に通信が入る。

《草薙少佐、香月副指令より通信が入っています》

「こちらに回してくれ。秘匿回線Bを使用しろ」

《——了解》

暫しの空白の後、HUDに憎たらしい夕呼の顔が出てきた。

《——今、失礼な事考えていたでしょう？》

「気のせいだ」

女とは感のいい生き物である。

《——ま、いいわ。作戦も第3段階に入ったわ。そろそろ出番よ》

「何だ、それだけのために連絡を寄越したのか？ 天下の夕呼博士も地に落ちたものだな」

《——それだけ減らず口が叩ければ、問題ないわね。心配して損したわ》

「ふん、お前も甘いな、この気に及んで他人の心配とは……………」

《ほっときなさいよ》

「いや、すまない。意外と可愛い一面が見れて面白かったからな」

《……ッ?!》

不意打ちだった、夕呼がめんくらった顔をする。しかも少し頬が赤い。

(全くコイツは悪魔には向かないタイプだな)

人の事を利用するなど散々人を扱けにし、目的のためなら何を犠牲にする事も厭わない彼女だが、彼女の根源にあるものは皆が思っているようなものではないのかもしれない。

《んん、それよりそちの用意は問題ないでしょうね?》

「勿論だ。後〇〇一五で全ての工程が終了する。後は護衛艦隊と共に可能な限り陸地に接近するだけだ。それよりもお前は馬鹿なG弾狂信者どもを一分でも長く抑えてろ。幾ら俺でも五分やそこから反応炉までたどり着けない」

《分かっているわ……それにしてもやな役を引き受けちゃったわね。降りてもいい?》

「御勝手に、代わりに支払う事になるのは第4計画失敗と第5計画発動だ」

《——分かっているわよ、そんな事》

「——180分だ」

《——180分?》

「俺が地下茎^{スタッフ}構造物に突入してから180分。それまでに反応炉を破壊する」

《……》

「だが、もし180分経つても反応炉のエネルギー反応が消失しない場合は即時G弾投下に踏み切れ」

《——ッ?! アンタ正気!!》

「前線の兵士を無駄死にさせるわけには行かない」

《……ッ》

「——ま、これはあくまで保険だ。もしプラン通り行けば、突入後遅くても40分以内に反応炉のある主広間^{メインホール}までたどり着ける。180分……3時間と言つのはあくまで最悪の方向に転んだ時のため

の保険だ。そしてアンタはその保険を必ず確保してもらわないとならない」

《——ええ、分かっているわ。私にはどうせそれぐらいしか出来ないから》

「今日は随分と気が弱いな、夕呼。いつも毒舌はどうした？」

《——アンタの心配していると何だか馬鹿馬鹿しくなってきたわ》

「は、そうかい——悪い、そろそろ本艦も……らしい」

艦内にレッドアラートが鳴り響く。どうやらこの艦にも出撃の時間が来たようだ。

《——こつちにも連絡がきたわ。上陸したダイインスレイヴ部隊は予定通り進攻中、アンタの艦隊にもゴーサインが出たわ》

「了解だ。そんじゃ次の通信は戦場の中でな」

《ええ、アンタの本当の実力……高みの見物とさせてもらっわ》

「言ってる……クソアマが」

二人は不敵に笑った。

Episode 9（後書き）

マブラヴの資料集片手に書きました……

何故か字数わりに話が進まない……というわけ、一旦切る事にしました。

ご意見・ご感想がありましたら、ぜひ一言お願いいたします。

Episode 10

浦賀を旗艦とした突撃艦隊は沿岸部に接近するため密集陣形で突撃を敢行する。

「全艦傘陣形を維持しつつ最大戦速、アンチ・レーザーアンチ・レーザー・ミサイルAL弾、ALM撃ち方始め——ッ！」

旗艦長の合図を号令に一齐に戦闘指揮所CICの中が騒がしくなる。何人ものオペレータが各艦隊・部隊に指示を飛ばす。

「AL弾、ALM発射」

「全艦隊、飽和砲撃を開始」

CICの中にも周辺の艦隊の砲撃音が聞こえてくる。

「地上部隊は敵の2次迎撃後、ポイントW-43-52に進攻せよ」

「第1波砲撃着弾まで5…4…」

「ハイヴ周辺より複数の光線照射レーザーを確認。第1波攻撃が補足されています」

「…3…2…」

「光線照射を確認、第1波砲撃の90%が撃墜、指定範囲に重金属雲の発生を確認」

「第2波砲撃着弾まで15秒…」

間髪を入れずに砲撃を続ける。第4フェイズの飽和砲撃の全てはヴィクターを無事に出撃させるためのものに過ぎない。

「——いよいよだな」

帽子を深く被り覚悟を決める旗艦長。浦賀を旗艦とした突撃艦隊は光線照射危険海域へ突入する。

浦賀の格納庫ハンガーでは……。

「整備兵は全員艦内へ退避！」

「了解ッ、VOB及び多弾頭ミサイルの最終安全装置解除！ 全員

回避よ!!」

藤林の指示で一齐に整備兵が艦内に退避する。龍はヴィクターの
コックピットブロックを閉鎖、VOB及び多弾頭ミサイルのコント
ロールを確認する。

(システムリンク、戦術・衛星データリンク問題なし)

今作戦に合わせて実装された各種周辺機器をチェックする。

「システムオールグリーン! ジェネレータ出力戦闘出力に上昇!」
ミリタリ

「コジマ機開始動、PAスタンバイ!」

ヴィクターの主機に火が入る。

「旗艦長、こちらはいつでも行ける!」

《少佐、まだ目標海域まで到達しておりません》

「艦隊の消耗率は?!」

《護衛艦『渦潮』『有明』『秋晴』『冬風』被弾、『雲海』『霜焼』

大破……いえ轟沈!》

(照射危険海域に入っすぐにこれだけの被害。長くは持たない……
ッ!)

すぐさま龍はVOBの使用限界時間から最大飛行距離を割り出し、
ルート上に点在する門と照らし合わせる。
ゲート

(この様子なら予定よりも多く光線級が生存しているな。最悪通常
推進で移動することも視野に入れておくか……)
レーザー

初期予定ほど上手く事は進んでいないが、それでも状況はネガテ
イヴではない。

「最終ロッキングボルト解除」

ハンガーのガントリーと機体を繋げていたロッキングボルトが解
除される。

「リフトアップ及びカタパルトスタンバイ」

《了解ッ!》

VOBに火を入れる。それと同時にリフトが上がり機体がせり上
がる。

「旗艦長、今から出る。発艦までの約40秒間全力で守ってくれ」

《無論だ》

ヴィクターがカタパルトデッキに上がる。周辺の護衛艦隊は所々光線級の照射を受け被弾している。今はまだ航行を続けているが、それも時間の問題だ。

《カタパルト圧力上昇》

《80：90：グリーンゾーンです》

《カタパルトオールグリーン、いつでも行けます！》

《滑走シャトル装着確認！》

《バリア上げる！！》

発進準備が整う。

《光線照射を確認、護衛艦『高松』です！》

オペレータの通信が聞こえたと同時に前方を航行していた護衛艦『高松』が火を噴いた。

（被弾した?!）

完全に沈んではないが舵取りが出来ていないのか、本艦の進路上に割り込んでくる。

「旗艦長、前方の護衛艦が邪魔で発艦できない、艦砲射撃で排除しろ！」

《ッ！　しかし艦内にはまだ生存者が》

「『浦賀』が光線照射を受けてからじゃない遅すぎる！　今作戦で散っていた兵士の死を無駄にするつもりか!!」

《——了解、艦砲射撃で『高松』を排除、全責任には私が負う!!　護衛艦隊は発艦までA L弾、A L Mによる飽和砲撃を続けよ!》
浦賀の両サイドを守る護衛艦の艦砲射撃が護衛艦『高松』を完全に撃沈する。

《高松の轟沈を確認、進路確保しました》

「発艦する！」

《全艦全力砲撃を継続、発艦を援護せよ》

《草薙少佐、ヴィクターのコールサインは『メサイア00』です。よろしいですね?》

「了解した。」

VOBの初段の固体燃料ロケットを点火、それと同時に滑走シャトルのロックが解除され、高速でヴィクターが打ち出される。

「メサイア00出るぞ！」

ヴィクターをOBモードに切り替える。

「クッ！」

久々の亜音速飛行が体を襲いかかる。

「——行くぞッ！！！」

初段固体燃料ロケットを全開運転、音速の壁をぶち破る。初速を稼いだところで初段ロケットをパージ、大出力の液体燃料ロケットに点火する。

「PA最大出力、超音速飛行！！！」

艦隊からの無数のロケット弾・砲弾による花道を進むヴィクター。凄まじいソニックブームを起こしながら超低空で強行突入する。レッドアラート、^{レーザー}光線照射警報がコックピット内に響き渡る。

「多弾頭ミサイルのプレゼントだ、有り難く受け取れ！！！」

VOBに搭載された多弾頭ミサイルをホーミング、照射を受けたところでヴィクター前面一斉に小型弾頭ミサイルを散布する。刹那、^{レーザー}無数の光線照射でミサイルが撃墜される。龍は続けてさらに多弾頭ミサイルをホーミングする。だが、そんな中^{レーザー}光線照射の一つがヴィクターを捉えた。

「ッ？！」

光ったと思った瞬間、^{レーザー}光線が複数に屈折と減衰を繰り返し、ヴィクターの上を掠めていった。

（^{レーザー}光線拡散弾頭の効果はてきめんの様だな）

多弾頭ミサイルの全ての弾頭には龍が夕呼に提案した新型対^{レーザー}光線弾頭が使用されている。これにはAL弾同様、^{レーザー}光線照射防止を目的としたもので重金属の代わりに大量の化学物質を利用して^{レーザー}光線を屈折、減衰させる効果がある。実戦でのテストは今回が初めてだが、想定以上の効果が出ているようだ。

（このまま突破する！）

光線照射^{レーザー}によってできた直線状のアンチ・レーザー・フィールドを突き進む。

「燃料タンクパージ、VOB使用限界までおよそ60秒！」

ここまでは完全に予定通りだ。

（これなら予定の門^{ゲート}から……）

その時、HUDにVOB異常を伝えるウィンドウが出る。

「このタイミングで——ッ?!」

これを皮切りにエラーコードを次々と表示される。燃料供給に異常発生、VOBの加速にも影響が出る。さらに推力偏向^{ベクター}ノズルのコントロールもトラブルが発生している。

（おいおい不味いぞ、これは!）

ここで減速したらギリギリのタイミングで回避してきた光線照射^{レーザー}を受ける危険がある。無理矢理QBで回避するのも手だが、藤林の言うことが正しいのならQBをした瞬間空中分解して爆散だ。

（仕方ない、早いがパージするしか……）

ヴィクターとVOBの接続を解除する。しかし、エラーコードが出た。

（ジョイントパージ部分にトラブル?! マニュアルコントロールも効かない!!）

ここに来てジョイントにすらトラブルが発生した。さらにそこに光線照射^{レーザー}警報が鳴り響く。

（不味いッ!）

刹那光線照射^{レーザー}がVOBに命中する。

司令艦『最上』から指揮を執っていた夕呼にもヴィクター……メサイア00の動きは伝わっていた。

「VOBに被弾、爆発しました!」

ピアティフ中尉の悲鳴のような報告が飛ぶ。

「りゅ……草薙少佐は?!」

「メサイア00の信号ロスト! 衛士は生死不明です!」

最悪だ……。そんな2文字が夕呼の脳裏をよぎった。案の定、後ろに控えた米軍のG弾狂信者はニヤリと厭らしい目をしながらその媚びきつた口を開く。

「香月副司令、残念ながらあなたの“玩具”はやられてしまったようです。今からでも遅くはありません。我々に全指揮系統を譲渡ください。必ずや今作戦を成功させて見せましょう」

「……信号は拾えないの?」

「VOBの爆発の影響で相互通信が一時的に切れている可能性があります。またIFF等の機器は後付けです。トラブルの可能性も……」

「監視衛星の光学画像は!」

「は、すぐに!」

モニターに映し出された画像には爆散したVOBが映っていた。

「通信はまだ回復しないの?」

「呼びかけてはいますが」

「続けなさい!」

通信は回復しない。衛星画像にもメサイア00の姿はない。

(まさか、本当に……)

そんな言葉が頭を過ったその時……。

《こちらメサイア00、CP応答しろ!!》
「マインドポスト」

爆煙から背部のOBを展開したスカイ・ヴィクターが飛び出る。

「龍、アンタね——ッ!」

《悪いが、文句は帰ったから聞く! 現在OBで音速移動中、VOBは破棄。突入門をE47変更! 地上部隊は遅滞戦闘に移行、全艦隊は支援砲撃に切り替えて地上部隊を援護しろ!》
「ゲート」

E47——予定よりも東に30? 手前の門から突入することになる。

《夕呼、分かっているな?》

「ええ、突入から3時間……それがタイムリミット」

《OKだ、そっちは頼んだぞ》

「アンタこそ、死ぬんじゃないわよ!!」

《当然だ》

これから3時間……長い3時間になりそうだ。

(門まで後3500m、OB使用限界まで約37秒——行ける!!)
ゲイト

アサルトライフルとマシンガンで群がるBETAを排除しながら
デストロイヤー グラップラー
最小限の動きで突撃級や要撃級からなる一群を突破する。一々相手を
しては弾薬も時間も無駄なだけだ。

レーダーが上空から降り注ぐ無数の極超音速飛翔体を捉える。

「来たか!!」

無数に飛来するAL弾頭弾と軌道降下兵団のカーゴが鉄原ハイヴ
オービットダイバーズ
に降り注ぐ。その後方には100機以上のF-15Eが続く。さらに
ライシエル
レーダーが複数の影を捉える。ダイバーズが空飛ぶ棺桶——再突
フライングコフィン
入殻をパージしたのだ。
リエント

(さあ……ここからだ)

軌道降下兵団はこのままハイヴに近い門から突入するが、VOB
ゲイト
を失った龍は外縁部の門から突入しなければならぬ。

(かなりのロスだが文句も言っていられない。地上部隊にはもうそれ
なりの損害が出ている)

地上部隊がハイヴ攻略の地上戦で優勢を保っていられるのは持つ
て3時間と言われている。もしその言葉通りなら、タイムオーバー
スタフ
後地下茎構造物に突入している部隊の生存も危ぶまれる。勿論己の
生命もだ。

(G弾が降ってくるのも3時間。地上部隊の優勢も3時間。どうやら
『3』という字には好かれていないようだな、俺は……)

だが、愚痴っけていても仕方がない。まずは地下茎構造物内に侵入
スタフ
しなければ。

「！ゲートを目視で確認。スプレッドミサイル準備^{レディ}」

入口を塞ぐ遮蔽物をロックオンする。

「発射^{ファイア}！！」

超小型破砕弾頭であるマイクロバンカーが前方の遮蔽物を粉碎する。

「メサイア00よりCP、これより突入する！」
コマンドポスト

《こちらCP了解、goodluckメサイア00……》

無線通信が途切れる。ここから先は孤独との戦いともなる。地下^タ茎構造物内は意外に明るく有視界戦闘が可能なほどだった。

（壁が光っているのか？ 何にしても有視界が確保されているのは助かる）

この密閉空間ではレーダーも本来の性能を発揮するのは難しい。新たに実装した音紋識別装置や振動レーダーがなければかなり戦いづらい空間だからだ。

（通路の直径は数百m前後つてところか……QBで三次元多角機動戦闘^{レーザ}が出来るな）

光線級で頭を抑えられている地上よりは戦いやすいかもしれない。だが、密閉空間であることに変わりはない……数で押し切られた場合ヴィクターでも対応しきれない。

（後178分……地獄行きか天国行きか）

ステイック 操縦桿を握る手に力がこもる。

（ああ、これだ……戦場の匂いだ）

肌から……全ての感覚から五感という五感から“戦場”を感じられる。理想的な状況だ。

司令艦『最上』のCICで夕呼は鬱陶しい米将校の相手をしながら夕呼はタイマーをずっと見ていた。そして同時に考えられる龍の動きと敵の動きからヴィクターの現在地をはじき出そうとしていた。（突入から約35分経過……敵との接触を避けながら進んでいたら

まだ主縦坑から数kmの位置にいる可能性が高い)

まだ時間には十分余裕があるが、それでも心配の種は尽きない。
最も危険を伴うVOBによる低高度侵入は予定外のトラブルに見舞われたものも何とか被害なくクリアすることが出来た。だが、本当の勝負は地下茎構造物に突入してからだ。

(あいつの言うとおりヴィクターの性能なら単機でも十分主縦坑までたどり着ける。でも所詮は1機、数で攻められたらいくらネクス
トでも食いつぶされるのは必至だわ)

優秀な衛士で構成された軌道降下兵団ですら平均帰還率は2割だ。
(——心配するだけ無駄か。私にはここでこいつらを相手すること
しかできないんだから)

そう夕呼には後ろに控える無能な米軍将校のお相手という重要で
どうでもいい仕事がある。

(ほんと——帰ってきたらとことんこき使ってやるんだから)
自分の事を顎で使った龍に悪態付く。その裏に隠された己の思い
には気づかないふりをしながら……。

夕呼が心の中で龍に悪態をついていた頃、龍は少し不味い状況に
なっていた。

「不味いな……」

通常推進400?/hで移動中の龍は振動レーダーから得られた
音紋を記録されたBETAのものと比較していた。

(音が反響して正確な距離は分からんが、ざっと後方1300つて
ところか。音紋からして突撃級、数は800強——いや1000は
いってるな。で、その後方に——雑音が多いがこれは要撃級と小型
種か。多いな……測定限界数をオーバーしてやがる)

今まで戦闘を回避しながら進んできたせいで後ろにはかなりの規
模のBETAが後を追いかけてきている。

「だが、次の広間を突破したら、あと少しで主縦坑だ」

コジマ粒子の再チャージが終わる。すぐさまOBを展開し高速移動する。

「ホール内に敵一群を確認、振動レーダー測定限界数オーバー」

この先にも数千を超すBETAがひしめいているようだ。さながら前門の虎、後門の狼と言ったところか。

（夕呼からコジマ汚染の制限を受けていないから“アレ”を使わせようとしてしよう）

スプレッドミサイルを発射、小型破砕弾頭がホール入口を塞ぐ構造物に風穴を開ける。ホールの中に突入すると中には予想以上のBETAがヴィクターを食い潰さんと待っていた。

「OBカット、コジマ機関全力運転！」

コジマ出力とジェネレータ出力が跳ね上がる。全身のコジマフィルターが展開し、コジマ粒子が散布される。ヴィクターの外は既にコジマ汚染による高濃度汚染地帯だ。だが、BETAには全く汚染による影響はない。ヴィクターの真下に群がるBETAを見ればそれは明らかだ。

（ま、構わんさ、これで終わりだからな）

ブーストカット、重力に従い機体が自由落下する。飛びかかるように襲いかかってくるBETA。

アサルト・アーマー
「——AAA」

次の瞬間、コジマ粒子が爆発的に分裂反応を起こし、膨大なエネルギーとなって大爆発を起こす。発生した衝撃波がヴィクターを中心にBETAを吹き飛ばす。

……

……

……

数秒後、ホールの外縁部には肉塊とBETAがごみ山のように転がっていた。爆発と壁に挟まれたBETAは肉を潰され、引きちぎられ、押しつぶされ、無残な死を遂げている。

「数で攻めるのはいいが、こんな密閉空間でこれだけの数を置くの

は自殺行為だな」

BETAの行動原理は分からないが、脳みその程度はカスと変わらないようだ。

（残り時間は後132分、主縦坑^{メインシャフト}まで後2km……いける）

その時、振動レーダーにBETAの進攻を示す振動が感知される。

「後続か……いや違う」

振動は後方からではなく、ヴィクターの下……広間^{ホール}下方数百mから来ていた。音紋をライブラリーにあるものと比較しても該当データ無し。

振動はさらに浅くなっている。このままでは数秒以内に広間^{ホール}に到達する。

（振動から見てかなりデカイ何かが地中を潜行している……一体何なんだ？）

コックピットにまで振動が届く。振動が浅くなる。刹那、主縦坑^{メインシャフト}

側の壁が崩れ落ちた。

「来た……ッ！」

砂煙の向こうに異様な物体が見える。牙の様な突起物が円形に並び……そうまるでシールドマシンのような肉塊が壁から生えていた。（デカイッ?!）

直径だけでも100mを超えている。それだけの巨体を支えているあの肉塊はいったいどれほどの強度があるのか……いやそれ以上にあの肉塊の大きさが問題だ。直径ですら100m巨体だ、その全長は一体……。

ゴオオオオ——ッ!!

低いうなり声をあげながら肉塊の口が開いていく。

「ッ! BETA——ッ!!」

開いた口の中から無数のBETAがあふれ出てくる。小型種だけでなく、要撃級^{グラップラー}やその後方^{フォート}には要塞級も出てきた。

「地下茎構造物内には要塞級が出ないんじゃないのかよッ?!」
流石の龍も動揺を隠しきれなかった。今までの戦訓や前例通りな

ら地下茎構造物内に要塞級は出てくるはずがなかったからだ。無論、
それらを鵜呑みにしていたわけではないが、それでもこのタイミングでこれだけの数が一度に出て来られては……。

（腹の中に大量のBETA——こいつはBETAを輸送するためのBETAか！）

だが、今さらそんな事が知れても何の意味がない。

「こりゃ……死んだかもな」

まるで津波のように押し寄せてくるBETAに銃口を向けながら龍はそう呟いた。額に一筋の汗が流れ落ちる、喉の奥がひどく乾く、動悸が激しくなる、己の中に何かが静かに“死”を告げている。

（夕呼、どうやら……約束は無理かもしれない）

……遅い……。

あれから2時間経った。この2時間、今まで生きてきた中で一番長い2時間だといっても間違いはない。しかし、それだけ待ってもあの生意気な声を聞く事は出来ずにいた。

（後51分……）

「ピアティフ」

「まだです……」

CPである彼女は首を横に振る。未だにデータリンクも回復せず無線通信も繋がらない。唯一彼の生存を確かめられるのは彼がハイヴの反応炉を破壊した時だけだ。

「副司令殿、もういいのでは？」

「悪戯に前線の兵士を殺すのは如何なものかと……」

「まだ約束の時間まで1時間あります」

「後50分ですよ、副司令……」

そんなこと言われなくとも分かっている。後50分、時間内にハイヴから反応炉のエネルギー反応がロストしなければ夕呼も終わるだ。

（信じていいのよね、龍……）

もう1時間は経っただろうか……時間を確認したいがそんな無駄なことをしている余裕は1秒たりともなかった。

「はぁ……はぁ……」

ここまで追い込まれたのはいつ以来だろうか。向かってくる要撃グラップラー級をレーザーブレードで切り裂きながら龍は今までの戦いを思い返してみた。生命が危なかったのは今まで何度もあった。身一つで敵基地の破壊工作をした時やノーマルACでネクストと戦闘になった時、AF——アンサラーを破壊した時、アルテリア・クラニウム破壊の時……。

（そういえば、あの時はNo.1が邪魔しに来たな）

クラニウムでの戦いが脳裏に蘇る。

（ウィンディ・D・ファンション……お前はいい女だったな）

この手で殺した女……俺が認めた数少ない女の一人……会った回数は片手で足りる程度だったか。それも殆ど戦場だったはずだ。あの時彼女はカラードの指示を無視してあの場に立っていた。彼女もまたこの世界の彼女たちのように何かしらの信念があるように感じられた。だからこそ、彼女はORCAの行為を容認する企業連の判断に従わなかったのだろう。

（別の出会い方をしていれば……いや、無意味な思考だな）

少なくともBETAに囲まれ、死ぬか生きるかの瀬戸際に考えるようなことではない。自棄になっていたのかもしれない。

「腐るにはまだ早いかな……」

まだ40分もある。まだ精神は折れていない。体も動く、機体もまだ戦える。

『後悔するなよ、お前が決めたことなんだからな』
セレンの言葉が蘇る。

ああ、後悔はないさ。

目の前を覆い尽くす。BETAの肉壁……まさに生き地獄のような場所だ。しかし、龍の中に後悔も自身の不運を呪う感情もなかった。あるのは……。

「俺はまだ死ぬわけにはいかないんだよ——ッ！」
生命の渴望だけだ。

飛びかかってくる小型種をレーザーブレードで切り裂く。一瞬間けた包囲網の穴を縫って後方からウィップで狙っていた要塞級の脚部と頭部を切り落とす。崩れ落ちる要塞級を壁に要撃級の進攻を食い止めると正面から突撃してくる突撃級を次々と切り裂いていく。
（デストロイヤー、グリップライ、フォート）
勿論脚部だけを潰して無力化するだけだ。

BETAの動きが鈍り、足並みが狂い始める。BETAは何故か敵が目の前にいてもその前に生きているBETAがいたら、それを避けようとする習性がある。その習性を逆手に取った戦法がBETAを使った防壁だ。

「さて小休止を入れながら突破法を考えなければ……」

騙し騙し使ってきたジェネレータやコジマ機関を休ませながら龍は手持ちのカードと現状から打開策を模索する。

（あの輸送型BETAは今のところ動きは見せていない。BETAを吐き出していないところを見ると打ち止めてみて間違いないだろう）

だが、またあのタイプのBETAが出てきたら不味い。只でさえ、横坑からの増援が多すぎて裁き切れていないのにそこで2次増援が来たらまず勝ち目はない。

「後35分……」

時間も無くなってきた。ミサイルとレーザーキャノンの使用を控えていたせいでマシンガンとアサルトライフルの残弾も残り1割程度。

「クソッ！」

考えれば考えるほど手がない事が裏付けられていく。

「本当に手詰まりなのかよ……」

その時、外縁部側の横坑ドリフトで大きな爆発が起きた。

「！これは――」

爆発に続いて36mm弾がBETAの壁を食い破る。空気を切る独特の音と爆音が広間ホールに響く。データリンクとリーダーがその答えを教える。

オビットダイバーズ
「軌道降下兵団――！」

データリンクには第6軌道降下兵団のマークが確かに映っている。

《こちら第6軌道降下兵団アクイラ中隊――隊長『アンリ・ギーツエン』。これよりメサイア00を援護する》

アクイラ中隊を基軸に残存部隊が隊列を組んで突撃砲を構える。

「メサイア00よりアクイラ1、今から敵マークーデータを送る！
B3の一群を排除してくれ――！」

《了解ッ！》

機体を空中に逃がしてダイバーズに射線を渡す。

《全機キャニスター弾グラップラー斉射、射エーツ！》

120mm散弾が要撃級と小型種からなる肉壁を吹き飛ばす。さらにダイバーズは中隊に分かれ崩れた敵一群を三方より同時攻撃し、確実に殲滅した。龍もダイバーズを支援するため、空中からスプレッドミサイルを発射し、接近してきたB4群の出鼻を挫く。足並みが崩れたBETAを包囲殲滅するダイバーズ。

「アクイラ1、そちらの残存戦力は？」

《約5割です》

どうやら、龍の方にかなりのBETAが引き寄せられていたようだ。だが、それを差し引いてもこれだけの戦力が生き残っていたのは僥倖。これで攻勢に打って出ることが出来る。

（残り30分！）

「メサイア00よりアクイラ1、これより主縦坑メインシャフトに突入する。反応炉破壊までの間、後退しつつBETAを引き寄せろ」

《たった1機で？！》

「異論は聞かん！ 背中^{メインシャフト}は任せたぞ！！」

OBを展開し、主縦坑^{ドリフト}に続く横坑を目指す。

旧ソウル市内を確保したシェンロン部隊はハイヴから次々と湧いて出てくる増援に苦しめられていた。その中でも最前線で奮闘するバオフェン中隊を率いる崔^{ツイ}・亦菲^{イーフェイ}は厳しい状態に立たされていた。すでに12機の内5機がBETAにやられ、中隊の両翼を固めるJ-11を中心とした部隊も損耗率が40%を超えている。

「HQ^{ヘッドクォータ}こちらバオフェン1！ W-25-21に支援砲撃要請、最優先よ！！」

「H^{ヘッドクォータ}Qよりバオフェン1、支援砲撃は受理したが、砲撃まで3分かかる」

「馬鹿言つてんじゃないわよ！ 1分でやんなさい、こっちは敵の増援のせいでジリ貧なのよ！！」

長刀^{グラップラー}を振りぬいて要撃級の首を刈り取る。既に弾薬はそこを付き、近接戦闘に移行している。ここで支援砲撃が来なければ、遅かれ早かれBETAに飲み込まれてしまう。

「バオフェン1より各機、遅滞戦闘を継続しつつ、前線を5km下げろぞ！ 各機甲部隊は後退しつつ砲撃、弾薬・推進剤に余裕のある戦術機部隊はその直援にあたれ。残りは全てあたしに続け！」

後続の戦車大隊が後退を始める。それを援護するJ-8部隊。だが、その動きは鈍くBETAに追いつかれるのは時間の問題だった。（ここで戦車大隊の火力を失ったら戦術機だけじゃ戦線を維持しきれない！）

「何としても機甲部隊の守り切るんだ！ 全機着剣、私に続け——ッ！」

「デストロイヤー^{グラップラー} 突撃級と要撃級から成る敵前衛に切り込むバオフェン中隊と他2中隊。しかし、そんな無茶をいつまでも続けていられるような状況ではないのは間違いない。前線部隊の遅滞戦闘も限界に近付いてい

た。

広間^{ホール}から横坑^{ドリフト}に後退した第6軌道降下兵団は広間^{ホール}から次々と湧いてくるBETAのせいで進路が塞がれていた。

「クソッ、全機、36mmを斉射しつつ通路を後退！ BETAを引きつけるんだ！」

《アンリ！ あの少佐の事をマジにしているのかよ！？》

「無駄口叩いているのなら目の前のクソ虫をさつさと倒せ！」

120mmで要撃級^{グラップラー}の上半身を吹き飛ばす。続けて背中^{グラップラー}のガンマウント前面に回し4門同時斉射で群がる小型種を一掃する。その両翼をアクイラ2、3がカバーする。

《それにあれは何なんだよ、あんな小さい戦術機なんて聞いたことがないぞ！》

「俺が知るかよッ！」

《このままじゃ遅かれ早かれBETAの増援が来るぞ》

アンリは唇を噛んだ。アクセルの言うとおりこのまま遅滞戦闘を続けても後方から増援が現れたら全滅もあり得る。前門の虎、後門の狼といった状況だ。

（だが、あの少佐はこの劣勢の中単機でここまでたどり着いていた……）

単独で広間^{ホール}のBETA群を突破したメサイア00は主縦坑^{メインシャフト}を目指している。事前に地上から単機でハイヴに突入する新型機動兵器があると聞いてはいたが、まさか本当にここまで単機でたどり着くとは思っていなかった。いったいどんな手品を使ったのか。

単機で最下層に近い広間^{ホール}までたどり着き、その広間^{ホール}のBETAを軽々と突破して見せたメサイア00。もしかしたら彼なら……。

《後方より複数の振動！》

《音紋照合、突撃級約3000、その後方に要撃級と小型種多数^{グラップラー}、測定限界数を超えています！！》

「ッ?!」

恐れていた事態が起こってしまった。

「来た——ッ!!」

ドリフト横坑の出口を塞ぐ障壁を吹き飛ばすと巨大な縦坑シャフトに出た。横浜基地のそれと全く同じ……とうとう主縦坑にたどり着いたのだ。

「高エネルギー反応確認、下方600m」

レーダーが確かに反応炉の姿を捉える。

「ここまで使わずに残しておいたとっておきだ、よく味わえ!!」

ミサイルポッドに搭載されたバンカースプレッドミサイルを残弾全て発射する。爆風が上に向かって巻き起こる。だが、残弾全てによる攻撃も表皮を僅かに削る程度の効果しかなかった。

「なら——!!」

右肩のレーザーキャノンを展開する。今までジェネレータやコジマ機関に過負荷が掛かるため使わなかったが、もう出し惜しみはなしだ。

「くらえッ!」

最大で4発までしか連射できないが、それでも威力は絶大だ。だが、それでも反応炉の停止させるに至らない。龍はそのまま両腕のMOONLIGHTを構えるとこじ開けた大穴をさらに切り裂いた。
(ここだ——!)

ミサイルポッドに残ったラスト一発をそのこじ開けた穴に叩きこむ。

「全速離脱!!」

OBを展開し、最大出力で主広間メインホールを脱出する。直後主広間メインホールから強烈な爆風が押し上がってきた。

グラップラー目の前の要撃級が前腕を振り上げた態勢で止まる。

「ッ！」

その隙を逃さず崔^{ツイ}は長刀でその胸を両断した。

《隊長、こいつらいきなり動きが！》

「そんな事を気にしている暇があるのならさっさと倒しなさい！」

動きが鈍ったBETAを切り倒す。追撃を加えようとした時、BETA群が一斉方向転換し、移動を開始した。

「えっ？」

目の前の戦術機や戦車大隊には目もくれず内陸に引き返すBETA群。データリンクを見てみるとここだけでなく戦域全体でも同様の動きが起きている。

「これって……」

「何だ？」

油断なく訪砲門に向けたままアンリは呟いた。後方から接近中だったBETA群がいきなり方向転換していた。

《アンリ、^{ホール}広間から大量のBETAが！》

「^{ファストジャンク}全機噴射跳躍、上に逃げろ！」

アンリの指示に従い全機空中に退避する。数秒後、その下を大量のBETAが通過していった。

「な、何だ？」

《おい、反応炉のエネルギー反応が……》

「反応炉のエネルギー反応ロスト、反応炉を破壊した模様……！」
オオ——ッ——！

CICに集っていた者たちが一斉に歓声を上げる。

「ピアティフ……」

「以前通信は回復していませんが、反応炉が破壊されたということ
は……」

「ええ、おそらくね」

「……………はい、分かりました。お伝えします」
通信を終えたピアティフが笑みを浮かべる。

「軌道降下兵団からの通信でメサイア00が反応炉を破壊したことが確認できました！」

「そう——すぐに直援部隊をハイヴに向かわせなさい。残存戦力は最低限の補給を済ませて直ちに追撃戦に移行、各艦隊にもすぐに打電して」

「——了解ッ！」

「はあ……………」

完全に機能を停止した反応炉の前で龍は3時間ぶりの休息を取っていた。

「まさか、ここまで耐久度があるとは……………新型のS-11弾頭ミサイルが無かったらヤバかったな」

ラストに残しておいたミサイル……………反応炉を吹き飛ばしたこのミサイルには小型化されたS-11爆弾が弾頭として搭載されていた。夕呼に無理を言って用意してもらったものだが、苦労しただけの価値があつた。この1発が無かったら確実に反応炉を止められたか保障しきれない。

「——さて、そろそろ行くか」

休めていたジェネレータに火を入れる。まずは上の軌道降下兵団と合流し、地下茎構造物内に残っている残敵を相当しなければならぬ。地上部隊も順次追撃戦に移行している頃合いだ。だが、これらに時間を割いている暇は龍には余りなかった。

「次は——九州だ」

Episode 10 (後書き)

やっと甲20号作戦終了……。

思っていた以上に書きづらかったです。正直あまりうまく書けませんでした。

次は残存BETAの九州上陸阻止作戦……また時間がかかりそうです。

次回も今回のように原作のキャラを出す予定です。

では、また次話更新の時に……

Episode 11

ハイヴ攻略という大戦果を上げていた頃、日本では極度の緊張状態が続いていた。

鉄原ハイヴ攻略から約半日、北九州沿岸部から中国地方日本海沿岸部全域には第2種戦闘配備を発令され、来るBETA上陸に備えていた。本土防衛軍はその戦力の半数以上を沿岸部に集結させ、強固な防衛網を築いた。その中に、国連軍の1部隊として横浜基地から派遣されたA-01部隊は北九州旧福岡市街の西、糸島半島の防衛陣地に展開していた。

（——鉄原ハイヴ攻略から半日……もういつBETAが来てもおかしくないわ）

不知火

TYPE94のコックピットの中で長い待機を過ごしている風間はタイマーと戦術マップを見て唸った。既に朝鮮半島とその周辺海域に展開していたBETA群は最寄りのハイヴへと撤退している。その内、半数近くが日本海へと撤退した。そして今も日本海の海底をBETAは闊歩している。対馬海峡を中心に警戒網と防衛網を張っている日本帝国海軍からの情報によれば、最も進攻が早いBETA群は既に海底に仕掛けた機雷群と接触している。正確な規模は不明だが、起爆した機雷の数から考えて少なくとも連隊から旅団クラス……さらにその後続も考慮すると確実に上陸してくるBETA群は師団クラスになるのはまず間違いない。相変わらず凄まじい数だ。想像するだけで背筋がゾツとする。

だが、今回の上陸が今まで以上の規模となるのは事前の調べて分かっていることでもある。だからこそ帝国は本土防衛軍の半数近くを投入して北九州から出雲地方に掛けての日本海沿岸部全域に防衛線を張り巡らしている。

そしてこれだけの広域に防衛線を張るのはまだ記憶に新しい1998年のBETA本土上陸からの戦訓だ。あの時北九州にBETAが上陸した後、別動隊のBETAが中国地方の日本海沿岸部に突如として出現した。巨大台風の直撃により防衛線の構築や兵站が円滑にできなかった事も本土上陸を許した原因の一つだが、北九州への兵站を担っていた中国地方陥落が北九州壊滅、そしてBETAの本島蹂躪を許した最大の原因だった。さらに当時側面支援や兵站を担当するはずだった四国地方もBETAの早すぎる進行速度のせいで巨大連絡橋の爆破が間に合わず壊滅した。

（今回はそんな事にはなりませんわ）

今回は前回の様な台風は来ていない。中国地方の防衛線も既に構築済み。十分な兵站も確保されている。前回のような悲劇は起きない、そして起こさせない。操縦桿スティックを握る手に自然と力がこもる。任官されまだ半年程度だが、それでも幾つかの実戦は経験してきた。間引き作戦にも参戦したことがある……戦友との別れも経験したこともある。今さら“この程度”の作戦で新任衛士の様な失態はしない。自分は栄えある特殊任務部隊A-01の1人なのだから。

そこで風間は大きく息をし、高ぶってしまった心を静めた。適度な緊張感が必要だが、そこまで気を張ってしまつてはいざという時に動けなくなってしまう。実戦で学んだ事の1つだ。

そこに僚機からの通信が入ってくる。

《禱子……》

「麗羅、どうかしましたか？」

《——少佐、無事かしら……》

「……………」

朝鮮半島の鉄原ハイヴ攻略に参戦した少佐の安否は現在も彼女たちには伝わっていない。

（ハイヴを沈めたのは少佐？——でも軌道降下兵団オイビット・ダイバースの可能性も）

どちらにしても今の彼女たちに少佐の安否を確認する術はない。

《禱子さん、そんな心配しなくても少佐なら大丈夫ですよ。ハイヴ

が落ちたという事が少佐が生きている証拠じゃないですか》

風間の網膜に奉上院の顔が表示された。どうやら今のやり取りを盗み聞きしていたようだ。

《——伽耶、ハイヴを落としたからって少佐が生きている確証はないわ》

夜神が窺めるように奉上院に言い聞かせる。夜神の言うとおり、奉上院の意見は少し楽観的すぎだ。ハイヴを攻略したのは少佐ではなく同時にハイヴに突入した軌道降下兵団オビット・ダイバースの可能性があり、単機で突入した少佐よりもその方が現実味がある。仮に少佐が反応炉を破壊していたとしても脱出の段階で撃破された可能性もある。結局少佐の安否は鉄原ハイヴに行った香月副司令の連絡を待たなければ分からないのだ。

《だが、どうにもあの少佐殿がくたばる場面を想像できないのだが…… 禰子はと思う？》

「美冴さん……？」

《あんな無茶苦茶な作戦を立てる馬鹿なんて即刻死亡に決まっているじゃない！》

黙っているのに耐えかねたのか速瀬も会話に割り込んでくる。

《速瀬中尉、いくらなんでも上官に対してそれは……》

栖川もちやつかり会話に入ってくる。

《その割には少佐の指示に従って88式長刀を使っていますね、速瀬中尉》

《——うつ…… そ、それは上官命令ってやつよ》

《速瀬中尉、草薙少佐は任意で構わないと言っていましたか？》

夜神が速瀬の言い分をばっさり切り落とす。確かに少佐殿は強制はしてない。そして今の速瀬は痛いところを突かれて苦虫を噛んだような顔になった。

《あ、あの時は使わなかったらどうなるか分からなかったじゃないッ……！》

——確かに……。

速瀬の言葉を聞いてその場にいた殆どの者が心の中で同意した。新兵器の話をされたあの時、少佐は遠回しに『使わなかったようなっても知らないぞ?』と脅してきた。言葉にしていたわけではないが、態度とオーラがそう語っていた。

《ん? そうでしたか?》

——一人……奉 upper 院を除いて。

《伽耶……》

夜神が頭を抱え、風間も苦笑を堪え切れず奉 upper 院は何故2人が……と首を傾げる。察しが悪いのかそれとも天然キャラだからなのか……。

(伽耶はの方が可愛らしくっていいのかも……)

奉 upper 院には悪いがお陰で少し緊張が解れた。

《風間、夜神、新任のくせに他人の心配か?》

そこに隊長の伊隅が割り込んでくる。

《他の者も部隊間通信を私用で使用するな。レコードどころか全てまる聞こえだぞ》

「は、失礼いたしました」

《今は上陸阻止作戦のことだけ考えている。我々には新兵装と新OSのテストがあるのだからな》

「は」

——大尉の言うとおりですわ。

A-01 部隊本来の目的は試作品の性能テスト及び性能評価だ。

17 式中隊支援火器に88 式試製近接戦闘高周波長刀、^{フレード}どちらも今回が初の実戦となる新兵器——あの少佐も取り扱いには注意するよう再三言っていた。戦闘中、邪魔になるようなら投棄も任意で許可されている。

風間は自機に搭載されている17 式砲をチェックした。急造仕様ではあるが専属の整備兵の連日に渡る徹夜の突貫作業により仕上がりは上々。これなら過酷な実戦にも耐えられるだろう。

後、心に引っ掛かっているのは只一つ……。

「——少佐、ご無事ですよね？」

風間がそう呟いたのと同様だった。

『——ソノブイ及び振動波に感有り急速に増大中！』

『——波形・音紋共にネガティブ！ 現在音紋照合中！——』

『総員第一種戦闘配置！ “コード991” 発生——繰り返し、

コード991” 発生！——』

通信回線が一気に沸騰する。けたましくレッドアラートが鳴り、HUDには“コード991”の警告が表示される。

『各機、暇な戦闘待機は終了だ、すぐに主機を戦闘主力にまで上げる！』

『——了解ッ！——』

主機に火が入る。待機モードだった設定が戦闘モードに切り替わり、各部の関節のロックが解除される。主機の発する重低音がコックピットにも聞こえてくる。

『——CPよりヴァルキリーズ、敵BETA群前方距離約6000mに接近、海上部隊、順次爆雷攻撃開始中』

CPの涼宮から逐次整理された情報が通信を閉して送られてくる。海上では展開していた戦闘艦艇が隊列を成してBETAがいるであろう海底に爆雷を投下していく。航路の後ろには爆雷の起爆による水柱が次々と出来ていた。

『——CPよりヴァルキリーズ、BETA群尚も接近中。支援砲撃開始ポイントまで約60秒』

『——各機、聞いての通りだ。全機射撃体勢に移行、突撃砲構え』
10を超える銃口が海岸に向けられる。この間も目まぐるしく更新される観測情報を元に最も効果的な砲撃ポイントを絞り込んでいく。それに合わせて周辺に展開した機甲部隊の配置が微調整される。海上では沖合に展開した艦隊がその大口徑砲塔をポイントに合わせる。

コックピットに機甲部隊が移動する振動とは別の地響きが伝わってきた。俄かに緊張が跳ね上がる。これはBETAの移動音だ。無

数のBETAが海を……海底を闊歩するその振動だ。

《——セロアワーマイナス15……14……13……》

秒読みに入る。再展開を済ませた機甲部隊・砲撃陣地がその砲口を一点に向ける。

《——6……5……4……》

緊張で噴き出た汗が気持ち悪い。操縦桿スティックを握る手にじつとりと汗が纏わりついている。いくら初陣を生き残ったからと言ってもまだまだ新任……緊張感が胃に堪える。

《——3……2……1……》

涼宮の唇が、その瞬間を告げる。

《——ゼロッ!!》

海上が大きく膨らみ、次の瞬間にはそれが巨大な水柱と化す。それと同時に頭上を無数の飛翔体が通過する。機甲部隊から撃ち出された無数の砲弾・ロケット弾が予定の砲撃ポイントに寸分の狂いもなく降り注ぎ、海岸一帯を一瞬で爆炎と爆風の地獄に変える。その衝撃はコックピットの中にまで伝わってきた。休みなく降り注ぐ砲撃、海上からも艦砲射撃が撃ち込まれる。砲弾を惜しみなく使い、海岸の地形が変わるほどの砲撃が続く。戦車大隊が隊列を成して水平射撃を続け、後方のMLRS部隊がロケット弾を連続発射する。

(——凄い……)

風間は目の前で起きている凄まじい砲撃戦に目を奪われていた。

風間だけでなく夜神や奉上院など新任たちはその圧倒的な迫力に一瞬とはいえ、圧巻された。

だが、その時冷静な伊隅の独り言が通信に漏れてきた。

《——? どういうことだ》

《——伊隅大尉、どうしました?》

《——敵の進攻速度が予測よりも早い》

「——えッ?」

風間はすぐに我に振り返り戦域マップを確認した。BETA群は“西の東松浦半島”から“北東の福津”に掛けて約60kmに散発的に

上陸を開始している。それに対して本土防衛軍は帝国陸軍と帝国海軍による水際での制圧砲撃でその進攻を食い止めようとしている。

このような水際での戦闘は数少ない対BETA戦術の中でも非常に効果的かつ安全な戦法として知られている。地上ではBETAは100km/h以上の速度で移動する。^{デストロイヤー}突撃級に至っては最大速度170?/hに達することもある。しかし渡海や渡河直後をするBETAは水の抵抗で移動速度が極端に落ちる。そのため海岸や河川の水際戦闘は機動力を失ったBETAを効率的に、かつ安全に撃破することが出来る。さらに海上戦力と合わせて挟み撃ちにすれば直接戦闘のリスクをさらに下げること出来る。

今回もそのセオリーに従い水際での挟み撃ちに行っているのだが、BETAの上陸速度に目立った変化が現れていなかった。通常なら砲撃のせいで上陸が一時的に抑えられているはずなのに。

『——BETA最前衛支援砲撃ポイントを突破、地雷敷設ポイントに突入しますッ!!』

BETA最前衛が海岸沿いに展開していた砲撃陣地の前面に張られた地雷原に突入する。直後、地雷を踏んだ突撃級や要撃級が吹き飛ばされた。その足元に群がっていた戦車級も^{タンク}爆発の衝撃で肉片に還元された。大量の砂煙が舞い上がり、視界を塞ぐ。足並みが乱れたBETAをデータリンクを関して補足した戦車部隊が水平斉射でさらに追撃を入れる。後方からはMLRSや迫撃砲等の火炮が長距離砲撃でそれを援護する。しかし、BETAの数が多すぎて撃ち漏らしが多数出てしまった。それらはさらに地雷原を突き進み、その先の機甲部隊や防御陣地を押しつぶさんとしている。

『——伊隅大尉、このままでは……ッ!』

『——栖川、皆まで言わなくても分かっている』

伊隅は難しい顔をしながら戦域マップを見ていた。^{ブリップ}周囲5〜60kmの海岸はBETAを示す赤い光点によって埋め尽くされようとしていた。戦域マップを見る限りBETAの進攻速度に衰えは殆ど見られない。このままでは前線を預かる機甲部隊が危ないのは間違

いない。

『——ヴァルキリー1よりCP、このままでは地雷原を突破されるツ！ そうなれば防御陣地が危ないツ！！』

『——CPよりヴァルキリー1、現在作戦司令部が対策を検討中、現状待機せよ』

（——そんな……もうBETAは目と鼻の先なのに）

——今から対策を考えていては手遅れないかるかもしれない。風間はそう思わずにはいられなかった。このままBETAが機甲部隊と接触してから戦術機部隊を動かしても被害を抑えることは厳しい。この手の作戦で戦術機がやるべき事は持ち前の機動力と火力で機甲部隊に取りつこうとするBETAを排除することだ。そのため敵味方が入れ混じるような混戦状態になってから戦術機を投入するのは遅すぎる上、効果が薄い。機甲部隊と陣地を守るなら地雷原で進攻速度が遅くなっている今が最大のチャンスのはずだ。そしてそれは風間だけでなく部隊全員が理解していた。

BETAの進攻を只眺めていることしかできない……だが、作戦司令部からの命令は意外なものだった。

『——CPよりヴァルキリーズ、作戦作戦司令部より命令が下った、ヴァルキリーズは直ちに待機地点より移動を開始し、第121戦車大隊及び第325砲兵大隊の後退を援護せよ』

「えっ？」

思わず風間は声を上げた。まさかこんなにも早く命令が下るとは思わなかった。しかもその命令が今目と鼻の先で後退を続けている部隊の支援とは。

『——ヴァルキリー1、了解！——全機聞いている通りだ。これより我が隊はこれより後退中の機甲部隊を後退支援に移るツ！ 全機噴射^サ射地表面滑走、私に続け——ツ！！』

伊隅機が跳躍ユニットの吹かして先行する。それに続いて風間たちが続く。

作戦司令部では想定外のBETAの上陸規模によって騒然となっていた。絶叫か悲鳴のように聞こえる怒号がCICの室内に木霊する。対応しようにもBETAの上陸範囲は50km以上の海岸に散発的に上陸を行っている。分散させている機甲部隊を呼び戻すだけでもそれ相応の時間を要する。そして現状からしてそれを待っている時間はなかった。

（——やれやれ、本当に少佐の言う通りになるとは）

CICの中で片隅で場に不釣り合いなサマースーツを着こなした伊達男が立つて行った。

「——さて、少佐が鍛えた戦女神たちがどこまで戦えるのか見ものですな」

帽子鎧衣は微かに口元をにやけさせた。何故鎧衣が最前線のCICにいるのか……それは先程ヴァルキリーズに下った命令に一枚噛んでいるからだ。先日草薙少佐から秘密裏に頼まれごとをされていた鎧衣は有事の際の保険のために情報省と己の交渉術を使い、司令部とは独立した命令系統を確保していた。

（17式試製中隊支援火器に88式試製近接戦闘高周波長刀……さらには新概念OS、確かに帝国の上層部を“妥協させる”程度の価値はありますかね）

それは少佐が鎧衣に頼んだ交換条件だ。彼はこれらのネタを元に帝国軍から有事の際の指揮権、そして幾つかの仕込みを鎧衣に前もって頼んでいた。

「——この戦いの勝者は人かあるいは……」

戦域マップには溢れんばかりのBETAの光点が光っていた。
ブリップ

待機地点から移動してすぐに現在自分たちが置かれている事態の悪さが身に染みて理解できた。すでに地雷原の半分近くまで進攻しているBETA群はまっすぐに防御陣地を目指している。このまま

では遅滞防御を継続しても数分以内に部隊が飲み込まれてしまう。
陣地を突破されてはそのさらに後方に展開してるMLRS部隊や砲
撃部隊も危険に晒される。何としてもここで食い止めなければ。

「各機、地雷原での戦闘は避ける、BETAは通った場所でも
地雷が残っている可能性がある」

「了解！」「了解！」「了解！」

「中隊各機はこのまま前進、ポイントN-20-14で防衛線を張
る。速瀬機^{ヴァルキリー2}、夜神機^{ヴァルキリー6}は前衛、私と栖川機^{ヴァルキリー4}が遊撃、残りの宗像機^{ヴァルキリー3}、風
間機^{ヴァルキリー5}、天上院機^{ヴァルキリー7}が支援砲撃。例の“デカ物”を使うぞッ！」

「了解ッ！」「了解ッ！」「了解ッ！」

跳躍ユニットがあげる甲高いエンジン音がコックピットに木霊す
る。

「敵最前衛との距離約1200！」

「全機跳躍カット、速瀬前に出ろ！」

「了解！ 麗羅遅れるんじゃないわよ——ッ！！」

「了解です！」

ストーム・バンガード ストライク・バンガード
突撃前衛の速瀬と強襲前衛の夜神がBETA群に一気呵成に切り
込む。それを伊隅・栖川たち迎撃後衛が援護する。

「栖川、速瀬たちの進路を確保する！ 左翼の戦車級^{タンク}に120
mm散弾3斉射！！」

「了解ッ！」

突撃砲を構える伊隅機と栖川機。

「今だ、撃てッ！！」

突撃砲から甲高い炸裂音とオレンジ色の銃口炎^{マズルフラッシュ}が噴き出る。計6
発の散弾が着弾すると同時に数百体を超える戦車級や兵士級^{タンク ソルジャー}が散ら
ばった散弾の餌食となり、空中に血肉をまき散らす。速瀬と夜神は
足が止まった小型種の横を通り抜け、突貫してくる突撃級の正面に
躍り出た。

「あんた達に用はないのよッ」

速瀬は突撃級の間を紙一重で通り抜け、無防備な背中に36mm
デストロイヤー

をお見舞いする。

『——あなた達じゃ私の背中には捕まえられない!』

夜神は噴射地表面滑走から跳躍^{ジャンプ}ユニットの出力を上げ水平噴射跳躍^{ホライズナルプライ}で突撃級の上を通り抜け、再び噴射地表面滑走に戻る。それと同時にガンラックの突撃砲で背面射撃を行い、突撃級2体の脚部を吹き飛ばした。夜神はこの数週間で身に付けた操縦技術^{グリップ}をフルに使って先任の速瀬にも負けない格闘機動を見せつけた。

『やるじゃない麗羅、この勢いで正面の要撃級7体を狩るわよ! 付いてきなさいッ』

『——了解!』

BETA群に軌道突撃を仕掛ける速瀬・夜神両機。二人の動きは前の実戦のよりも格段に向上していた。

『——こちらCP、^{コマンドポスト}敵BETA群尚をも地雷原を進攻。ヴァルキリ——1迎撃せよ』

『——ヴァルキリ——1了解。宗像、風間と天上院の指揮を任せる。地雷原を進行中のBETA群を足を止める!』

『——ヴァルキリ——3了解、禰子、伽耶、17式砲射撃準備^{レディ}』

『——了解!』『——了解!』

ガンラックにぶら下がった全長10mはあろう巨大な砲身が右向きを通って前面に構えられる。17式試製中隊支援火器——57mm4連装ガトリング砲と120mm多目的滑空砲を複合した重機関砲の砲口がBETA群の頭を捉える。

『敵前衛の要撃級を叩く、弾種120mm散弾^{キャニスター}を選択、私の合図で3斉射だ』

『——了解!』『——了解!』

17式砲をがちりとホールドする。突撃砲と違い砲弾の初速も反動も大きい17式砲では両腕でホールドしなければ命中精度が大きく低下する。風間は敵光点^{ブリック}がロックオンサイトに入るのをじっと待った。

『——3斉射、射エ!』

3つの銃口炎が砲身下部の120mmから噴き出る。散弾の直撃を受けた要撃級は足をもがれ、肉を引きちぎられ、その巨体を一部を失い、その巨大な脚を止める。散弾によって被弾したBETAの殆どは撃破できなかったが、行動不能に陥っているのは明らかだ。地雷原のど真ん中で擱坐していた個体群を避けようと後続の要撃級や突撃級が左右に進路を変えようとするが、進攻速度が速すぎて次々と擱坐したBETAに追突する。BETAの動きが大きく乱れ、足並みが乱れる。

「——今だ、57mmで動きの鈍ったところを叩く！」
「——了解ッ！」

4連装ガトリングガンが高速回転を始める。次の瞬間、銃口からオレンジの銃口炎が噴き出た。57mm劣化ウラン高速徹甲弾を最大で毎分500発近く射撃可能な4連装ガトリングガンが動きの鈍ったBETA群を次々と撃ち貫いていく。要撃級の胴体に風穴をこじ開け、突撃級の頑強な装甲殻を砕き、戦車級のタンクをミンチに変える。給弾ベルトによって休みなく背中の中専用弾倉から57mm弾がローディングされ、加熱した砲身が砲身下部の強制冷却装置によって冷却される、17式砲はその圧倒的な火力でBETAを血肉に還元した。

「——凄い……」

風間が思わす声を漏らす。宗像も天上院も言葉こそ上げなかったが、風間と同じ気持ちだった。17式砲はたった3基の1斉射で地雷原を進攻していた半数近くのBETAを行動不能にして見せた。17式砲の威力は風間たちの予想を良い方に裏切ってくれた。

「——残りは後続の部隊に任せ後続のBETA群を叩くぞ、禰子、天上院ついてこい！」

「——りよ、了解！」

跳躍ユニットを点火し、噴射跳躍する。まだ、西側に逃げたBETAが残っているが、それは後続の戦術機部隊が相手をしてくれる。風間たちは光線照射に注意しながら近接格闘戦を続ける前衛部隊の

バックアップ
支援砲撃に移った。

『——ハアッ!』

『——邪魔よッ!——!』

速瀬機と夜神機が次々と要撃級や突撃級を切り刻んでいく。一体
の要撃級がその前腕を振り上げ背後から速瀬機を狙う。

『——ッ! ヴアルキリー2、チエックシックス!』

『——ッ?!』

速瀬機は素早いコマンド入力で前入力の行動をカットし、近接戦
闘で鍛えた機体制御技術で素早く向き直った。

『——甘いッ!』

両腕にホルドした88式試製近接高周波長刀で最後の要撃級の
前腕を切り落とし、そのまま切り返してその胴体を切り落とす。

『——麗羅、ナイス!』

『——礼なら少佐が作ってくれた新型OSにしてください。今の動
きは旧OSじゃ出来ませんでした』

『——うっ……き、気が向いたらね!』

『——気が向かなくてもしてくださいッ』

喋っている間にも夜神は右手の88式長刀で突撃級の脚を切り落
とし、左手の突撃砲で群がってくる小型種をミンチに変えた。速瀬
も新型の88式長刀を存分に使いこなしBETAを行動不能にして
いく。74式以上の強度と切れ味を誇る88式は要撃級の頑強な前
腕ですら両断し、その圧倒的な性能を占めていた。そこに十数体の
突撃級が隊列を成して突っ込んでくる。そこに十数体の

『——速瀬、夜神後退しろ! こちらで対応する!』

『——了解!』

伊隅で指示に従い射線を開ける2機。そこに後方でBETA群を
相手していた風間たちが合流する。

『——前方の突撃級の脚を狙うぞ、弾種120mm装弾筒付翼安定
徹甲弾を選択』

弾倉を散弾から装弾筒付翼安定徹甲弾に変更する。

『——焦って発砲するな。敵を引きつけるんだ』

デストロイヤー
突撃級との相対距離が500mを切る。

『——斉射、撃てえッ!!』

砲口から噴き出る閃光、その合間から安定翼を備えた120mm デストロイヤー徹甲弾が突撃級の脚部目がけて飛んでいく。だがその半数以上が頑強な装甲殻に命中し弾かれてしまう。突撃級のモース硬度15以上を誇る装甲殻は主力戦車MBTの滑空砲でも貫通することは容易ではない。さらに装甲殻の再生能力も高く装甲殻の赤い斑点は再生された跡だ。

伊隅はさらに連射を命令した。2射：3射と砲撃が続く。そして突撃級は伊隅の読み通りの状態に陥った。脚部を打ち抜かれた突撃級が次々と攔坐していく。

『——今だ、中隊全機前進!』

『——了解ッ!』

後方に下がっていた速瀬機と夜神機が88式長刀を、突撃砲を構えた伊隅機と栖川機が血気盛んに突撃級に呐喊する。

『——我々は突撃級の後続を叩くぞ!』

『——了解!』

宗像の指示に従い風間は17式砲を構える。突撃級の後方には数百体を超えるBETA群が進攻してきている。

(いくらこっちの火力が優れていてもこれだけ彼我戦力があつたら……)

ガトリングガンを斉射しながら風間は唇をかんだ。その時、戦域マップに高速で移動する光点が現れた。しかもそのマーカーは友軍きのものだ。

『——宗像中尉、後方の戦術機部隊が』

『——帝国陸軍のご到着か……二人とも火力を前面に集中、着陸ポイントを確認してする』

『——了解』

風間たちは120mm散弾の斉射でBETA群を薙ぎ払い、戦術機部隊の進路を確保してやる。そこに滑り込むように灰色の不知火

1個小隊が着陸、そのままガンラック前面に回して突撃砲4門による同時斉射で前方に群がるBETAを吹き飛ばした。それを確認した宗像はさらに後続の二個小隊の進路を確保するため、57mm弾で後方の残敵を掃除する。風間と天上院もそれに続く。ヴァルキリーズが掃除したところに残りの不知火2個小隊が着陸する。

「——こちらは帝国陸軍第067戦術機部隊を預かる“山崎隆志大尉だ、これより貴軍を援護する”
ウォーウルフズ

「——国連派遣部隊A-01隊、隊長“伊隅みちる大尉”です。援護に感謝します」

増援にやってきたのは帝国陸軍所属の不知火12機——中隊規模だった。帝国陸軍の不知火は連携の取れた見事な攻撃で次々とヴァルキリーズが撃ち漏らした残敵を掃除していく。よく訓練された優秀な衛士で構成された中隊だ。動きに無駄が無い。

「——本土防衛本部の指示によりこの地点で遅滞防御を行う。貴軍にはその支援に当たってほしい」

「——こちらは最優先事項として新兵装の実戦テストがある」

「——聞いている、我が隊は貴軍の護衛も本部から命じられているからな」

突撃砲を撃ちながら帝国陸軍の不知火は小隊単位で散開しBETAを牽制している。伊隅も前衛の速瀬たちを呼び戻し鶴翼型の陣形を組んだ。
ウイング

「——CPよりヴァルキリー1、現在糸島半島周辺に連隊規模のBETA上陸が確認された、注意せよ」
コマンドポスト

「——連隊規模?!」
バックアップ
「——さすがに支援砲撃が無いとその数はつらいわね……」

連隊と言えばBETAの個体数は数千体を超える場合も有り得る。

「——え、それは本当ですか?!」

CPの涼宮が動揺した声を上げた。

「——どうした、CP!」
コマンドポスト

「——先程衛星データから光線属腫の熱源パターンが確認された。
レーザー

個体数は及び正確な分布は不明、ヴァルキリーズ各機は敵増援上陸後、制限高度及び光線照射に注意せよ」

——光線級？！
レーザー

C Pからの情報は事態が最悪の方向に転がっている事を示唆していた。

「——ちよつと待つてよ！ 何で光線級の存在が上陸前に気付けなかったの？！」
レーザー

「——B E T Aの数が多過ぎて熱源パターンの照合が困難なんですよ。それに海中では正確な分布までは調べようがありません」

速瀬の疑問に比較的冷静を保っている夜神が答える。

「——2時方向、距離4000より要撃級及び突撃級、小型種も多数確認！ まっすぐ突っ込んできますっ！！」
グラップラー
デストロイヤー

栖川の絶叫にも聞こえる声が無線に木霊する。

「——ウォーウルフ1よりH Q！ ポイントN - 24 - 11に支援砲撃要請！！」
ヘッドクォータ

山崎が逸早く敵先方を叩くため支援砲撃要請をした。流石は歴戦の衛士、この程度では動揺の影も見せない。
バックアップ

「——H Q了解」
ヘッドクォータ

十数秒後、後方のM L R S・火砲部隊が一斉長距離砲撃を開始した。だが、数十発を超えるロケット弾・砲弾は突如空を切り裂いた青白き閃光によって撃ち落とされた。間違いない光線級の光線照射だ。照射数は確認できただけでも40は超えている。

「——既に戦域内に浸透していたか？！」

ウォーウルフ1——山崎大尉が毒づく。

「——ヴァルキリー1よりH Q、光線級は既に戦域内に浸透している、A L弾による飽和攻撃が必要だ！ このままでは地上部隊が水平照射の的になるッ！」
ヘッドクォータ

「——H Q了解、こちらでも光線照射を確認した。現在衛星観測データから照射源を逆探している。現状のまま遅滞防御を継続せよ」
レーザー

伊隅がすぐさま作戦本部にA L弾による支援砲撃を要請したが、

CICもこの事態に困窮しているのか明確な返答が得られなかった。

『——ああ、もう——ッ！ 融通の利かない連中ね！！』

『——同感です！』

速瀬機と夜神機がウォーウルフズの突撃前衛1個小隊と共にBETA群に切り込む。
ストーム・バングード

『——ヴァルキリー5、ヴァルキリー7、17式砲で前衛部隊を援護する。浸透してくる小型種を優先的に叩け』

『——宗像、砲撃中の護衛はウォーウルフズ1個小隊が付いてくれる。砲撃に集中しろ！』

『——ヴァルキリー3了解』

『——聞いている通りだ、各機砲撃開始！ BETAのクソ共をミンチにしてやれッ！』

『——了解ッ！』

4連装ガトリングガンが唸りをあげて57mm弾を高速で吐き出す。風間は横に薙ぎ払うように17式砲を振り、群がってくる戦車級や兵士級を粉碎した。フリーとなったところに伊隅機と栖川機が入り込み、前衛が撃ち漏らした突撃級を駆逐する。それに続くように前進したウォーウルフズ1個小隊が120mm散弾で要撃級ごと小型種の一団を爆殺する。
キャニスター・グラッブライ

『——宗像、3時方向の要撃級の脚を潰せ！』
グラッブライ

『——了解！ 禱子、天上院、120mm装弾筒付翼安定徹甲弾もしくは120mm粘着榴弾で脚部を狙うんだ』
HEHS

『——了解！』

ガトリング下部に取り付けられた120mm滑空砲から銃口炎が吐きだされる。
マズルフラッシュ
要撃級は砲撃によって主脚を失い横転する。
グラッブライ

『——今だ、57mm斉射！』

機動力を削いだところで57mm弾で敵一群を一掃する。しかし、要撃級の隙間を縫って小型種がこちらに接近してきた。
タンク

『——伽耶、10時方向、戦車級50！』

『——はいっ！』

天上院が左翼から接近していた小型種を正確に射撃する。いつもノンビリとして天然なところがある天上院だが、ヴァルキリーズの中でも先任以上の射撃技術を有している。代わりに格闘機動は苦手な近接戦闘能力は低い、それを補って余る才能を持っている。

だが、天上院が左翼の相手をしている間に正面の火力が不足し、BETA群が息を吹き返してきた。

「——ッ、やらせません！」

17式砲の120mm散弾を3斉射し、正面のBETA群の前衛を叩きつぶす風間。彼女もまた新任にしては非常に広い視野を持ち、的確に友軍の援護が出来る稀有な才能を持ち主だ。

風間は戦域内に散らばっているBETAの群体を確認しながら前衛部隊の死角となる位置にいるBETAを排除した。

「——支援ありがとう、禰子」

「——どう致しまして」

風間と夜神は短いやり取りを済ませ、すぐに意識を周りの敵に向けた。

ヘッドクォータ

「——HQよりヴァルキリー、ウォーウルフ両隊、これより300秒後、海軍及び

陸軍による飽和砲撃が開始される。砲撃範囲より直ちに待避せよ！」

バックアップ

遅滞防御の命令が出てから約10分、ようやく支援砲撃の用意が出来たという通信が来た。砲撃開始時間は5分後、時間にして2分間の砲撃がこの周辺の戦域一体に行われる。ここまで時間がかかったのは戦線が東西に延びていたからだろ。

「——ヴァルキリー1、了解」

「——ウォーウルフ1、了解」

「——伊隅大尉、貴隊から後退しろ。殿はこちらで務める」

「——了解した、悪いが頼む」

「ヴァルキリー1よりヴァルキリーズ、殿はウォーウルフズが務めてくれる。各機噴射地表面滑走で第2防衛線まで後退！」

サーフェイシング

「——了解！」「」

風間は17式砲を背部のガンラックに戻し、跳躍ユニットに推進剤を回した。その時、網膜投影に真っ赤な警告メッセージが表示された。

—— 光線照射警報。

「—— 初期照射だッ、全機乱数回避!!」

散開する青と灰色の不知火。その直後、複数の光線が彼女らを襲った。風間は戦入力のカットし、すぐさま跳躍ユニットのロケットモーターを点火、後方に後退すると同時に乱数回避を行った。刹那、機体真横を光線照射が掠める。間一髪回避できた風間だったが、ウォウルフズの突撃前衛の2機が光線照射の直撃を受け撃破され、速瀬も左腕の多目的追加装甲に照射を受け、左手腕を失った。

「—— もうこんなところにまでッ!」

死の光を回避した風間は咄嗟にガンラックに戻した17式砲を構え直した。マップを確認してみるとヴァルキリーズもウォウルフズも先程の光線照射で回避を優先したため、隊列が大きく乱れてしまった。このままでは各個撃破されてしまう。

「—— 2時方向、距離1000に突撃級及び小型種多数!」

(間合いを詰められたッ?!)

「—— 後手に回ったか……。全機120mm弾だ、出し惜しみはするな! ヴァルキリーズ後退しろ!!」

山崎大尉はすぐさま散らばった部隊を再結集させ、接近中のBE TA群に対抗しようとした。

「—— しかし、今我々が抜けては……」

「—— このまま帝国陸軍の名折れになるわけにはいかないのだ、それにそちらが後退してくれば我々も後退できる!」

「—— 了解、全機後退だ!」

伊隅は栖川とともに前衛二人の後退を支援しながら順次後退する。後援組も後退しようとするが、予想以上の速度で浸透してきたBE TAにその動きを阻まれてしまう。

「—— 伽耶、美冴さん、先に後退してください。後詰は私がします

！」

「17式砲で2機の退路を確保する。」

『——早く、禰子も後退しろ！』

『——禰子さん、早く！』

「まだお二人が安全圏まで脱出できていません、それまでは……」
風間は微速後退しながら尚砲撃を継続する。左翼から要撃級3体^{グリップブライ}が接近してくる。

「——くっ！」

「17式砲を振って57mm弾で要撃級3体を八チの巣にする。しかし、風間機の背後からさらに突撃級^{デストロイヤー}が迫る。」

『——禰子さん、危ない——ッ！——』

「——ッ？！——」

「すぐさま17式砲を構え直す、17式砲は砲身が長く重い取り回しが悪い。」

（——間に合わない……）

Episode 11 (後書き)

最近、大学が忙しくって全く書いている暇がありません……。土日を注ぎ込んで仕上げました(泣)

全2話よりは臨場感ある戦闘シーンが書けたかと自己評価しちゃったりしています。

甲20号作戦から始まった一連の話は次話辺りで一端の区切りをつけようと考えています。

もし、小説を読んで感じた事がございましたら、一言ご感想お願いいたします。

些細なことでも結構ですm(_____)m

では、また次の更新の際に……

Episode 12

風間は咄嗟に17式砲を構え直した。しかし取り回しの悪い支援砲は思った通りに扱えない。突撃級デストロイヤーがその速度を上げて突っ込んでくる。

（――間に合わない）

コックピット内にアラートが響き渡る。突撃級デストロイヤーの装甲殻が網膜一杯に広がる。

刹那、青白い閃光が突撃級の無防備な背中から左脚を焼き切った。

「――えっ？」

主脚を失った突撃級は横転し、風間の目の前で攔坐する。後続の突撃級デストロイヤーも次々と閃光に焼かれ、行動不能に陥っていく。その閃光は光線級レーザーのそれに似ていたが、それにしては照射時間が短過ぎた。

（今の一体……）

「――風間、生きているか?!」

「伊隅大尉! い、一応、無事です……」

未だに状況を理解しきれしていない風間。だが、伊隅やヴァルキリーズ全員も風間と同じようなものだった。

「――今のは一体何よ?!」

「――も、もしかして光線級レーザーの誤射?」

「――ありえないわ、今まで一度も光線級レーザーはBETAを誤射したことがない」

「――それに照射時間も短過ぎる。光線級レーザーのものではないぞ」

ヴァルキリーズの彼女らが口々に先程の閃光を議論している中、風間はあることを思い出していた。

（あの時の閃光に似ていた……）

風間の脳裏に初めて龍の会った時の事が蘇る。あの時、龍の操る機動兵器――アーマードコア・ネクストとの戦闘中風間は先程の閃光と酷似としたものを見たことがあった。

「まさか……」

『——伊隅大尉、海上を高速で飛翔する物体があり、まっすぐこちらに飛んできます！』

『——速度は……超音速に達しています！！』

『——待て敵味方識別装置に反応が』

戦域マップにデータリンクがIFF情報を表示される。

「——メサイア……00……？」

スカイ・ヴィクターの右肩のハイレーザーキャノンから残留コジマ粒子が零れ落ちていく。

（エネルギーは絞ったが、若干大気汚染をしてしまったな。日本近海と本土はレベル4の汚染制限地帯、PAは使用できない）

ハイレーザーキャノンの急速冷却を行いながら龍は戦域データリンクを関して光線級の密集地帯にVOBに搭載された多弾頭ミサイルをたたき込もうとしていた。

「——光線照射警戒地帯に突入、クラスターミサイル1番2番アクティヴホーミング！」

クラスターミサイルが雲を引きながら戦場に向かって突っ込む。

10秒後設定された通りに子弹頭ミサイルがホーミングされ指定範囲全域に降り注ぐ——戦域に浸透した光線級が一斉に照射を開始——

——ホーミングされた子弹頭を次々と撃墜されていく。龍の狙い通りに光線級の分布範囲に高濃度のレーザー乱反射物質が展開しアンチレーザーフィールドが形成された。

「光線照射確認、照射源特定……光線級密集位置誤差修正」

龍は素早く光線照射の照射源を逆算し、修正を加えた位置情報をデータリンクを関して戦域にいる全ての部隊・艦隊に送った。

「——次照射まで約10秒……VOB最終加速！」

残量推進剤全てを使いさらに加速するヴィクター。機体は一気にマッハ2を突破する。

「——VOBパージまで後3……2……1……」

スティック
操縦桿を引き絞る。

「……ゼロッ——」

ロッキングボルト強制排除、燃焼を終えたVOBをパージ——それと同時にOBを点火、VOBをバリア代わりにしてさらに急加速——複数の光線照射がVOBを貫く。VOBはそのまま爆発、が、龍はその爆発さえ加速に使い光線照射を回避——続けて乱数回避機動に移る。機体の擦れ擦れを光線級の光線が掠める。耐Gスーツの慣性軽減キャパシティを大きく超える慣性が身体に襲いかかる——肋骨とその中の内蔵の上にハンマーでも叩き落とされたような衝撃が走った。龍はそれを歯を食いしばって耐える。アラーとが途切れる——機体と己の肉体に多大な負担を掛けながらも龍は単機で50体近い光線級の照射を回避して見せた。

「——メサイア00よりヴァルキリー5、前方に120mm斉射！ランディングポイントを確認しろ——」

『少佐ッ?!』

「——ヴァルキリー5、風間——」

『——っ——!』

「——命令は達した、やれ——」

『——了解ッ!』

風間機が17式砲を構え前方の小型種を掃討する。BETA群に入った切れ目に滑り込ますようにヴィクターを操作。龍は即時反転し亜音速で後退しながらマシンガン及びアサルトライフルで後方のBETAを迎撃した。

「——風間、殿はこちらでやる。帝国軍と共に後退しろ、支援砲撃まで後60秒しかない」

『——りよ、了解』

風間は跳躍ユニットを点火し、帝国軍の不知火とともに後退する。「さて、第一波着弾まで40秒を切ったな——」

両門の火器を腰ためにマウントし両手を空けた。さらに両腕に装

備されているMOONLIGHTに残量エネルギー全てを回す。

（残弾が惜しい、それに砲撃位置に敵を押さえておくには……）
己を囷にするしかない。

「ブレードレンジ最大——いける！」

青白い光が剣の形を作り出す。ヴィクターは背部のブースターを
点火、QBで敵前衛に接敵した。その勢いのまま突っ込んでくる突
撃級の足回りを切り落としていく。7～8体の突撃級の脚を潰した
ところですからさま反転、両翼の頭を押さえに移る。

データリンクを開いて弾着の警報が鳴り響く。

（軍人なら迷いなく撃つぐらいの器量を持つてろよな）

だが、無視する訳にもいかない。適度に前衛の脚を止めると龍は
QBで後退跳躍——第二次防衛線、ヴァルキリースの待機する位置
まで後退した。

「5…4…3…弾着…今っ！」

涼宮のカウント通り、陸海から撃ち込まれた無数の誘導弾・砲弾
がBETA群のいる地表に着弾する。

「——はあ……」

張っていた緊張を僅かに解く。如何に龍が常人離れた化け物で
も単独で光線級の照射を回避しきり、一戦を行うのは心身とまかな
りの疲労を伴う。

「——少佐、ご無事だったんですね」

HUDに風間のほっとした顔が映し出される。

「——挨拶は後回しだ、風間。伊隅っ！」

「——はっ」

「——隊の被害状況は？」

「——速瀬機が被弾、主左腕を欠損。それ以外は全て軽微です」

「——残弾は？」

「——約4割です。17式砲は2割に達しています」

「——17式砲の補給を最優先、背部弾倉ごと交換しろ。銃身下部
のドラム弾倉の交換も忘れるな」

『——了解。宗像、弾倉の交換は消耗の少ない天上院から始める。
栖川、交換を手伝え。夜神は速瀬機の弾倉交換を』

『『『——了解』』』

ヴァルキリーズが慣れた手つきで補給コンテナから弾倉を取り出し交換作業を始める。その間に龍はヴィクターに搭載された高性能レーザーを使い、砲撃によるBETAの撃破率及びBETAの動きを確認する。

BETA群は砲撃範囲を避けるように両翼に大きく広がりつつあるが、砲撃をもろに食らっている前衛は完全に足を止める事に成功している。だが、未だ光線級^{レーザー}は生存中であり、砲撃も何割かは無効化されている。

（——光線級^{レーザー}の浸透率が高過ぎるせいで砲撃密度が低下しているのか……両翼に延びようとしている後方の頭を押さえられていないな）

このままでは戦域がさらに東西に延びてしまう。これ以上戦域が伸びる事は砲撃密度の低下と戦力の分散を招く。しかし制圧砲撃の真っ只中を突破して両翼に伸びつつあるBETA群の頭を押さえるのは容易なことではない。それに敵の数から言って、光線属腫^{レーザー}の排除無しでは最早支援砲撃の効果は期待できない。今後も上陸が続くであろう事を鑑みると、今の内に手を打っておかなければ対応が後手に回ってしまうのも事実。

（——鎧衣が予定通りに仕込みを終えているのならあちらに任せた方が……）

だが、いくら前もって準備が済んでいるからと言っても即応できるほどの機動力はない。それにこのタイミングで仕込みを使つては狙い通りの効果は望めない。

「……——メサイア00よりCP^{「マインドポスト」}、涼宮！」

『——こちらCP、涼宮です』

「——砲撃で脚が止まっている内にB-11個体群を包囲殲滅する。東西に延びる頭を押さえられる部隊はあるか？」

『——西の突出した個体群の処理は帝国陸軍第87戦術機甲大隊が

対応中』

「——東は？ 個体数の規模でいえば西の2倍はある」

『——無理です、少佐。現在旧福岡市街近辺は敵の大規模上陸及び激戦区です。現在即応可能な部隊は帝国近衛軍一個中隊のみです』

「——帝国近衛軍だと……？」

なぜ、中隊規模の近衛部隊が……。龍はすぐさま思考をめぐらした。インベリアルロイヤルガード帝国近衛が戦場にいること事態は珍しくない。將軍家や五摂家等要人警護が主任務の独立武装組織だが、彼らが戦場で率先して前線に出る事が多い。要人警護といっても帝国近衛軍に所属する衛士は帝国軍から引き抜かれた生え抜きのエース達であり、五摂家から出てきた者も年若く優れた衛士としての実力と指揮官の才能を持っている。また、帝国近衛の参戦には士気高揚などの副次的な効果もあり、帝国にとって近衛部隊はなくてはならない存在であると言える。

理解に苦しむお国柄だが、近衛部隊の実力は過去の戦果を見れば明らかであり、恐らく帝国近衛とまともに殺り合えるのは、特殊戦部隊かエース級の集まりであるアグレッサ―部隊ぐらいであろうと龍は考えていた。

この場にはいるのもそういったお国柄が関係しているのだろうが、中隊だけというのには引つ掛かりを覚えた。

（実験部隊か試験部隊か？ いや、どちらにしてもこちらにとっては好都合か……）

龍の口角が上がり、顔から笑みがこぼれた。

『——草薙少佐、弾薬及び推進剤の補給、完了しました』

タイミングよくヴァルキリーズの補給作業が終了した。龍はすぐさまCPの涼宮を呼び出す。

「——メサイア00よりCP、帝国近衛の中隊に東に突出したB-11E群の頭を押さえるように指示しろ。最優先だ」

『——こちらCP、帝国軍とは指揮系統が独立しているので干渉はできません』

ヘッドクォーター

「――涼宮、HQに直接打診しろ。向こうには話を通してある」

「コマンドポスト」

「――CP了解」

「アテンション」

「――全員、傾注！」

HUDにヴァルキリーズのウィンドが表示される。

「――これよりヴァルキリーズ及びメサイア00は東に突出したB-11E群を叩く！　また先行して帝国近衛軍一個中隊が遅滞戦闘を開始する。我々はこれを支援しつつ共闘、B-11E群の進攻を止める！」

「『了解っ！！』」

「ジャンプ」

「――跳躍ユニット点火、全機、匍匐飛行！　制圧砲撃の間を縫っ

NOE

てB-11E群の最前衛に回り込む――ッ！」

7機の青い不知火が爆音を轟かせながら次々と飛び出した。龍もヴィクターのOBを起動させ、それに続く。

「オールドフースト」

その間にも海岸沿いには、まるで津波のようにBETAが押し寄せていた。

時を同じくして……。

旧福岡市街西部に展開し、BETA上陸開始時からたつた一個中

インベリアルロイヤルガード

ホ

隊でBETA上陸を防いでいた帝国近衛軍中央評価試験部隊――白

ワイトファングス

デストロイヤー

グリップライ

き牙中隊は突出してきたB-11E个体群の前衛――突撃級や要撃級で構成された一群と会敵、近接戦入り乱れる乱戦に纏れ込もうと

していた。

「く……ッ……――第参小隊後退！――第壱小隊カバーに入れッ！」

ホワイトファングス

たかむゆい

グリップライ

指示を飛ばす白き牙中隊中隊長――篁唯依中尉は目の前の要撃級

の胸を装備した74式長刀で両断――背部ガンラックに懸架された

87式突撃砲を前面展開――36mmチェーガンで群がる小型種を

デストロイヤー

一掃する。さらに唯依はこの間に突撃級の回避機動までやってのけていた。だが、いくら彼女の操縦技術が優れていても――優秀な部

下がいても圧倒的な物量で全てを飲み込もうとするBETAの動き

を封じるのは困難だった。

レットアラート

ジャンプ

ロケットモーター

警報——反射的に唯依は跳躍ユニットの噴式補助主機と機体の重

グラッ

心移動、両腕のモーメントを利用して急反転——後方には3体の要

ブラ

撃級が接近——1体がその前腕を振り上げ唯依機に襲いかかる。ダ

グラッブラ

イヤモンド以上の硬度とカルボナードを凌駕する靱性を持つ要撃級
の前腕は74式長刀の切れ味を持ってしても両断するのは難しい。

APFSDS

辛うじて120mm装弾筒付翼安定徹甲弾で貫通する事も出来るが、

堅強な前腕をともに食らったらどんな戦術機でも一撃で致命傷と

グラッブラ

なる。唯依は急速反転の勢いをそのままに、抜刀の要領で要撃級の
前腕を跳ね飛ばす——さらに間合いを詰め、切り返して要撃級の首

グラッブラ

を切り捨てると、まるで川の流れのように次々と要撃級を切り伏せ
ていった。それはまるで日本の武芸や能のような美しく淀みのない
動きのようだった。高い操縦技術、そして彼女が体得した剣術の技
無くして今の動きは出来なかったであろう。

ウイング・スリー

「——隊形鶴翼参陣ツ——隊形を維持しつつ微速後退！」

ホワイファンクス

ウェッジ

唯依の指示に従い白き牙中隊は凹の様な隊形に変化する。傘型と

ウイング

は逆で両翼端を前方に出した隊形の鶴翼型は防御——特に包囲殲滅
に適した隊形だ。

各機87式突撃砲を斉射——

グラッブラ

浸透してくる小型種を120mm散

キャニ

スタ

弾で吹き飛ばし、群がる要撃級の脚を36mmチェーガンの速射で
砕く。だが、個体数が優に数千体を超すB-11E群の進攻は全く
止まらない。

(くっ、せめて武御雷があれば……！)

唯依は操縦桿を強く握りしめた。

ホワイファンクス

唯依ら白き牙中隊は今作戦に愛機である武御雷ではなく不知火の

ホワイファンクス

改修型——不知火壱型丙で出撃していた。彼女ら白き牙中隊はつい
最近までとある試作戦術機携帯火器の試験を行うためこの不知火壱
型丙に搭乗していた。そのため強化装備の蓄積データと武御雷側の
蓄積データとに差異が生まれ操縦に僅かながらの誤差が生まれてし
まっていた。これは戦術機に採用されているフィードバック型の間

接思考制御最大の欠点であり、多くの技術者が頭を悩ませている問題でもある。これは新たに製造された機体や前搭乗者のバックログが残存している機体に搭乗した時に発生する現象で、クリアするには双方のデータの誤差が修正されるまでデータを蓄積——つまりある程度の慣熟訓練を必要とする。だが、甲20号作戦直前まで試験を行っていた白き牙中隊にはそのような慣熟訓練をしている余裕が無かった。戦場ではほんの僅かな感覚のズレ——隙すら死を招く原因となる。結果、白き牙中隊は試験用の装備を実戦装備に換装するだけで実戦可能で、慣熟訓練の必要のない不知火壱型丙での出撃を余儀なくされた。だが、新兵器のテストベッドにも利用される不知火壱型丙の性能は悪いものではない。衛士を選ぶ機体ではあるが、そのスペックはベースとなった不知火よりも格段に向上している。

だが、不知火の改修機といっても所詮は改修機止まり。無理矢理ジェネレーターを大型化して大電力を確保した不知火壱型丙は駆動系出力を15%向上させ、跳躍ユニットの換装で困難な仕様要求であった不知火を越す近接格闘能力と生存性を獲得したが、代わりに想定活動時間の減少やピーキーな操縦性等々多くの問題点を抱えてしまった失敗作となってしまった。確かに、欠点に目を瞑り、その欠点を補える衛士が搭乗すれば、不知火壱型丙は礎となった不知火以上の性能を有している。だがそれでも究極の近接戦戦術機の名で名高い武御雷には遠く及ばない。根本的なスペックが違い過ぎるのだ。

勿論、唯依はそのような事を理由にして現状の言い訳などしないだが、機動制御や攻撃モーションの節々で感じられる遅さの事を考えるとどうしてもそのような考えてしまう事もまた事実だった。

「駄目ッ、敵の数が多過ぎて対応しきれない！」

「火線を散らすなッ、只でさえ敵の数が多いんだからな」

「敵との相対距離600を切りました！ このままでは…」

「く……っ」

唯依は歯を食いしばった。はやり中隊程度でこれだけのBETA

を抑え込もうとした事自体間違いだつたのだ。このままでは遅かれ早かれBETAに飲み込まれ全滅することは必至。かといって前線を引き下げてもHQからの敵命に逆らってしまう事になる。HQからの情報によれば現在に来援部隊が急行中らしいが、いつ到着するのかどれだけの戦力なのかその当たりの情報は全く伝わっていない。唯依はいつ来るとも知れない来援に苛立ちを覚えながらも砲撃を続けていたが、突如左手にホールドしていた87式突撃砲の36mm弾が底を付いたことを知らせるメッセージウインドが立ち上がる。

（――何たる失態だッ！）

己が新任衛士のような初歩的かつ致命的なミスを犯したことを失跡しつつも彼女は冷静に空になった弾倉を破棄、背部ガンラックの副腕で弾倉交換を開始する。

「――ホワイトファング1、弾倉交換ッ――ホワイトファング2、援護！」

『――ホワイトファング2、了解』

副長であるホワイトファング2――雨宮中尉がホワイトファング1の前に出て群がるBETAを防ぐ。このような状態でも冷静さを感じさせる彼女の声を聞いた唯依は多少なれど冷静さを欠いていた事に気づき、さらに自己嫌悪で心を乱した。彼女は自分より年上であり、経験も豊富であるのだからこのような状態でも場に流されず己を律する術を心得ていて当然だが、それに甘えることは中隊長である唯依には出来ない。いや唯依自身、そんな己の内に秘めた弱さを肯定するような真似をしたくなかった――出来なかった。自分は栄えある帝国近衛軍の衛士であり、また簗の姓を名乗る者として強く有らねばならないのだから……。

唯依はすぐさま無駄な思考を切り捨て意識を集中した。今はまさに戦闘中であり、中隊長である己がこのような体たらくを見せるわけにはいかない。

「――ホワイトファング1、弾倉交換終了ッ」

時間にして十数秒、だが戦場ではコンマ数秒でも生死を分かつ。

唯依はそのことを頭の中で復唱し二度とその様な過ちを犯さないと強く自分を戒めた。

『——敵さらに増加！ 駄目です、戦線が押し戻されますッ』

レーダーと振動探知機のデータが、個体群の規模が旅団クラスにまで膨らんだ事を唯依に坦々と伝える。

『——戦車級接近ッ、数は600以上！』

『——第壹小隊、120mm散弾斉射ッ！』

散弾の無数の弾子が炸裂し戦車級や闘士級、兵士級等複数の小型種を吹き飛ばす。だが、すぐさま後続がやってきて仲間の死骸を乗り越えてくる。BETAご自慢の物量戦が身に染みてよく分かる光景だ。

『——相対距離300を切りましたッ』

『——全機短距離後退跳躍、500m後退！——第参・第貳・第壹小隊の順だッ！』

唯依の指示に従い、第参小隊が先に後退する。この手の後退戦術では、一度に全機後退することも考えられるが、それをする的一瞬间ではあるが砲撃に間が出来てしまうリスクがある。他部隊からの援護が望めるのならそちらの方が隊員への危険度を幾分少なくすることが出来るが、現在白き牙中隊は孤立無援に近い状態……どうやつても援護はない。だからこそ後退時のリスクを軽減するため、小隊単位での後退が戦術的には正しい判断であり、唯依も当然そう考えた。

後退した第参小隊に続き、第貳小隊も噴射跳躍で短距離後退跳躍——同時に36mmチェーガンで第壹小隊の援護を行った。後援の第参小隊も第壹・第貳小隊を援護するため、87式支援突撃砲による精密射撃で要撃級や突撃級の脚を撃ち抜く。

『——隊長、先に後退をッ、ここは私が！』

『——雨宮中尉……ッ！』

一瞬躊躇した唯依だが、この判断は副官である彼女に理があると考え、すぐさま後退行動に入った。

（自分が早く後退すればそれだけ中尉の危険も軽減できる——ッ）
跳躍ユニットに推進剤を回し点火——FE108-FHI-22
5エンジンがその高出力で19mはある不知火を後方に押し出した。
この後唯依は自分の行動を強く後悔することとなる。

『——キャッ！』

「——雨宮中尉ッ?!」

通信越しに彼女の悲鳴が聞こえた。前方200mで雨宮機が小型種に取りつかれ、押し倒されようとしている姿が唯依の網膜に投影される。

唯依が後退した瞬間、死骸の壁をまるで突き破るかのように小型種が飛び出してきたのだ。雨宮中尉はそれから唯依機を守るため、自機を囫に使い敵を引きつけた。だが結果、小型種の接近を許し、あまつさえ取りつかれるという絶望的な事態を招いてしまった。

「——中尉、動くなッ——今助け——！」

36mmチエーガントリガーの引金を引こうとした唯依の指がピクツと動きを止めた。雨宮機に取りついた小型種——特に戦車級タンクは主脚に集中している。そして主脚内には跳躍ユニットジャンプのための推進剤タンクが存在する。もし36mm弾がそのタンクを貫通したら……。戦術機のような巨大な機体を動かす原動力である推進剤が引火・爆発したら雨宮は愚か唯依も命の保証は出来ない。

（くっ……ならば、短刀で——ッ）

87式突撃砲を投棄——補助主機噴射で一気に急制動、そのまま前方加速——左腕ナイフシース副腕展開、短刀装着まで後コンマ5秒……。

（——遅い——ッ——！）

武御雷なら既に装備し——いや固定兵装ならすでに戦車級タンクを切り裂けている筈だ。雨宮機が戦車級タンクに取り囲まれ、機体の複合装甲が噛み砕かれていく。

「——雨宮中尉ッ！」

刹那、雨宮機の胴体を食らっていた戦車級タンクの胴が粉々に吹き飛ん

だ。

「——ッ?!」

次々と機体の上面に取りついていた十数体全ての戦車級が血肉に還元される。それが狙撃だと認識できた時には雨宮機に取りついていた戦車級は数体ほどこに残っていないかった。唯依は残った戦車級を駆逐すると雨宮機と共に後退した。そこに滑り込むように一機の機体が飛来する。戦術機にしては小さく、二周りは小型な機体だが、その機体が飛ぶ高度は光線照射危険高度に達している。

（あの高度では——ッ!）

唯依の予想通り、複数の光線級が小型機を捉えた。光線級は初期照射という低出力の光線で目標を捉えたから数秒のタイムラグを挟んで最大出力照射を行う。そして小型の戦術機は十体近くの光線級から初期照射を受けていた。数秒後、眩い光があのだ戦術機を……。

「——えっ?」

唯依は我が目を疑った。目の前であのだ戦術機は超高速で三次元多角機動と乱数回避を行い、十はあろう光線照射を回避して見せた。

「——光線級補足、ポイントE-21-45からE-23-47にバックアップ支援砲撃を要請する」

データリンクを閉じてあのだ機体のパイロットの声が唯依の耳に届いた。その声は冷静で達観している——そうまるで歴戦を生き抜いた老兵士のそれと同じように感じられた。

「——こちらは国連軍派遣部隊A-01部隊所属、草薙龍少佐だ。

——その帝国近衛軍、後詰はこちらが引き受ける。さつさと後退しろ——そんなところに突っ立っていられては邪魔で仕方がない」

「——なっ?!」

礼儀も何もない、只非礼としか取りようのない言葉を投げかけられた唯依は自分の頭に血が昇るのを感じた。

「——この場は我ら近衛軍が!」

「——後方に下がって弾薬・推進剤の補給を済ませ、態勢を整えろと言っている。その間はこちらで戦線を維持する……そう言ってい

るのが理解できないのか?』

通信ウィンドは音声だけで画像データは網膜に投影されていないが、相手の衛士がイラついているのだけは感じ取れた。

『メサイア00よりヴァルキリーズ、E-31-67に防衛線を張る。帝国近衛軍の後詰だ、恩を売るためにも防衛線を抜かれるなよ』

『『『——了解ッ!』』』

オープンチャネルから息の揃った応答が聞こえる。聞こえた声は皆、唯依とさほど変わらない妙齡の女性の声だった。

「来援……しかし、これは?」

重金属雲で精度の落ちたレーザーが友軍のIFF信号を拾う。光線級の照射を避けるためか、全機匍匐飛行で戦域に突入してくる。

(あの機体色は……ッ!)

どこまでも澄んだ蒼……。

「UNブルーッ!」

来援に駆け付けたのはUNブルーと国連マークをした日本の戦術機——不知火の7機編隊だった。

『——60秒遅れ、まあ及第点といったところか……伊隅!』

『——はっ』

『ヴァルキリーズはそのまま突入、敵前衛を潰せ。以後、隊形鶴翼型で遅滞戦闘、帝国近衛軍の補給時間を稼ぐ。帝国近衛に恩をたたき売るぞ』

『——了解、全機聞いたな? 隊形傘型で敵中に強行突入、敵前衛をなぎ倒す。その後、短距離後退跳躍で後退し、隊形鶴翼型で遅滞戦闘だッ!』

『『『——了解』』』

UNブルーの不知火7機が匍匐飛行のまま敵陣に強行突入する。

だが、来援の国連軍部隊は中隊規模でありながら既に5機も既定数を割っている。そんな状態でこのような強行策に出るのは余り危険——唯依はそう思い、その命令を断行したメサイア00に怒りを滾

らせた。だが、UNブルーの不知火は唯依の想像をはるかに凌駕した動きを見せる。

見慣れぬ重火器を背負った不知火3機がその銃口を敵に向ける。それを支援する形で展開した突撃前衛、迎撃後衛装備の不知火4機が重装備の不知火に取りつこうとするBETAを駆逐する。三方から包囲されようとしているのにもかかわらず、UNブルーの不知火は全くそれに動じず、着実に危険度の高い個体のみ排除している。

「——今だ、宗像ッ！」

「——了解！——全機57mm斉射つ、撃てッ！！」

4連装の重機関砲が火を噴く——砲弾の直撃を受けた戦車級が木っ端微塵になり、脚を砕かれた突撃級や要撃級が次々とその場で倒坐していく。3機による同時斉射は接近中だったBETA群を完全に押しとどめ、僅か重数秒の間にBETAによる肉壁を築き上げた。（何という火力——99型砲には遠く及ばないが、それでも突撃砲とは比べ物にならない前面制圧能力だ……！）

「敵の隊列が乱れた、各機近接戦闘で仕留める！ 宗像はそのまま砲撃を継続。敵を一匹も逃すな、血祭りに上げてやれ——ッ！」

「——了解ッ！」「」

近衛軍の唯依が見ても彼ら——A-01部隊の戦いは見事なものだ。規定数の半数ほどの戦力で、一時的とはいえ唯依達が苦戦していたBETA群の進攻を食い止めている。

（あの部隊の衛士は——優秀だ……）

思わず自分のそれと比較し、自己嫌悪に陥る唯依。父親譲りの悪い癖が出てしまった。だが、そんな事を許すほど戦場は——龍は優しくはなかった。

「——いつまでそこに突っ立っているつもりだ、ホワイトファンゲ1？ 戦場に脳無しがいられる場所はどこにも存在しないぞ」

「——ッ！——第弐・第参小隊は後退して補給コンテナを回収を集められるだけ集める！ 第壹小隊は今から国連軍派遣部隊の援護に向かう！」

『『『——了解！』』』

唯依の指示に従い、第貳・参小隊が補給コンテナ回収のため移動を開始する。

『——篁中尉……』

「——雨宮中尉、分かっている……大丈夫だ」

氣遣ってくれる副長の雨宮中尉に唯依は微かに笑って答えた。そして心の中で龍の言葉を反芻し、唯依は自らの心を引き締めた。まだ戦いは始まったばかりここで折れる訳にはいかない。中隊のためにも、祖国のためにも——何より自分のためにも。

「——右翼の敵を叩く。全機着剣、私に続け！！」

74式長刀を装備した4機の不知火壱型丙が武御雷と同型の高出力跳躍ユニットで加速し、戦車級と要撃級の混成群に切り込んでいった。
ジャンプ
タンク
クラッブラー

A-01部隊とともに近接戦闘でBETAを切り殺していた龍は前線に再突入する近衛部隊を見て喚息をついた。

「——やっと動いたか、どうやら名ばかりの屑ではなかったようだな」

通信で聞こえた声から察するに、あの部隊の隊長はヴァルキリーズの新任達……風間達と同じか少し年下なのだろう。

（恐らく、武家でも……五摂家とか呼ばれる上流階級に近いしい者……経験も無いのに部隊長をしているのはそのせいかな）

理解に苦しむ……。実力や経験ではなく階級がものをいう世界……国家が消滅し、パックス・エコノミカ——企業による全体支配の世界を生き抜いてきた龍にとってそのような下らない支配形態・上下関係は非効率で非経済的でしかなく理解不能なものだ。

（ま、出来ないなりに何とかしようとはしているみたいだが……そんな甘い事を言っていられるのは非戦争下の時だけなんだよ）

今の日本は紛れもなく戦争中だ。それも終わりの見えない……ま

るで泥沼のような戦争……。龍にとってそれは当たり前過ぎるものだが、つい数年前まで仮初の平和を享受していた日本は違う。龍はそれすら経験したことはないが、その仮初の中での戦争とは非日常——少なくとも間接的、遠いものという程度の認識であった事だけは想像できる。そしてその想像は事実と対してずれてはいないだろうとも……。

「——くだらない……」

そんな言葉で龍は無意味極まりない思考を吐き捨てた。こんな事を考えても何の利益にもならない。今やるべきは目の前のB-11E群の進攻を食い止める事、それだけだ。それに——。

（予定時刻までまだ時間がある。それに国益に敏いあの国がこのまま傍観を決め込むとも思えない）

後半は只の感だが、それが起きる可能性はゼロではなく、意外に高いかもしれない。最もその時までこちらが持てばの話だが……。

「——ふん………メイサア00よりホワイトファング1！」

ホワイトファング1——唯依に秘匿回線で通信を開く。——その時のためにも仕込みはしておかなければならない。

Episode 12 (後書き)

長らく滞納してしまいませんでしたm(_ _)m

本当は九州戦線終了まで書く予定だったのですが、予定以上に文章が膨らんでしまい、これ以上滞納するのもアレだったので、適当な場所で分割して出すことにしました。

そのため、次話も戦闘の続きです。ご了承ください。

Episode 13

唯依側が通信に応じたため通信ウィンドが開かれる。そこには幾分表情の固い少女の顔があった。

（若い——これで中隊を任されているとは……）

「——現状を見る限り、戦線を維持するには二個中隊で連携しなければ不可能だ」

『——言われずとも分かっている』

「——そこで打開策として一つ愚案がある」

『——その前に顔を見せる。それで話を聞けと言っても全く信用できない』

——馬鹿正直な奴だ。

「——分かった」

今まで音声だけだったセキュリティロックをホワイトファング1との秘匿回線のみ解除する。通信画面越しに彼女がピクリと表情を変えたのを龍は見た。大方、自分の眼帯でも見て驚いたのだろう。

「——時間が惜しい回りくどい説明はなしだ」

『——っ』

「——俺がヴァルキリーズ、ホワイトファングズ両部隊を指揮する。だから、そちらには、俺の指揮下に入ってもらっ」

『——ッ！ どういうことだ?!』

「——説明は省くと言わなかったか？——今まさに自分たちの周りで激戦が起き、状況が悪化の一步をたどっている中、このような無駄な言い争いをするつもりか？——少しは周りを客観視して状況把握することぐらいしろ……軍人ならな」

『——っ、説明を要求する』

「——二個中隊合わせて19機、俺を足しても20機だ。この少数で数千を超すBETAを止めるには、効果的かつ効率的な戦術が必要であり、両部隊の指揮を統合する事が現状最も現実的な手段だか

らだ」

『——しかし、本来別々の指揮系統であるのを統合するのは』

「——緊急事態だ、現場裁量で判断するしかない。それともそちらにはこれ以上の名案があるとでも？」

『——しかし……』

「——戦域が拡大するに従って飽和砲撃の濃度も低下している。それにどちらにしてもそろそろ弾薬が底を付く頃合いだ。自動装填機能がある艦砲やVLSは兎も角、MLRS部隊や地上の火砲は再装填に時間がかかる。戦況は文字通り悪化の一步だ」

『——……』

「——実戦経験が浅いなりに足掻いていたみたいだが、そこが限界のようだな」

『——なッ！』

「——プライド自尊心すぎるのもいい加減してくれ、迷惑だ。それとも、誇り高い近衛軍人は、同じ戦場に立っている国連軍俺たちを米国の犬だとして見て聞く耳も持つ気はないと？——大層な自尊心だな」

『——……っ！』

唯依は管制ユニットの操縦桿を握りしめ、屈辱で歯を食いしばっていた。龍の言葉が、唯依の心の奥底にあった感情を言い当てていたからだ。

「——部下を殺したくないのなら黙って従え、経験者の命令は聞くものだ……」

『——ッ！』

ドスの入った龍の言葉は唯依を黙らすのに十分な威力があった。

「——勝ちたいのなら下らない感情は捨てろ、それが出来ないのなら軍人を止める」

『——っ！』

「——異論ないな？」

『——了解しました』

「——よし。——これから指示を出す、以後それに従ってくれ」

「――」

無言のままの唯依は頷くことでそれに答えた。龍は特に何も言わずにそのままにしておいた。理が通っているのはこちら側であり、子供の我が儘に付き合っただけでやれるほど自分は寛容ではないし、何より状況がそんな事を許さない。

「――絶対条件として17式砲がやられる事だけは避けたい。そのため一個小隊、支援砲撃部隊に付けて欲しい」

「――どの小隊を回すかは？」

「――任せる。ホワイトファングズの隊長は君だろうか？」

「――了解」

「――残りは前衛との共闘して砲撃部隊の両翼をカバー、基本隊形は鶴翼型とするが、臨機応変な対応を期待する。細かい事は前衛組と調整しろ」

「――了解」

彼女も思うところはあるだろうが、とりあえずはこちらの思惑通り動いてくれるようだ。

「――俺はこのまま単機で戦列に参加する」

「――えっ？」

「――先程の機動は見ているだろう。光線級にやれるようなへまはしないさ」

「――し、しかし……」

「――安心しろ、退き時は心得ているつもりだ――っ！」

リーダーサイトが新たな反応を捉える。龍はそれを確認すると思考を切り替え、食い下がる唯依の言葉を遮った。

「――どうやら団体客のご到着の様だ」

通信ウィンドに焦りの見える風間の表情が表示される。

「――少佐っ、要塞級があらたに20体以上現れました！ 後続も次々と上陸していますッ！」

「――こちらでも確認している。全機、要塞級の触手に注意しつつ、敵を迎撃しろ。要塞級に気を取られて懐に入られるなよ」

（要塞級が20体か……全てを撃破するのは時間がかかり過ぎる…

…なら…！）

龍は背部OB起動——要塞級に向かって突っ込んだ。

「——少佐っ？！」

「——要塞級の脚を潰して擱坐させる。手前の4体を擱坐させれば後続の接近をいくらか遅延できるはずだ」

「——単機では危険過ぎます！」

「——敵は要塞級だけじゃない。ここを敵に抜かれたら旧福岡市街に展開している機甲部隊の横腹に敵が食いつく。それだけじゃなく後方の支援砲撃部隊が危険晒される」

「——止める、風間！——少佐の言い分が正しい」

「——伊隅大尉……」

「——しかし、少佐、露払いだけはさせてもらいます」

「——ふ、好きにしる——ただし、こつちには当てるなよ？」

「——無論です。——速瀬、宗像、進路上の敵を掃除するぞ！」

「——了解ッ！」

ヴィクターの右翼に速瀬機、左翼に夜神機が付く。

「——どこまで付いてこれるか、見物だな……」

ペダルを踏み込みヴィクターを加速させる。両腕の武装を腰のガンラックにマウントし、近接兵装であるMONOLIGHTに余剰エネルギーとコジマ粒子を回す。

「——仕掛けるッ！」

両腕のレーザーブレードが突撃級の脚部を切り裂き、要撃級の胴を両断し、そのブースターで戦車級を吹き飛ばす。

「——夜神ッ！」

「——了解ですっ！」

両翼のBETAを速瀬・夜神が掃除し、ヴィクターに食らいつこうとする敵を防ぐ。さらにそれを支援するため後方の宗像や風間・天上院達が遠距離支援砲撃、伊隅・栖川が遊撃に回り敵をかく乱する。一瞬敵の隊列に亀裂が出来る。

「——ここだッ！」

オーバーブースト
OB出力最大——最大加速で敵中を突破——要塞級の一群に接敵する。前衛の要塞級が一斉に触手を発射、一斉にヴィクターに襲いかかってきた。

「——温いな、攻撃とはこういうものだ！」

ウィップ
触手の間を三軸回転で回避——接敵した要塞級の柱のような脚部をレーザーブレードで切り裂く。

（ブレードが重い……大した硬度と強度だ——だが）

ヴィクターの敵ではない。連続で要塞級の脚を切り裂き、一体を攔坐——すぐさま反転、左隣の要塞級の頭を切り落とす——さらにヴィクターのブースター推進力を使い、頭を切り落とした要塞級を隣の個体ごと押し倒す。光線照射危険高度だが、要塞級に囲まれているこの状況なら照射の危険は低い。光線級はどんな状態でも絶対にBETAに誤射をしないからだ。

「——少佐、後ろですッ！」

「っ！」

クイックブースト
脚部のQBを起動——機体をその場で垂直軸反転——そこに触手が掠める。龍はそれをレーザーブレードで切ると、もう一体の要塞級の下部に取りつき、至近距離で胴と脚部の接合部にアサルトライフルの斉射を叩きこんだ。自重を支えきれなくなった要塞級はそのまま横転——倒れた要塞級の巨体をバリア側にOBを展開、急速後退で敵との相対距離を取った。

「チッ、数が多過ぎるか……！」

単機で4体の要塞級の無力化した龍だが、それでも全体の5分の1以下、以前不利なことに変わりはない。

「——全機、隊列を崩すな。——速瀬、夜神下がれ！——深追いつるなッ」

「——分かっていますっ、草薙少佐！」

「——下がるならとっくの昔に下がっているわよッ！」

（——かぶられたかッ！？）

『第壹小隊、孤立した国連軍機を救援する、私に続け！ 第貳小隊はその後方200で両翼をカバー、第参小隊は左翼の敵を押さえろ！』

『了解』』

龍の横を不知火壱型丙が8基の跳躍^{ジャンプ}ユニットを吹かして通り過ぎる。

「——ホワイトフアング1、勝手に持ち場を動くなッ！」

『——』

「クソ、秘匿回線を切りやがって！ これだから実戦慣れしてない奴は」

何のために他の機体のにレコードが残らない秘匿回線を使っていると思っっているんだ……。

（偽善を振りかざす事がどれだけ他者を危険に晒しているのか、考えて行動しろよな！）

ホワイトフアングが抜けた区域に敵が流入し始めている。辛うじて左翼の流れを一個小隊が押さえてくれているおかげで流入はわずかだが、それもいつまで持つか分からない。

「——伊隅ッ、しばらく5機で戦線を維持してくれ！」

『——少佐?!』

「——2分で戻る、頼んだぞ!!」

龍は再び前線に切り込む。

前線に取り残された速瀬・夜神の退路を確保した唯依は二人が相手をしていたBETAを引き受け二人を後方に下げた。

「——国連軍機、ここは我ら近衛が引き受ける！」

『——すまない!』

『——救援、感謝します!』

後退跳躍^{バックフリースト}で後退する2機。両機とも弾薬・長刀ともに限界が近づいていた。このタイミングを逃していたら危なかっただろう。

（敵の数が多い、我々でも長くは持たないか……）

「——第壹小隊は第式小隊の援護を受けつつ後退、陣形を乱すな！」

突撃砲を斉射しながら後退する唯依達。だが、そこに右翼から迂回してきた一群が食らいつく。

「——くっ、第式小隊、右翼を迎撃！」

後方の第式小隊が一齐に120mmで砲撃——だが、突撃級の堅い装甲殻によって散弾は愚か装弾筒付翼安定徹甲弾すらはじき返されてしまう。最高速度170km/hを誇る突撃級の突貫を受ければどんな戦術機でも一撃で致命傷となる。唯依は隊員に回避機動と各個撃破の指示を出す、突撃級の突貫を回避したため小隊が大きく散ってしまった。

（不味いっ！）

隊を再集結させようにも突撃級の後続が次々と現れ、分断されてしまう。そこに要撃級や戦車級が現れ、唯依達に殺到してくる。

「——さっさと下がれ、死にたいのかッ！」

通信越しに激が飛ぶ。刹那、唯依の目の前にいた要撃級の胴が吹き飛び、低空で飛来してきたミサイルが子弾頭をばら撒き、周囲のBETAを一掃した。

「——退路は確保した、後退しろ！」

両腕の火器を斉射しながら唯依の前に躍り出た龍——スカイ・ヴイクターが爆風の被害を受けなかった残敵を掃討していく。

「——頭数に入れているんだ、勝手に死なれると迷惑なんだよ！——分かったのならさっさとしろ、後ろもそう長くは持たないっ！」

龍の言うとおり、後続の部隊は唯依達の抜けた分を埋めるため、かなり無理をして隊を分散し敵に対処していた。だが、火線が散った分ギリギリと間合いを詰められつつある。このままでは後退がままならないだけでなく、戦線維持自体難しくなってしまう。

「——自責の念に駆られるのは戦闘が終わってからにしろ！——全機、補助主機噴射で急後退ッ！」

「——っ、了解ッ！」

ジャンプ

ロケットモーター

唯依は跳躍ユニットの噴式補助主機を点火、ヴィクターがこじ開けた退路を使つて後方に下がった。

（私の判断は……間違つて……いた…のか？）

敵に囲まれてるといふ心理的にも厳しい状態から解放されたからか……龍に自分の行動を否定されたからか……唯依は何故かそう考へてしまった。そして、そう考えた自分自身が無性に腹立たしかった。

唯依達を後方に逃がした龍はそのまま遊撃に回り、後続の要塞級を迎撃に移った。後方では伊隅と唯依が戦列を組み直し、敵の動きを封じてくれている。

（とはいえ……）

フォート

11体目の要塞級を攔坐させた龍はレーダーに映る敵の光点を見て頭を抱えなくなった。

フリップ

（安易に最悪という言葉を使いたくはないが……）

再び戦列を整えた龍達だが、状況はまさに最悪の一言だった。龍自身がヴィクターの機動性を使った遊撃に回り、敵を攪乱したところで突撃砲と支援砲の斉射を加えるという方法で辛うじて戦線を維持してきたが、それもそろそろ厳しくなっている。それでも唯依達がかき集めた補給コンテナのお陰で弾薬と武器だけには十分な余裕があった。ここで弾薬不足という事態にまでなっていたら、流石の龍の八方塞がりだ。それに唯依が無理をして速瀬や夜神達を助け出してくれた事も大きかった。欠員が出るのと出ないのではメンタル的な影響度が大きく違う。

コマンドポスト

『——CPよりヴァルキリー・ホワイトファング両部隊へ、監視衛星による観測によつてBETAの第四波上陸が確認された。上陸数は連隊規模、注意せよ』

（ここに来て、敵の増援……そろそろ潮時か……）

龍は秘匿回線をCICに繋げる。

『——少佐っ！』

そこに唯依か通信が入る。

「——先に言っておくが、撤退は許さん」

『——っ！？……これ以上この場での戦線維持は不可能と判断します』

「——その根拠は？」

『——連隊規模の上陸が確認されました。既に劣勢のこの状態、そこに数千体を超すBETAが雪崩れ込んできたら……』

「——却下する。ヴァルキリー・ホワイトフアング両部隊は現在の戦線を維持しろ。これは厳命だ」

『——少佐、私もそれには異議を申し立てます』

「——伊隅か」

『——我々だけで戦線を維持するのは最早限界です、少佐。一度撤退して後続と合流し体勢を整え直すべきです』

「——東には帝国陸軍に、後方には支援砲撃部隊。この戦域を^{ビケット}空ける訳にはいかない。それに後方に下がったからと言って補給や増援の見込みもない、今はどこもかしこもジリ貧だ。ここよりも戦線が押し上げられてしまっている西部なんて特に地獄だ。必然、補給も増援も危険度の高いところから優先される。だが、支援砲撃部隊の弾薬補給が完了すれば何とか戦線を押し止められるはずだ」

『——しかし、現に状況は緊迫しています！』

食い下がる唯依。龍の言い分も最もだが、彼女にも守らねばならない11人の部下にいる。そう簡単に龍の命令は受け入れられなかった。そして、伊隅もまた言葉にこそしていないが、同じことを考えていた。龍はウィンドウ越しに彼女たちの表情を見てそれを感じ取った。

「——安心しろ、何も無策でこんな無茶を通そうなんて考えていないさ」

『——えっ？』

「——どういことですか？」

リーダーが、南西から現れた複数の光点^{ブリッブ}を捉えた。その総数は裕に20を越している。

「——カードというものは切るタイミングが命、そう言うことさ」

「——こちらは、国連軍佐世保基地所属、第45戦術機大隊！ これより貴隊を援護する！」

南西より現れた光点^{ブリッブ}の正体は、九州の国連軍基地である佐世保基地所属の戦術機部隊による来援だった。

「——こちらは国連軍派遣部隊A-01部隊大隊長、草薙龍少佐だ、来援に感謝する」

来援部隊の参戦によって状況は好転した。大隊を構成する陽炎^{F-15J}二個中隊が血気盛んにBETA群に食らいつき、その後続に激震^{F-4J}一個中隊が張り付いてそれを援護する。佐世保基地からの来援はこの戦域だけでなく、激戦区である旧福岡市街や戦線が押されている糸島半島にも大隊規模の来援が戦列に参加していた。

「——全機、戦線は来援の国連軍に任せて、弾薬と推進剤の補給を済ませろ！」

「『『——了解ッ！』』」

一端後方に下がり、補給コンテナから弾薬と推進剤を補給する。

来援部隊が敵を押さえてくれているので、補給も安全に済ますことが出来た。龍もヴィクターを後方に下げ、最大出力でのレーザーブレードの連続使用によって、火を吹く寸前だったジェネレータの冷却を行う。残量僅かなコジマ粒子も再充填、機体の急速冷却も同時に開始する。

（まともな整備も受けずの連戦に長時間戦闘……よく持ってくれている）

ヴィクターは鉄原ハイヴ攻略後、最低限の補給と整備のみ済ませ、九州戦線に参加した。そのため、消耗の激しいヴィクターの駆動系が徐々に怪しくなり始めていた。

（まだ持つが、今後の事を考えたら、そろそろ退き時だな。夕呼に

怒鳴られるのも勘弁だし……」

——だが、その前にやらなければならない事がある。龍は戦域上に散っている光点とレーダーサイトブリッブに目を凝らした。

（——国連軍の増援で戦域内の光点は急激に増加……さらに、この重金属濃度なら……レーダーからの情報は当てにならないな）

——動くのならこのタイミング以外考えられない。

「こんなことなら外付けのレーダーサイトを増設して置くべきだったな」

龍はヴィクターに搭載された複数のレーダーとセンサーが拾った情報を基に三次元的なデータ処理を施した上で、戦域マップの光点ブリッブとそのデータを重ね合わせ、戦域内に紛れる僅かな動体反応を探し出した。

（——いた、間違いない。戦術機にしてはレーダー波反射が小さ過ぎる）

ここから南西方向に20km、南に広がる山地で高度が比較的高い位置だ。ヴィクターのOBオーバードフーストなら一瞬で移動可能な距離だ。

（——今ヴィクターの性能を米国に必要以上に知られる訳にはいかない）

「——伊隅、俺は別件で少しここを空ける。この場は任せたぞ」

「——少佐っ?!」

「——草薙少佐、どこにっ!?!」

補給中の伊隅と唯依が慌てた様子で龍を止めに入った。

「——悪いな、篁中尉。指揮系統はそちらに返上する。伊隅、お前もだ。今後、部隊の指揮は二人が担当してくれ」

「——少佐、どういうことですかっ?!」

「悪いが、説明している時間が無い。指揮系統は返上した。後は任せる」

龍は制止を振り切ると、背部OBオーバードフーストを起動させた。部隊を二人に任せた龍だが、一つやり残していた事に気付いた。秘匿回線を再び開き、ホワイトファング1に回線を繋ぎ、龍は伝え忘れていた事を口

にした。

「――篁中尉、忘れない内に礼を言っておく。指揮系統の委譲を承諾してくれたこと、感謝する」

「――っ!？」

龍の言葉に驚いたのか、それとも意外だったのか、唯依はまるで毒気でも抜かれたような顔をした。それだけ伝えると龍は通信を切り、ヴィクターの操縦に集中した。

（相手がこちらに気づいて行動を起こすまでが勝負――!）

龍はペダルを大きく踏み込み、スロットルを押し込んだ。

同時刻、戦場から少し内陸に入った脊振山地の山中で、帝国軍の目を盗みながら観測地点を確保していた戦術機部隊があつた。

「――ブラボー1よりCP、コマンドポスト予定の観測地点を確保、これよりフェイズ2に移行する」

『CP了解、帝国軍に見つかると厄介だ、通信は極力控えよ』

「――ブラボー1了解、通信終了」

通信を切った部隊長を緊張した趣でウィンドウに移る戦場の拡大画像を確認した。そこにはたった一機で10体を超す要塞級フォートと対峙しているヴィクターが映り込んでいた。

『――隊長、本当にあの機体が鉄原ハイヴを落としたというのですか?』

ブラボー4からの部隊間通信が開き、妙齡の女性の声が聞こえた。ブリーフィングで聞いた最新情報が未だに信じられないのだろう。しかし、それは仕方がないことだ。部隊長である自分もまた正直半信半疑だった。

「――ブラボー4、我々の任務はあのアンノウンの実態を調査し、その情報を持ち帰ることだ。それ以上の事は要求されていない」

『――失礼しました、隊長』

だが、今日の前で起きている戦闘を見る前と、見た後では全く違

う印象を受けた。あの機体ならそんな大事を起こしてもおかしくないと……。

（これは、祖国アメリカにとって強大な脅威となる）

単機でハイヴを落とすなど、前代未聞の出来事だ。これが仮に、真実だったとしたら祖国の受ける経済的・政治的損失は計り知れない。もしこれで忌々しいあの計画が勢い付いたら、我々の計画にも大きな支障を来たす事になってしまう。

（——いや、そんな事など有りえん。その確証を得るためにも奴の情報を集め、無事に持ちかえなければ……）

『——しかし、こんなに戦場に近くて、大丈夫なんですかね……』

『——おいおい、F-22Aのステルス性を疑うのかよ。上陸からここまで移動で捕まらなかったのに、静穏モードで見つかるかよ』

『——ああ、言われてみればそうだな。帝国の連中は皆脳無しみたいだしな』

ブラボー2,3が口々に帝国を小馬鹿にしながら笑いを堪える。

確かに、ブラボースが操るF-22Aのステルス性なら、戦場のど

真ん中にいてもまず見つかることはない。事実、見つかるリスクの高い移動中ですら、敵に発見されなかった。恐らく、レーダーに映

りもしていなかったはずだ。極限までレーダー波断面積を押さえ、

対レーダー波吸収拡散塗料を施し、廃熱に優れた高出力跳躍ユニツ

トを搭載し、静穏性を高めるためF-4一機が購入できるほど高価

な振動吸収樹脂を足裏に使用しているF-22Aはレーダー・セン

サーに捕まらないだけでなく、赤外線センサーや振動・音響セン

サーにすら捕捉されない圧倒的なステルス性を誇っている。そのス

ペックの高さはステルス性だけに止まらず、アメリカご自慢の砲撃

戦能力や超高速巡航等々、他の第三世代機にも劣らないスペックで

あり、ステルス性と合わせた戦闘力は他を圧倒する程である。F-

15と100回戦闘を行い、100回とも勝利したと言えば、F-

22Aの強さがよく分かるだろう。それが一個小隊四機、どんな戦

術機でも負ける事はない……ブラボースの衛士も後方の指揮官も、

ラフター

F-22Aを知る者全てがそう考えていた。

しかし、たった一人だけ、その考えと相反する思考を持つ者がいた、いてしまった……。

「——隊長、ターゲットが動き出しました。真っ直ぐこちらに向かってくるッ!?」

「——何ッ?! 間違いないのかッ!?!」

ブラボー4が悲鳴にも聞こえる声で、ヴィクターの接近を伝えた。

「——間違いありませんッ、ターゲットは現在1270km/hで移動中。このままでは……後一分と経たずに、ここに来ます——ッ
!?!」

ラフター

（——まさか、見つけたというのか……このF-22Aをつ?!）

「——隊長!」

動揺する隊員達、分隊長は己を律し現状考えられる最も現実的な手段を考えだした。

「——やむを得ん、全機コンバットオープン。我々でターゲットを破壊する!」

「——本気でですか?!」

ラフター

ミリター

分隊長はF-22Aの主機を戦闘出力に上げた。

「今、逃げても追いつかれるのは明白だ。なら、敵が我々の正確な位置を特定する前に、極静穏モードで包囲殲滅する方がいい」

「——しかし、我々の位置は既に……」

「——分かっている。作戦は、まずターゲットが有効射程圏内に入ったと同時に、私が跳躍ユニットを起動させる。ターゲットは恐らくそれに食いつくだろう。その瞬間を狙って包囲殲滅する。ブラボー12,3が山の尾根に陣取り、狙撃位置を確保。ブラボー4は私の後ろに付き、支援砲撃体勢を取れ。移動は静穏モードで行え、ターゲットに位置を知られるな!」

「『了解ッ!』」

AMWS-21

ラフター

突撃砲を構えたF-22A三機が予定の配置に移動する。その後、山の麓から高速で上るターゲット——スカイ・ヴィクターが飛

来した。高度800m辺りまで上昇したターゲットはホバリングを続けながら周囲を調べている。どうやら、こちらの正確な位置まで特定できていないようだ。ターゲットはゆっくりと上昇をしながら尚探索が続いている。

「——全機、準備はいいな？」

「——ブラボー2、移動完了、いつでも行けるぜ」

「——ブラボー3、いつでも狙撃出来る」

「——ブラボー4、支援位置に付きました」

全機が配置に付いたのを確認した部隊長は跳躍^{ジャンプ}ユニットを点火。排熱を感知したヴィクターがブラボー1の目の前に飛び出る。

「今だ——ブラボー1、フォックス3ッ——」

「ブラボー4、フォックス3——」

突撃砲の36mmチエーガンの斉射をターゲットであるヴィクターにぶつ放す。後方のブラボー4もそれに同調して支援砲撃を開始。ヴィクターは二機からの砲撃を下げ、言ったん高度を下げた。

（馬鹿め、誘い込まれたとも知らずに——っ！）

初撃はあくまでターゲットの中尉をこちらに引き寄せ、尾根に隠れているブラボー2、3の存在を隠すためだけのものだ。そして回避するために高度を落とした先には……。

「——間抜けめっ！」

「——背中が丸見えなんだよッ——！」

突撃砲4門を構えたF-22A^{ラプター}が二機、待ち構えている。ヴィクターが有効射程圏内に入った瞬間、計8門による同時斉射がターゲットを撃墜した……。

ヴィクターのコックピットで龍は落胆していた。

「——ふん、米国ご自慢のステルスも所詮はこんなものか」

前評判の割に歯ごたえが無さ過ぎた。正直、見かけ倒しとしか言いようが無かった。

（ま、最初から勝者の決まった戦いだつたがな）

この勝負は、隠密行動をしてこちらを探っている米国の特殊任務部隊を龍が見つけた段階で、決まっていた。そして、馬鹿にもこいつらはヴィクターに対して真つ向から喧嘩を売ってきた。売られた以上、買うのが礼義であり、それが龍の流儀でもあった。そして、ヴィクターの右腕に装備されたMONLIGHTで管制ユニットを串刺しにされたF-22Aを眺めながら、龍は続いて言った。

「——第四計画のためにもお前らにはここで消えてもらわないと困るんだよ」

串刺しにしたF-22Aを放り捨て、腰のウェポンラックから051ANNRを装備すると、後ろからコソコソと砲撃を続けているもう一機に照準を合わせた。いくらステルス性でレーダーに見え難いといつても、砲撃をすれば銃口炎は見えるし、主機や跳躍ユニットを動かせば排熱を赤外線センサーが捉える。振動・音響センサーは戦場から響く爆発や弾着音で当てにならないが、雑音をフィルタリングすれば有る程度は聞き取ることが出来る。さらに、ヴィクターに搭載された統合アビオニクスと脳直のインターフェイスがあれば、山中に身を隠す戦術機をピンポイントで狙撃する事など造作もない。放たれた徹甲弾がF-22Aの右肩の付け根を貫通し、駆動系を殺した。龍はQBで機体左側面に回り込むと脇からレーザーブレードを突き刺し、管制ユニットの衛士を蒸発させた。

「——第五計画の差し金だろうが、まあ自分たちの運命を呪うんだな」

既に広域ジャミングを掛け、外部との連絡手段を断っている。

36mmチーガンの斉射もコジマ粒子によるPAが弾き飛ばす。先程の一斉射も同様に防御し、F-22Aを串刺しにした。

「——さて、外に情報を流される前に、片づけさせてもらうか」

連続QBで、残り二機のF-22Aの前に躍り出る。だが、敵の砲撃はヴィクターには届かない。砲撃の隙間を縫いながら龍はアサルトライフルによる精密射撃で、手前のF-22Aの管制ユニット

を狙撃した。衛士を管制ユニットごと失ったF-22Aが地に墜ちるのを見た最後の一機は錯乱したのか、機体からベイルアウトし、管制モジュールから抜け出した。

「おいおい、敵前逃亡、軍隊なら銃殺刑ものだぞ」
敵衛士のあれえない失態に呆れた。

（だが、まだ衛士が生きているのなら利用価値があるか……労をせずに敵の情報を掴めるかもしれない）

夕呼ははつきりと言っていることはないが、第四計画の進捗状況はあまり芳しくない。今後の考えても今は一枚でも切れるカードを一枚でも多く手に入れておく必要がある。そう結論付けた龍はパイロットスーツの気密を確認すると、コックピットのハッチを解放、ヴィクターを自立モードに切り替えた。コックピットに常備させてあるFNPP90と専用弾倉を手にしてコックピットから這い出ると、森の中へと逃げ込もうとしている敵衛士に対して威嚇射撃を行った。50発の28mm弾が地に風穴をあける。

「止まれっ！！ 次は威嚇で済まないぞ」

弾倉を交換し、もう一度退路を断つように威嚇射撃を行う。

「——あいつ等のように死にたくなければ投降しろ」

弾倉を別のものに交換しながら、龍は通告した。敵衛士は持っていた携帯用の小銃を構えると、龍に向けて予告なく発砲した。

「チッ、馬鹿が！」

ヴィクターの肩から飛び降りる龍、着地と同時に前転し衝撃を殺すと、そのまま姿勢を退くして走り出した。銃口がこちらを向く前に龍は敵衛士に向かってFNPP90を斉射した。

咄嗟に敵衛士は横に飛んだが、何発か弾丸を食らい、そのまま地面に落ちた。

「悪いな、今の只のゴム弾だ」

その隙に接近した龍が見事な延髄切りをたたき込み、敵衛士の意識を刈り取った。

「たくつ、手間取らせやがって……」

念のため即効性の睡眠剤を打ち込み拘束しておく。

「保護マスクも付けずに外に飛び出すとは……余程錯乱していたんだろっな」

通常、重金属雲が展開した戦場で、外に出るのはBETAがいない問わず危険な行動だ。もし外に出ている時に36mm弾や120mm弾が直撃すれば骨も血肉も残らず吹き飛ばされるし、粉じん爆発などの危険もある。それ以上に、高濃度の重金属雲が展開している中、エアフィルター無しに外に出れば、あつという前に放射能にやられ多臓器不全を起こし、例え生きて帰っても苦しみながら死ぬことになる。ある意味BETAに食い殺されるより辛い死に方だ。

「――馬鹿が、あの時さっさと逃げ帰っていれば良かったもの……」

龍は撃破されたF-22Aを眺めながらそう呟いた。その呟きも戦場の砲撃と爆音によって掻き消された。

――BETA上陸から約2時間、圧倒的な物量で上陸してくるBETAによって一時は防衛線崩壊の危機に直面した帝国軍だったが、タイミングを見透かしたような国連軍の来援により、戦線の立て直しに成功。またヤンキー・ステーションに配備された米海軍第三艦隊が突如来援に現れ、エンタープライズ級正規戦術機母艦1隻とニミッツ級正規戦術機母艦2隻から計二個大隊規模の戦力を戦線に投入、及びモンタナ級戦艦と複数の砲艦による飽和砲撃を持って戦列に参加。結果、防衛線は再構築され、向こう2時間にも及ぶBETA上陸阻止に成功した。

一足早く戦線を離脱していた龍はCICに詰めていた鎧衣に連絡し、夕呼への手土産の輸送を頼んだ。

（後始末は鎧衣に任せて問題ないだろう。奴とて帝国と米国の間に厄介なしこりを作りたくはないだろうからな）

撃破したラプターは全て秘密裏に横浜基地まで搬送される手筈と

なっている。そしてこの戦闘の起きたこの場所も、今は帝国軍の砲撃地点となっている。勿論、戦闘の痕跡は鎧衣たち情報省が隠匿してくれた。

（第三艦隊の来援はこの部隊の上陸が本来の目的……そう考えるのが妥当だろう）

二個大隊規模の来援も隠密部隊上陸を隠すためのものだったに違いない。そして、米軍は早い段階から偵察を行うために第三艦隊を動かしていた。いくら機動力に優れた母艦打撃群といえども、BETAの上陸開始から来援までの時間が余りに短過ぎる。何らか理由があつて前もつて展開、もしくはその準備をしていたと考えるのが妥当だ。

「ま、蓋を開けてみれば、骨折り損のくたびれ儲けだったわけだが……」

向こうの思惑はどうあれ、出鼻を挫いてやったことに変わりはない。これで米国は貴重なラプターを失っただけでなく奪取までされ、ヴィクターのECMによつて手に入るはずだったヴィクターの情報すら入手に失敗した。

（だが、これで確実にヴィクターはマークされる。あらゆる手を使つて第四計画に探りを入れてくるな……）

この事は鉄原ハイヴを落とした段階で確定していた事実だが、ラプターの撃墜がそれに拍車をかけてしまった。

「こりゃ、今以上に鎧衣に頼らざるを得ないな……」

あの食えないおっさんにまた借りを作ると思うと、憂鬱になる。

「——ま、なるようになるか」

今考えても仕方が無いことだ。龍はそう割り切るとヴァルキリーズ・ホワイトファンングズ両部隊と合流するため、機体を動かした。既にBETAの上陸は中隊程度の小規模なものになりつつある。その傾向を確認した帝国軍は各戦域にて順次残敵掃討に移行している。確実に戦闘は収束に向かつていた。

（米国には悪いが、米海軍の来援の貢献は大きいな）

来援部隊の構成する戦術機は海兵隊仕様のF-18E/Fだった。二世代戦術機の中でもコストパフォーマンスに優れ、安定した性能を誇るスーパーホーネットは米海軍の主力戦術機であり、旧型第二世代戦術機として各国で採用されている。スペック・コストパフォーマンス両面において優秀な戦術機だ。

さらにモンタナ級戦艦と母艦打撃群の砲艦による支援砲撃も非常に九州防衛戦に貢献した。

国連軍と米海軍の来援により崩壊しかけていた戦線は立て直され、2時間にも及ぶ激戦に耐える事が出来た。

（これで少しは帝国の反米・反国連風潮がマシになればいいが……）

——米国や国連と過去の因縁が大き過ぎる国だ。この国に根付いた風潮はそう簡単には拭い切れないだろう。

「——そこは俺が気にするところではないな、とりあえずさっさとやる事を済ませてしまおう」

そう言うつと龍はヴィクターを後方の部隊集結地点に向かった。

終結地点に到着した龍が見たものは、破損した戦術機や戦闘車両、そして負傷した兵士の山だった。医療区画の方から悲鳴や苦痛に歪んだ怒号が引つ切り無しに聞こえ、周りには収まりきらなかった負傷兵が横たわっている。その周りを明らかに人数不足の衛生兵が走り回り、足りない医療品をやりくりしながら治療を行っている。

（まさに野戦病院だな。血と硝煙の臭いがプンプンしやがる）

通常の神経の持ち主なら、腰を抜かすか泣き叫んでもおかしくない状態だ。だが、龍は平然とその中を歩いて行った。いくつものテントの間を進んでいるとテントの横で倒れている兵士が目に入った。

「……………」

力なく口が開き、その目は限界まで見開かれている。

（死んでいる……）

治療を施された形跡のあるその兵士は、そこで誰にも看取られずに死んでいた。恐らく肘から下が無い右腕と脇腹からの出血が死因だろう。龍はその兵士に近付くと、見開かれていた目を閉じさせ、静かに黙祷した。生者である龍が死者であるこの兵士にしてやれる唯一の行為だった。黙祷を終えた龍は近くの兵士に遺体の搬送を命令すると、戦術機の補給が行われている区画に向かった。

区画の外れに、戦闘を終え、補給と休息を取るヴァルキリーズ・ホワイトファングズの姿があった。連戦続きの彼女たちだが、まだBETA上陸の恐れがある以上いつでも再出撃できるよう準備していた。

（後始末は帝国軍がやってくれるというのに、生真面目な連中だ）

龍は彼女たちを見てそんな感想を抱いた。

「あつ、少佐——っ！」

逸早く速瀬が龍を見つける。目敏い奴だ。

「今さらいけしゃあしゃあと現れて……」

速瀬の右手によって潰されたドリンクパックから中身が噴き出す。

「おいおい、上官に対してその口の聞き方は何だ？」

ぐつつと悔しそうな顔を上げながら速瀬が謝罪した。余り階級には拘らない性質だが、こういった時便利で助かる。龍は両部隊に対して敬礼した。

「どうやら、欠員なく戦闘を終える事が出来たようだな……」

「はっ」

伊隅や唯依、隊員達が一斉に敬礼する。速瀬と違い、上官には最低限の礼儀をするようだ。

「篁中尉、改めて礼を言う。緊急的な措置だったとはいえ、指揮系統の統一に同意してくれたこと、感謝する」

「——はッ！」

教本通りの形にはまった敬礼をする唯依。それを見た龍は一步踏み込み、唯依にだけ聞こえる小声で今の礼に付け足した。

「——だが、忘れるな……貴様の行為によって命の危険にさらされ

た者もいるという事を」

「——っ！」

唯依の肩がピクツと反応した。が、構わず龍は続けた。

「——取捨選択、軍人なら割り切れ。それが上に立つ者の務めだ」

「——っ！？」

唯依は頭を下げ、齒を食いしばる。さらにもう一言龍は自分の発言に付けたした。

「——まあ、これはあくまで軍人としての主観だ。俺個人としての主観は、また別にある」

「——えっ？」

「——速瀬と夜神、二人を救援してくれたこと、礼を言う。お陰で俺は部下を……仲間を失わずに済んだ」

「——っ」

「感謝する、インベリアルロイヤルガード帝国近衛軍の名に違わぬ勇敢な行為だった……」

「——ッ?!」

龍の思わない賛辞を聞いた唯依の頬がポツと赤く染まった。

「——見方を変えれば、只の愚行ともいえるがな。ま、そう言うことだ、精進しろよ近衛インベリアルの衛士」

言うべき事を言い切った龍は固まっている唯依を放って集まっている隊員に対して命令を出した。

「悪いが、今からやることがある。全員一か所に集まって整列しろ！」

意味の分からない命令だが、上官の言う事には逆らえない。言われた通りに整列する彼女たち。

「よし……」

龍は腰にぶら下げていたトランシーバーを手にとると無線を開いた。

「——こちらの準備は出来た。早速始めてくれ」

その直後、龍の背後から複数の車両が現れた。

「えっ！」

「ちよつ!？」

「な、何ですか!？」

突如として現れた車両はどれもこれも皆消防車や放水車等の、とにかく水を出せる車両ばかりだった。さらにそれに続くように完全防備した謎の集団が現れた。皆白い防護服を着用し、顔には全面マスク、背中には酸素ボンベを背負っている。防護服を着た一団はすぐさま消防車を動かし、放水準備を始める。ホースの先は戦術機……とその衛士である彼女らに向けられた。

「——草薙少佐、放水準備完了しました」

「よし、放水開始つ!！」

一斉にホースから大量の清水が噴き出す。放水の的となった彼女らはまるで滝に打たれていると錯覚するほどの水量を浴びせられた。20秒ほどの放水時間を経た彼女らの全身は完全にびしょ濡れであり、かなり色気を誘う光景となっている。

「な……何ですか、これはっ?!」

「見て分からないか、水をぶっ掛けているんだ」

「その理由を聞いているんですッ!！」

「ひ、ひどいですよ、少佐っ!！」

「右に同感です、少佐……」

皆、口々に文句を口にする。

「——いいか、これはお前らを持つての事なんだぞ」

龍は面倒くさそうに説明を始めた。

「ヴィクターの異常な性能はもう既に周知の事実だろうが、その異常な性能を支えているものが何であるか……お前らは考えたことがあるか？」

龍の言葉に全員が豆鉄砲でも食らったかのような顔をした。

「——ヴィクターは、その圧倒的な戦闘能力を獲得するため、大量の汚染物質をばら撒くジェネレータとエンジンを搭載している。」

「お、汚染物質って……」

「イメージとしては……放射性物質とか何らかの形で肉体に悪影響

を与えるもの、とても認識しておいてくれ。ともかく、ヴィクターが戦闘を行えば、大なり小なり戦域に汚染物質がばら撒かれる」

「ちよつと待つてくださいッ！！　じゃあ私たちは……」

「安心しろ、人体に悪影響が及ぶような高濃度の散布は行っていないし、お前たちは戦術機のエアフィルターのお陰でそこまで汚染されていない……はずだ」

言葉と言葉の間に出来たいやな空白が彼女らの不安を煽る。

「だが、万が一という事もある。だから安全を期すため、こつやつてわざわざ洗浄作業をしているんだ。黙って洗われている」

再び放水が再開される。

「……少佐……」

水の中から呪いのような声が聞こえてきた。

「あの機体に乗っているということは……少佐も少なからず汚染されているですよ？」

「ああ、そうなるが……それがどうした？」

「そうですか、じゃあ……」

水の中から四本の手が飛び出し、龍の両腕を取り押さえた。

「少佐も洗浄しないと駄目ですよネッ！！」

「ええ、絶対にそうです——ッ！！」

「お、お前ら——ッ？！」

龍の両腕を拘束した速瀬と栖川が龍を水の中へと引きずり込む。

「おい、伊隅！　こいつらを止めるッ！」

「……」

伊隅は龍に背を向けると両手を耳に当てた。

「——私は何も見ていない……何も聞いていない」

「おい、伊隅——ッ！」

コイツ見て見ぬふりをする気が……！

「クソッ、関節を決めやがって……いい加減解放せ——！」

「離せと言って離しますか——ッ！」

「日頃溜めている鬱憤、晴らしてやる——ッ！！」

龍の押さえられた腕に力が加わっていく。女性といっても日々鍛えている二人の力だ。その上、関節を決められたら、いくら龍でもそう簡単には抜け出せない。さらに……。

（こいつら、少しは恥じらいというものを持てよなっ！?）

珍しく龍は動揺していた。押さえ付けられている腕に力が掛かれば掛かるほど、速瀬と栖川の双丘がグニユリと腕に押し付けられ、柔らかな暖かい人肌の感触が強化装備の保護皮膜越しに伝わってくる。

（そういえば、強化装備の保護皮膜は羞恥心の鈍化……なんて効果を狙っている面もあるって資料に書いてあったな）

なるほど、確かに戦場に男女の区別がある事など殆どない。このご時世だ、納得のいく処置といえるだろう。だが……。

「伽耶、少佐を押さえて……っ！」

「は、はいです！」

後ろから豊満で熟れた果実を実らせた天上院が抱きついていく。押さえているというよりは、縋りついているといった方が正しいような抱きつき方だ。

（おゝまゝえゝらゝ!!）

振り払おうと思えば振り払えるが、か弱い一言が似合う天上院に乱暴するのは気が引けるし、速瀬や栖川が鬱憤を溜めている事も理解しているのでどうにも反論しづらい。結果、そう悩んでしまい行動できない龍は何も出来ずに女体に抱きつかれたまま耐えるしかなかった。

結局、なんやかんや言って人が良い龍である。

洗浄が済んだ後も龍を押さえつけている先任や同期を眺めていた風間は流石に止めた方が入った方がいいと思い、三人を止めた入った。

「あ、あの……」

「いや、まだ禱子……」

「そうよ、待ちなさい禱子……」

それを両側から止めに入る宗像と夜神。二人とも笑みを堪えた顔をしている。

「え、でも……」

「まあ、禱子。ここは何もしないでおく方がおも……いや、皆のためだ」

「そ、そうでしょうか？」

「そうなのよ」

「で、でも……」

禱子の視線が自然と龍の方に流れる。

「——ふん、やっぱり禱子……少佐に気があるの？」

「えっ！？　そ、そんな、私は——っ！」

「慌てているところが尚怪しいわよ」

赤くなった顔を両手で隠しながら夜神の追及を逃れる風間。夜神はそれを面白がってさらに苛め、それを複雑そうな顔をした宗像が眺めていた。

伊隅は部下共の失態を見て、ため息を付いた。

少し離れた場所でヴァルキリーズのじゃれ合いを眺めていた唯依は先程の龍の言葉の真意をずっと考えていた。

「……………」

だが、何度考えてもあの言葉からそれを読みとることはできない。これが彼の言う経験の差、というものなのだろうか。

「——篁中尉」

ポンと左肩に手が置かれる。振り向いてみると副官である雨宮中尉が立っていた。

「無事に生き残れた……今はそれで良しとしましょう。答えを探すのはこれからでも出来るわ」

「雨宮中尉……」

「ね……？」

雨宮中尉の優しい言葉が唯依の心に染み渡る。唯依は小さく頷くと再び顔を前に向けた。その顔には今までにない新たな思いがあるように見えた。

BETA上陸から約6時間後、帝国軍は上陸の終息とBETA殲滅を宣言した。この九州防衛戦で帝国軍は少なからずの損害を受けたが、国連軍と米海軍の来援によりその被害が抑えられたことは言うまでもない。だが、表向きには存在しない記録である水面下で起きた第五計画推進派の尖兵と第四計画の番犬との戦闘、そして人類初のG弾に頼らないハイヴ攻略によって、この世界のベクトルはゆっくりと……だが確実に変わり始めた。

Episode 13 (後書き)

長かった九州防衛戦も完結！

そして、今話長過ぎてすいませんっ！

次は次章突入！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7968s/>

Muv-Luv Alternative for Answer

2012年1月8日00時52分発行